

PSYCHO—PASS Sinners
of the System[case.4
再会の白] —Reunited
with White

鈴夢

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

表紙

イメージイラスト

White and white

P S Y C H O — P A S S W h i t e r e f e r e e
の続編になります

・・・・・・・・

原作の劇場版　S S シリーズの4作目があつたら、
という事で舞白編を作つてみました

時系列は原作通り、S S シリーズの3作目（2117年11月）の後、と考えていた

だけたら良いです

・・・・・・・・

2118年2月　舞台は新疆ウイグル自治区
狡噺と別々の道を選び約2年後の話です

世界で最も危険な地区と言われている場所で
舞白が立ち向かうものは？

そしてそこに現れるのは一係監視官　霜月美佳

同じ年で同じ境遇の2人が

現地でどんな事件に立ち向かうのか？

狡噺舞白×霜月美佳
W主役になります

目

次

1章

白銀の”少女”	健全な会社
消えない刻印	健全な薬品
腐敗した刻印	崩れる微笑
新制一係	任務完了
臆病な強面	偶然の出会い
正義の味方	面影
トランスペアレント	負の連鎖
作戦会議	3章
漂流する薬品	良いコンビ
兄と妹	最低最悪な状況
兄を知る者	血に塗れた要塞
兄のスパイ	日本のスパイ

2章

健全な会社	健全な薬品
崩れる微笑	——
任務完了	——
偶然の出会い	——
面影	——
負の連鎖	——
3章	——
良いコンビ	——
最低最悪な状況	——
血に塗れた要塞	——
日本のスパイ	——

200 192 180 170 162 151 140 128 122 109 99

薬品に勝る抱擁	朝陽と共に
歴史に喰われた男	降り立つ5人
予想外の人物	
力タルシス	二度と離さない
彼女の気銳	
大海の木片	
破天荒な男	
あの子の兄	
衝突	

417 411 403 392 385 374 363 356 350 340 334 323

イマンシペイション

再会

7章

安息

ずっとそばに

光芒の先に

芽生えた友情

爾今の歯車

伝染する色

私にしかできないこと

8章

秘められた愉悦

496 488

482 474 466 460 452 446 439

430 424

最終章

郷里へ還る

監視官補佐

監視官権限

僥倖の再会

真白な君

再会の白

狡噺舞白

547 538 531 525 518

508

1章

白銀の”少女”

・・・・・

2118年 2月 新疆ウイグル自治区

中国北西部にある自治区、砂漠や山が広がり今の時期は雪と氷に覆われていた。テュルク系のウイグル族を含む、多くの少数民族が住まいとしていた。

そしてかつては中国と中東を結ぶ古代のシルクロード交易路の一部もあり、オアシス都市であるホータンやカシュガルなど長く繁栄していた自治区でもあった。しかし、長く続く紛争

人権問題、ジエノサイド…

臓器販売、あっせん、人身売買、薬物問題、貧困、
さまざまな問題に襲われている都市のひとつとして成り代わる。

アジア圏で、一番危険な地域だと世界で言われ続けていたのであつた。

????????????????
激しい吹雪が吹き荒れる中、

一人の人物が体を休めようと寂れた町を歩いていた。

そして、営業しているであろう酒場を見つけると
扉を開け、中へと踏み入れる。

「温かい馬乳酒を貰えますか？」

寒さを凌ぐために足を踏み入れた人物

動物の皮で作られた防寒具、

フードを深々と被り、同じ素材のマスクで顔を覆っていたため
目元しか確認はできない。

男か女かも分からず店主は不審に思いながらも、言われた通り馬乳酒を準備し始めた。

店内には既に酔っ払っている男たちで溢れかえる、

しかし騒いでいるわけなく、仲間たちと静かに飲み交わしている様子。

入ってきた見慣れない人物に、皆釘づけになっていた。

ぽつんとカウンターに一人で座る人物、

徐々に体が温まってきたのか、防寒具を脱いでは隣の椅子に置く。

「……おい、あれアルビノか?」

「でも瞳は紅くない、でも異常に白い」

テーブル席で飲んでいた男たちが、

その人物の姿を見るとコソコソと容姿について話し始める。

そう言われ慣れていた人物は、何食わぬ顔で出された馬乳酒を口に含む。

「……ふあ～……温かい……」

日本語でハツキリとそう呟く。
体の芯まで冷えきっていた体が、一気にポカポカと暖かくなつていく感覚に柔らかい
笑みを零していた。

「…綺麗な銀髪にその肌の白さ

お前さん、日本人のアルビノかい？」

やけに髪を蓄えた強面の店主がグラスを拭きながら
その人物に声をかける。

「私は確かに日本人だけどアルビノじやないですよ」

馬乳酒の入ったカップを机に戻し

店主に笑みを向ける。

「…早くこの店から出た方がいい

ここには人身売買や臓器販売のあつせん……」

「大丈夫大丈夫、

…それよりお願ひがあつて、一晩だけでいいから泊めてもらいたくて……
刹那、その人物の背後に数名の男が現れる。

一人のスキンヘッド姿の男が、カウンターに座る人物の肩にゆっくりと手を乗せトン
トンと叩く。

話しをしていた店主も、何かを恐れるように
目の前から離れると、不審に思つた白髪のその人物は
ゆっくりと振り返る。

「よお……お兄ちゃん?

いい話があるんだが……こつちで一緒に飲まないかい?」

背後の男たちはやたら大柄で体格もよく

さすがに、周りにいた客たちも

あの白髪の坊ちゃんはひとたまりもないだろう、なんて呴かれていた。

「えっと……

……ちよつと疲れてるし、1人で飲みたくて……」

肩に乗せられた手を自分の手で振り払い、ごめんなさいと謝りを入れ
再び目線をカウンターの店主へと向ける。

「おじさん! 馬乳酒おかわり……」

バンツ!!!!

刹那、テープルを激しく叩く音、

両隣、背後を男たちに囲まれ、店主もその光景に怯えていた。

「……俺たちのせつかくの誘いを断るつてか、アア??
なんでこんな所に日本人がいるのか知らねえが、
お仲間に入れてやろうとしてやつてんだぞ?」

はあー…………

と盛大なため息を吐くと、

リーダー格らしき背後の男の腕を掴み、ゆっくりと立ち上がる。

「?…………痛…………ツ…………

…………なんだ!?この坊主…………ちっこい体からこんな力…………

メキメキと音を鳴らす男の腕、

白髪のその”坊主”は不機嫌そうな顔で男を睨みつける。

「……私は”兄ちゃん”でも”坊主”でもない……
私は女なんですけどーー!?この阿呆ーー!!」

そのまま腕を両手で掴み、テーブルが立ち並ぶ広い空間へそのまま投げ飛ばす。
ざつくりと、ボブあたりまで切られた白銀の美しい髪の毛。
よく見ると華奢な体つきに、長いまつ毛、

知性を感じさせるような涙ボクロ、矯正された美しい顔。
女と分かれば、店内の男たちは怯えるものもいれば、
殺つてしまえとナイフを取り出すものも現れた。

「ちょ、ちょつとお客様！」

店内で暴れられたら困るよ！」

店主は、カウンター内で怯えるように白髪の女に訴える。
その女はニコッと笑みを向ける。

「大丈夫、物は何一つ壊さないから」

余裕そうな振る舞いとその言葉に、苛立つたスキンヘッドの男は懐から小銃を取り出す。

「オマエら、コイツの臓器、全部引き摺り出してやるぞ」
容赦なく発砲されると、慣れたように交わす女

壁に銃痕が残れば、

店主に手を合わせて謝る仕草を見せる。

「なめやがつて……さつさと殺せ!!」

スキンヘッドの男が叫ぶと複数の男達が次から次へと襲いかかる

「……8人…、大丈夫

全員全裸で外に放つちやおう」

襲いかかる男達を、いつも簡単にねじ伏せていく
無駄にガタイは良いがやたら弱い、

いや、その女が強すぎる。

打つて変わつて、怯えるように身を隠す男達はその光景に驚きを隠せない。
誰一人とその女に触れることすら、

そして店主の願つていた通り、物を破壊されることも無くねじ伏せていく。

リーダー格のスキンヘッドの男は仲間全員が、
氣を失い、床へと転がる中

圧倒的力の差に、若干怯えた表情を向けていた。

「……まだやる？」

パンパンと両手を払いながら

銃を握り続ける男に目線を向ける

「……クソつ……クソツクソツ……クソがアアアアアアアア!!」

諦めが悪いのか、再び銃口を向け

トリガーを引こうとする男。

間に合わないと察した女は、持っていた小銭の入った小袋を相手の手元に思いつきり投げつけと、そのまま体ごと突進する。

呆気なく床に倒れる男

そして形勢逆転、女は男の握っていた銃を男の額に向け、ニコニコと笑みを向ける。

「…全員全裸で外に出されると、

黙つて仲間たちを連れてここから去るの、どつちが良い？」

力チャツと、安全装置を解除すれば、更にグツと銃口を突き付ける。

悪魔的笑みに恐怖を覚えた男は、後者を選択し
すぐさま仲間たちを叩き起こすと店から出て行つた。

?????????????

「おじさん！ごめんなさい、そこの銃痕……

……その分増しでお金は払うから……」

唖然とする店内に残った客たち、そして店主。
お金をテーブルに置くと、何事も無かつたかのように
ニコニコと笑みを向ける。

「あと一・さつきの話の続き

ここに泊めて欲しくて、さすがにこの吹雪の中、もう歩く気力も全く残っていないし
……お願ひできませんか？」

「あ……ああ、勿論……大丈夫だ

……えつと、兄ちゃんじゃなくて……」

「名前はマシロ、日本語だとね

舞う白つて漢字で書いて舞白つていうの
歳は22、この国に来てもう暫くたつてるただの放浪者
怪しいものじやないでしょ？ね？」

先程の行動からは考えられない茶目つ氣のある姿に、
店主もホツと胸を撫で下ろす。

悪い人じやないと分かれば、店主も笑顔を向けると
握手を交わす。

「俺はこの店のオーナー、テソンつて言うんだ
怪しい者だと疑つて悪かつたよ、舞白」

打つて変わつて可愛らしい姿を目にした客たちも、再び楽しそうに酒を飲み始める。
出された馬乳酒を再び口に含めばそのままカウンターに突つ伏し瞼を閉じた。

消えない刻印

・・・・・

シーアンで兄と別れて約2年が経過、
あれから舞白は、甘粛省周辺の紛争地を放浪し
様々な出会いや別れ、危険な場所を次々と転々としながら
何とか生き延びていた。

そして、ここ2日前ほどにたどり着いたのは、新疆ウイグル自治区。
圧倒的に他の場所に比べて、危険度は高く、
既にここ数日で命の危険を感じていた。

どうしても、この紛争地ではまだ女性の立場が圧倒的に弱い、
それを隠すためにも長い髪の毛を切り落とし、
うなじが見えるミニボブ姿に。

強靭な強さに、高めの身長に、男性と見られることは多いが

舞白は心の奥底でそう見られることを嫌っていた。

仕方の無いことだと言い聞かせるが、自分は女性。

まだ世界では女性は弱い立場だと知ると、悔しくて仕方なかつた。

・・・・・

「……ん……」

あまりに疲れていたのか、いつの間にか瞼を閉じていた。

カウンターに突つ伏していたせいか、やけに首が痛い。

暖かい毛布がかけられていて、店内には既に客の姿はなく、

店主の姿もなかつた。

傍らにメモが置かれている

”目を覚ましたら2階に来なさい”

恐らくあの強面の店主……テソンだろう。

あんなに見た目は怖いのに、臆病だった店主の姿を思い出し、思わずクスクスと笑つてしまふ。

親切に着ていた防寒具は、丁寧に乾されており、
テソンの人柄がうかがえた。

メモに書かれている通り、2階に繋がってるであろう扉を開け階段を上る。
登つていく度に暖かい空気が漂う。

「……お邪魔しまーす……」

そつと扉を開けて中へ入ると、

古びた暖炉の傍で寝転ぶテソンの姿。

キッチンには小鍋が置いてあり、

ウイグル料理のチョチュレの香りが漂っていた。

部屋の時計は、朝の4時半を指していた。

わざわざ起こす訳にも、と思い

そつと1階に戻ろうとすると

気配に気づいたテソンは、身を捩らせゆっくりと起き上がる。

「…起きたのか、マシロ…」

「すみません、毛布まで……

それに濡れてた防寒具も乾かしてくださいさつて……」

大柄な男は、眠そうに体を伸ばすと優しく笑みを零す。

そして舞白へと近づくと、ポンポンと肩を叩く。

「いや～、昨夜のあの動き！

よくアイツらを相手に鬪つたもんだ、

アイツらは厄介な薬物の売人達でな？

……
昨夜もあの場所で密会があつたみたいで、こつちとしてはハラハラしてた訳だよ

さつきまで寝ていたとは思えないほど、明るく話し始めるテソンに驚く舞白。
ゆらゆらと体を揺さぶられるとそのまま朝食を、と

テーブルへと促される。

「そんな豪華なものは出せないけど

残り物で申し訳ないけど、食べてくれ

昨日、アイツらを追い払ってくれた礼だ」

久しぶりに口にする温かい料理に、ホツとする舞白。

丁寧に合掌をして口に含む。

あまりの美味しさに表情が綻ぶ。

「……美味しい、とつても美味しいです」

「よかつた、口に合つたみたいで

おかわりもあるから好きなだけ食べててくれ」

ニコニコと嬉しそうにするテソン。

その笑みに応えるように、舞白は次々と料理を口に運んだ。
そして、不意に部屋の隅に置かれていた写真に目を向ける。

若かりし頃のテソンと思われる人物、そして：

妻だろうか？とても美しい女性に、間に挟まれるように写っていたのは小学校低学年
程の娘。

この家に2人がいるような面影はない。

おそらく既に……

特に触れないように目を逸らし食事を続ける。

?????????????

???????????

「…………それで、私はここにたどり着きました」

食事を終えると、今までの経緯を簡単に話す舞白。

テソンは真剣に聞き入り、時たま悲しそうな表情も浮かべていた。

「よくこんな危険地帯に女の子ひとりで……

あれだけ強ければ関係ないかも知れないが……」

「でも本当この辺りは噂通り、他の場所とは比べ物にならないくらい危険ですね
女性だと分かれば恐らく何処でも襲われるだろうし、
街中では女性の姿はあまり見かけませんでした」

「なかなか女の子ひとりで出歩くもの好きはないなさいさ、

特に夜はね」

ざつとこの辺りの状況を耳に入れると、

舞白は懐からボロボロの写真を取り出せば、テーブルに乗せてソンに問いかける。

「……」の焼印、もしく刺青でも、マークでも見覚えは無いですか？」

とある女性の背中に入れられた痛々しい焼印の写真。
”？”という特殊な漢字を中央に、

鎖で巻いたような独特なデザインの印。

「実は甘肅の街で知り合った女性に話を……」

ガシャンッ！

写真を見たテソンはなにか怯えるように、持つていたカツプを床に落とす。

突然の事に舞白も言葉を止めると、テソンに駆け寄り、床に散乱した破片を拾い集める。

「テソン……さん……？」

写真から慌てて目を離すテソン。

何かを思い出したような、そんな様子に舞白は敏感に気づく。

「……？（サン）……、アイツらには関わらない方がいい
いくらアンタみたいに強くても……」

様子がおかしくなつていくテソンに、これ以上この話はダメだと判断するとすぐに写真をしまう。

そして微かに、体を震わせるテソンの背中を優しく摩る。

((……サン……、

……あの子が話していた事と同じ……))

かつて知り合つた女性の話を思い出し、

テソンが言い放つた名前と同じだと理解する。

「……めんなさい、突然変なことを聞いて」

「い、いや……俺もつい、

……少し眠らせてもらうよ

……舞白、君は落ち着くまでここで体を休ませたらいい
突然悪かつた……」

そそくさと席を立つと、寝室であろう部屋へとテソンは消える。

舞白は割れた破片をテープルに纏め、再び椅子に腰を下ろす。

暫くすると、部屋に差し込む陽の光。

舞白は睡眠の邪魔にならないように、と

1階へ戻ると、自身の銃やナイフの手入れを始めた。

・・・・・

「私はあそこから逃げてきたの

……妹と母を見捨てて……

……今しかないって、2人を見放したの……」

記憶の中の女性が舞白に訴えかける。

「アイツらは人間じゃない

人をモノみたいに……痛めつけて、洗脳して、犯して、

要らなくなつたら生きたまま切り開いて……」

とめどなく溢れる涙

「私も何度も殺されかけた、目の前で犯される妹、まだたつた9つの女の子よ!?
なのに私は……見捨てたの……」

舞白の服の襟を掴み、何度も訴える姿。

「お願い……母と妹を……」

友達を……助けて、助けて、舞白

……貴方にしか頼れないの……もうこの世界は
壊れてるの」

???????????

「ツ……んぐ……う……」

首から頭にかけて激痛が走る。
しゃがみこんで首を押さえ、何とか痛みに耐える。

手入れをしていたナイフが手元から落ちると、
カラランカラランと音が鳴り響く。

(……私……また気を失つて……)

気づけば外はすっかり明るく、

珍しく吹雪も止んでいるようだつた。

落としたナイフを拾い上げ、ゆっくり体を起こすと、

2階へ続く扉の前にテソンの姿があつた。

「……テソンさん、

すみません、勝手にこちらをお借りしてました

もう体もしつかり休まりましたし、私はこれで……」

「?について、聞きたいことがあれば話す」

「……でも……」

「もし、妻と娘を……助けられるなら……

……たとえ死んでいたとしても……何か手がかりが……」

苦しそうな表情をうかべるテソン。

先程まで、あそこまで拒否反応を示していた彼が
何かを話そうと決心をしたようだつた。

その気持ちを無駄にするわけにはいかない、

舞白は話を聞こうと、彼について行く。

・ · · · ·

腐敗した刻印

・・・・・

2118年 1月某日 午後3時 東京

廃棄区画で見つかった複数の密入国者。

しかし、それは生きた者ではなく死人。

近年まで鎖国状態だった日本も、

少しづつ諸外国との外交を始めると、必然と様々な事件も増える。

その様々な事件、

扱うのは勿論、公安局刑事課。

休みも返上で明くる日も明くる日も事件に立ち会う日々。

そんな日々に疲れた様子の霜月美佳。

「最近多いな、ＩＤ無しの密入国者の死体……」

「……こいつらも名前も国籍も不明の正に名無し……つて
おい、霜月、大丈夫か？」

執行官　宜野座伸元、

死臭が漂う薄暗い部屋で、気分の悪そうな霜月を見ると
思わず手を伸ばす。

「大丈夫です、お気遣いなく……」

パツとその手を払い、いつもの精神安定剤をまるで菓子感覚で口に含む。
上司でも相方でもある常守朱も、この日はほかの事件で駆り出され
まさに本当の人手不足状態に陥っていた。

「とにかく、後は鑑識ドローンにお願いして
私たちは次の現場に……」

「そつちは既に二係に手配してる、俺たちはこの現場を何とかしないと」
「…………はあ……」

いつもなら二係に事件を手渡すくらいなら、と真っ先に事件現場に直行していたが、
どうやらそんな余裕も無くなっていた。

その様子を十分に悟った宜野座は、

鑑識ドローンの結果をデバイスにて確認する。

「死亡推定日は殆どが5日以上経過

この中にＩＤを持つものは誰一人おらず、

…まあ見るからにアジア圏の奴らだろうけどな

どのように入国したかもまだ足取りが掴めん」

「……まあ、彼らだけでここまで来れるなんて有り得ない

きつと日本側から何者かが手引きしてるわ」

ハンカチで鼻と口を押さえ、死体に触れる霜月。

今までの彼女では考えられない行動に、宜野座はふと常守を思い出した。

数々の事件を解決し、ここ最近ではとある施設の秘密を暴き出したり、著しく様々な経験を積んでいた。

過去の霜月は犯罪を未然に防ぐ事が絶対的な正義だと、手段を選ばず無茶苦茶な行動ばかりが目に付いていたが、

今では常守の話に耳を傾け笑みを浮かべるほど、余裕もあり刑事として大きく成長をしていた。

霜月は死体の腐敗状況や死亡原因を探る。するとある女性の左横腹に、何かの焼印の跡を見つけた。

「……何これ？ 刺青……じゃなくて、焼かれた跡……

……痛そう……」

霜月の言葉を聞き宜野座もその死体へと近づく。

「焼印？……」

何かの文字に鎖が巻かれたような印、

腐敗しているせいかハツキリは見えないが、明らかに焼かれた跡に間違ひなかつた。

「……宜野座執行官、そつちの死体も確認して
私はこっちから」

「了解だ」

2人は部屋に転がっている男女数人の死体を見ると、悲惨な状況に2人は目を細めるも、細かく確認していく。

「……」つちの男は胸に大きな縫い跡、しかも雑……

……右腹部に焼印があるわ」

「こつちの女性の死体も

手術痕が複数、左腕に焼印がある」

他の死体も焼印か手術痕のようなものがある者ばかり。

そして部屋を見る限り、なんとか生活をしてきたような様子。かなり切羽詰まつた生活だった様子が伺えた。

「……」の焼印、やけに腐敗してない

……変な漢字、中国漢字？」

デバイスで漢字を読み取ると”?”という漢字が表示される。

「サン、意味は……

……あつめる、あつまる、ひとつの場所に群がる……

何なの？意味不明……」

宜野座は室内に転がっていた薬品を見つけると、照明を当て確認をする。

そして他にも、様々な袋の中から違法薬物などが次々と見つかる。

「鎮痛剤に覚醒剤…日本には無いはずの違法薬物だらけだ」

「……はあ……なんなのよ、もう…」

「……いつらただの死体じやないってこと?」

「恐らくコイツらは内蔵をくり抜かれてる

そして捨てられた、そうとしか考えられない」

「……だから難民の受け入れとか、

そもそも外交なんて辞めればよかつたのに……」

イライラとし始めると、再び精神安定剤を口に放り込む。

その様子を心配する宜野座だったが、何を言つても聞かないだろうと半ば諦めていた。

「とにかく、採取したデータ、

鑑識の結果も解析すれば何かがきっと分かるはずだ

一旦局に戻ろう、監視官」

「……戻つたらシャワー浴びさせて……

臭いで目眩が酷いの……」

「あなたは少し仮眠を取るべきだ

ろくに休んでないだろう」

「事件が休ませてくれないのよ、

…それに、なんであんたの方が年上なのに疲れてないの？不思議…」

ブツブツと言葉を発する霜月を、半ば強引に部屋から連れ出し、助手席へと押し込むと、宜野座は運転席へ。

霜月は助手席の背もたれを下げるとき両手で顔を覆う

そして脳裏に、あの気味の悪いマークがやけに浮かび上がる。

?、サン

あつめる、ひとつの場所に、

それを鎖で巻き付ける

気味の悪い刻印がやたら脳裏から離れず、

公安局に戻つても、気が休まることは無かつた。

・・・・・・・・・・・・・

新制一係

・・・・・

同日 公安局 分析室

データを元に、分析官の唐之杜志恩が

様々な画像や分析結果を画面上に映し出す。

「霜月監視官たちが遭遇した死体

しかし、よく見つけたわね、

体の焼印なんて」

画面に映し出された数々の焼印の写真。

その後シャワーを浴びて少し仮眠をとつたものの、
画像を見るとあの部屋の死臭を思い出したのか、

顔が青ざめていく。

「監視官！大丈夫ですか……」

「気しないで、須郷執行官

……分析官は話を続けて……」

霜月を心配したのは新たに一係へ異動となつた須郷徹平。
元々は二係に所属していたが
征陸の後釜として異動。

そして征、陸は持病の悪化、そして年齢のこともあり
執行官から離れることに。

今は専門の矯正施設で自由気ままに過ごしていた。

「……無理しないでね、監視官、

……で、朱ちゃん達が向かつた現場にも同じような死体
こつちの方が悲惨ね、この男性は目玉くり抜かれてたり、
こつちの女の子は子宮が取り除かれてたって訳……」

「残念ですが、こちらの方が腐敗が酷く

焼印のようなものは見付けましたが殆ど形を為していませんでした」

「須郷執行官の言う通り、本当に酷かつた

……とてもじゃないけどこんなことを日本国内でできるとは思えない
だから、恐らくは……」

「国外で散々な目に合わされて

何故か日本で棄てられた、もしくは逃げてきた
ですよね、先輩？」

口元をハンカチで覆いながら、なんとか話す霜月。

まだまだ常守には負けたくない、そんな気持ちが彼女には残っているのか強気な態度
で発言する。

「その通りよ、霜月監視官」

明らかに体調の悪い霜月をゆつくり支える常守。

その手を払うことは無かつた。

「あと……この人たちが持つてた薬も

分析し終わつたんだけど……

……その中に、よく分からぬ薬物が混ざつてました」

唐之杜の隣で力タカタとキーボードを操作する雛河。

覚醒剤や鎮痛剤はともかく、

薬物に詳しい雛河でも、見た事のない薬が混ざっていることが判明。

「この赤い錠剤、成分も無茶苦茶で

一体何に使うのか……」

……多分だけど、一種の抗うつ剤……かなって」

透明な袋に入れられた、不気味な程真っ赤な薬。

宣野座はあの部屋で見つけた薬を、全て雛河に渡していた。

「もう日本では販売されてないけど

”パロキセチン”の成分にすごく似てて……

……でも少し違つて……、

抗うつ剤の中でも最強つて言われてた。パロキセチン以上のセロトニン作用があると思ひます……」

元はうつ症状の緩和のために使うもの。

しかし何故、大量にこの薬を持っていたのか？

雛河でさえも簡単に成分为解析できないほどの強力な薬物。

「このマークについてはまだ何も解明できていないの

弥生と引き続き解析しておくわ

……雛河君にもこの薬物の解析を

それでいい?朱ちゃん?」

「はい、皆さんよろしくお願ひします

：霜月監視官は明日は休んで、さすがに無理しそぎ」

肩を支える常守、

きつと、この言葉でさえ振り払われると予想していたが、帰ってきた言葉は全く違つた。

「……すみません、先輩

大人しく明日は休みます…」

大人しく支えられている姿、そして常守の言うことを聞き入れる霜月の後ろ姿を、一係の執行官たちは驚いた様子で見ていた。

「あの2人、やつとらしくなってきたじゃない?
ねえ? そう思うでしょ?」

唐之杜は嬉しそうに、分析室を出ていく2人を目で追えば、
笑みを浮かべていた。

「アソツも成長したのさ、今日一緒に事件現場に行つた時も
昔のように無闇矢鱈に突つ込むような言動は一切しなかつた
……まだ多少荒いが……」

明らかに良い意味で変わっていく姿を、見逃す者は誰一人居なかつた。

・ · · · · · · · · · ·

臆病な強面

・・・・・

4年前、突然店に現れたガラの悪い男たち。
奴らは、何も注文せず

ただただ店内を荒らしていった。

そしてこう言つたんだ。

”この店に美しい黒髪の女と、その娘が出入りしている
知らないか？店主　と、

まだ線の細かつた俺は逆らうことも戦うことも出来ず、
2階で生活していた妻のアジャティ、娘のアイをいとも簡単に引きずり下ろし誘拐し
て行つた。

追いかけようとしたが、俺の仲間たちに止められた。

”お前が追いかければ、俺たちの家族も危険だ
……我慢だ、諦めろ、運が悪かつた”と。

今でも、あの時の妻と娘の叫び声が頭から離れない。

夢にも現れる、

あの時何も出来なかつた俺を呪うように
毎日のように現れるんだ。

ここら一帯、ウイグル地区は昔から

少数民族を捕らえるために、複数の収容所が建てられていた。

勿論、全て稼働はしておらず、

時代の流れと共に殆どが廃棄されるか、老朽化で自然に壊れていくか、
大体がそのどちらかだつた。

しかし、1番大きい収容所と言われていた場所では

まだその名残があつた。

そこに女や子供、老人、男

老若男女関係なく無差別に連れていけば何をされているか分からない。

ただ、そこから生きて帰ってきたものは稀、

脱走してきたであろう人間も、見たことはあるがとてもじやないが悲惨な姿だつた。

片目はくり抜かれ、男か女なのか分からぬほど体はボロボロ。

生殖器さえ残つていない、それでも命からがら、あの場所から逃げたい一心で、数百kmも離れたこの地域まで体を張つて逃げてきたその人間は

誰にも助けられないまま、鴉のエサになり、

数日も経てば腐り、蛆虫が分解し、自然へと還つていった。

しかし、しつかりと目に焼き付いていたのはあの刻印。

腐敗する前に、その人間の首元に焼印があるのをしつかり見ていた。

? の文字に巻き付く鎖を

?????????????????

「奴らの組織の名前は？（サン）

ありつたけ人間を集めて、何やら怪しい商売をしてるとか
…もしくはただの頭のネジが外れた異常者、変態の集まり
奇妙な刻印を打ち付けて、たとえ逃げられたとしても
一生その刻印に縛られる

…………それが、舞白が持つてた写真の刻印

運良くその友達は逃げられたんだな」

1階のバークウンターで2人は肩を並べていた。

舞白は悲惨な話しを耳に入れるに眉を顰める。

「……あの写真は奥さんと娘さん……」

「そうだ、俺は別人のようだろう?

…もう意味は無いのにひたすら体を鍛え続けた

だからこんな見た目だけど本当は臆病で

お前みたいに屈強な相手に立ち向かう根性さえ持ち合わせてないさ」

ガクガクと震えるテソンの手。

「未だに……アイツらを見ると体が震える

こんなに体を鍛えても、妻と娘を助けたいと思うだけで
体は動かない

：この見た目のおかげでアイツらに連れ去られるようなことはないが
それに安心してる俺が居ることが本当に腹立たしい……」「

連れ去られたら二度と出られない、

そして奴隸のようにあの焼印を押され

酷い目に遭う、想像するだけで恐ろしかった

「…その収容所、ここからどれくらいかかる？」

「本当に行く気なのか？ 1人で？」

「私はその為にここまで来たの

それにそんなにヤワじやないし、

：私はその子の妹と母親を探さないといけないの」

傍らのリュックから地図とペンを取り出し、

テソンにも見えるようカウンターに広げる。

「…………」から北西方向に約120km

整備された道は少ないし、近づくにつれて奴らの監視も増える」

「歩いて行くか、もしくはバイクか何か、

でもこの雪の中、バイクはリスクが高いし……」

最悪小回りがきけば逃げられるし、車と違つて足も付きにくい……歩いていけばこの距離なら2日くらいかな……」

傍から見れば普通の少女。

スラスラと慣れたような発言を耳にするテソンは、

舞白に恐怖すら覚えた。

その表情を読み取れば

舞白はトントンと背中を叩く。

「大丈夫だつて、そんなに心配しなくとも

なんとかその組織の中枢を壊して、その収容所自体をぶつ壊せば
捕まつてた人たちも解放できる

：絶対、アジャティさんもアイさんも、ここに戻つてくる
信じて、テソン」

「マシロ…」

「私の国には一宿一飯の恩義つて言葉があるの

：しつかりお礼させてね」

強面の瞳から涙が伝う。

テソンは次々と涙を流せば舞白へと抱きつき、
ひたすらに泣きじやくる。

何年も誰にも言えない苦しみを、

やつと解放できた彼の涙は簡単に止まることはなかつた。

・・・・・

正義の味方

・・・・・

公安局 地下駐車場

自家用車のロックを解除すれば、

中へと乗り込む。

霜月は常守の言う事を素直に聞き入れ、

定時退社、明日は1日休むことに。

今まで何度もあのような死体は目にしていたが、

今回はあまりにも酷いものだつた。

そしてまだ消えない悪臭に、仮眠はとつたものの疲れが抜けることは無かつた。

「早く帰つて、明日もしつかり休んで

…明後日から万全な状態で出社しないと……」

きつとまた、お節介な常守に

今度は長期休暇取得を促され兼ねない。

「…………あー…………私の色相…………」

悪化してるし、もう…………」

イライラした様子で車のエンジンをかけ
行き先を自宅へと設定。

地下駐車場を出ると既に外はネオンに包まれていた。

体全身を脱力させ、背もたれに体を預け、
ふと外に目を向ける。

公安局に入局して約6年。

毎日が目まぐるしく過ぎ去つて、

4年前まで高校生だったなんて考えられない。
幼馴染、友人を失い、

何か自分で欠けてしまったあの日。

刑事を目指そうと決めたあの日。

自分はあの頃の自分に胸を張れるような刑事に、

そんな存在になれているのだろうか？

「…………疲れすぎてる、私……」

刹那、手元のデバイスから通話を知らせる通知。まさか仕事？と若干怠そうに手首を持ち上げると相手は予想外の人物だつた。

「夜坂：泉？」

相手は約1年前の特別行政区「サンクチュアリ」の事件にて、矯正施設に送還されていた夜坂からのものだつた。

『はい、霜月です』

『 霜月さん、お久しぶりです

突然ごめんなさい……』

『あなたもしかして、施設から…』

『 はい！お陰様で！』

メンタルケアの甲斐あつて施設を出ることができました
明日、武弥を迎えに行く予定で…』

夜坂の明るい口調につられて霜月も表情が綻ぶ。
1年前は一体どうなることかと心配していたが、
元気な様子に安堵していた。

『元気そうでよかつた

きつと、あの子も早く会いたがつてる』

『 ありがとうございます、本当に…』

今のあるのは霜月さんのお陰ですから

…

「そ、そんな事ないない！」

現に今自宅に帰つてるとこ�ですから
大したことない…」

元心理カウンセラーという経歴を持つ夜坂は、

霜月との会話から余裕のなさそうな雰囲気を直ぐに感じとつていた、

若くして日々奮闘している霜月の事は、あの事件でよく分かつっていた。
夜坂は電話越しでクスクスと笑い、話を続けた。

『あまり無理はなさらいでくださいね

落ち着いたら武弥と一緒にまた会えたたらと

：武弥が”正義の味方”のお姉ちゃんとおじさんに会いたいって
いつも言つてるものだから』

「なつ…」

あの時、久々利武弥に言い放つた言葉を思い出し
車内で密かに赤面する霜月。

カツコつけてそんな事も言つたな、と…。

『 長電話も申し訳ないのでそろそろ…
とにかく、あなたに早く伝えたくて

他の皆さんにもよろしくお伝えください』

「わざわざありがとうございます」

…どうか、武弥君と幸せに』

『 ありがとう

あなたもね、霜月さん』

夜坂の言葉と共に通話は途切れる

予想外の人物の突然の良い報告。

曇っていた心身が少し解れるような感覚に、

霜月は微かに笑みを浮かべていた。

「正義の味方、誰かがそう言つてくれてるなら
それはそれで私も少しあは成長できたのかな」

”人を動かすのは心である”

その言葉を飲み込めるようになつたのも
夜坂と武弥少年のお陰だつた

(葦歌、加賀美・)

私はあの頃よりも成長してゐるかな()

再び視線を外へと向け幼馴染2人を思い出す。
吸い込まれるような満月をぼんやりと見上げ、
1人黄昏ていた。

・・・・・

トランスペアレント

・・・・・

翌日 朝早くから分析室に姿を現したのは
常守朱。

ソファで仮眠をとる唐之杜に、

昨夜からぶつ通しで薬の成分を調査している雛河。

「雛河君、もしかしてずっと調べてたの？」

「お、おはようございます！……お姉ちゃん……」

雛河は疲れた様子は全く無く、寧ろ何かを見つけたのか
眼を炯々とさせていた。

「…大量の薬物、

全部調べて、ある接点を見つけた……」

目の前の画面に、薬の成分やら様々なデータが映し出される。
そしてその中に、常守も気になる単語を見つけた。

「トランスペアレント製薬会社…

もしかしてこの薬剤の大元が？」

「この赤い薬品だけは出元が不明だけど…

…他の薬品は全部…トランスペアレント製薬会社のもので間違いない」

トランスペアレント製薬会社

国内の約70%の薬品をこの会社が製薬。

風邪薬から、手術で使用する麻酔薬、メンタルケアのサプリメントをはじめ、ありとあらゆる薬品を日本国内に流通させ、誰しもが知っている大企業だった。

「同じ薬品はもちろん他の製薬会社も取り扱つてゐるけど

……細かく中身の成分、分量に型を見る限り

間違いないはず……」

「こんなにも大量の、しかもP.T.P.包装もされず裸のまま…

明らかに工場からそのまま出されたような状態

：調べる価値ありそうね」

普通、薬品は錠剤であれば1つずつプラスチック包装をされているもの、しかし、見つけたものは全て裸の状態で袋に入れられていた。

明らかに不自然すぎる。

「雛河君ありがとう

「これで一步前に進めたわ」

「こ、これくらい……大したこと、ない……」

一晩で大量の薬物の分析、そして出元の会社まで調べあげた雛河相変わらずの並外れた能力に頭が上がらない。

「この製薬会社に、捜査協力依頼をしないとね

：雛河君、もちろん着いてきてくれるわよね？」

「も、もちろん！」

「その為にも今から暫く仮眠をとつて休んでおいて
その間に私もできることはするつもりよ」

「うん…仮眠…する…」

常守は雛河に笑いかけると分析室を後にする。

????????常守は先程のデータを改めて見漁り、
他にも怪しい点がないかチェックしていく。

((国内最大手の薬品会社が

あんなに大量の薬物を誰かに横流しするとは思えない
：リスクもあるし、そもそもそんな事をする必要はないはず)

執務室へ戻ると、自分のデスクへ座り

力タカタとキーボードを叩き、ありとあらゆる情報を確認していく。
今まで、様々な薬品を作り出し世に貢献してきた。

黒い情報は見当たらず、直感で常守は白だと考える。
じ一つと、目の前の画面と睨めっこする常守を

部屋に入ってきた人物が遮断するように声をかける。

「早いな常守」

「うわっ、びっくりした：おはようございます、宜野座さん」

「なんだその反応は：俺は化物か？」

「すみません、ちょっと集中しすぎて…」

宜野座は常守から離れると、自分のデスクへと向かい、

昨日の関係資料を画面に映し出す。

「さつき、薬品データが雛河から送られてきた

まさかあの薬品全部がトランスペアレント製薬会社の物だとは…」

「…そうなんですけど、特に怪しそうな情報は特に無くて

むしろ、良すぎる情報ばかり」

「だからこそ、俺は怪しいと見るが…」

宜野座はとある人物のデータを常守に送信する。

常守はそのIDデータの経歴面に載っている社名に目を引かれると、知らなかつた情報に驚きを隠せなかつた。

〔現東京都知事の有栖川 吉富（アリスガワ ヨシトミ）〕

肯定党を今のように大きく成長させたのもその男だ

：そして元トランスペアレント社の執行役員」

「有栖川都知事と言えば移民肯定派のリベラル：でしたよね
まさか、製薬会社役員だつたなんて
私の勉強不足ですね」

演説でも堂々と発言をし、威厳のある風格に
支持率はかなり高い人物。

しかし、ここ最近は移民についての論争で賛否も多く
怪しい噂も絶えなかつた。

「そういえば、思い出しました！

すごく前ですけど…

トランスペアレント社が有栖川に政治献金を流したとか…」

「逆に、有栖川がトランスペアレント社に金を渡した、

結局ただの噂でそこまで大事にはなつていなかつたが

俺は何かあると考へてる」

移民、元役員、献金、

そして大量に見つかった薬物。

「もし今回の事件に関連がなかつたとしても
なかなか調べる価値がありそうじやないか？常守
どこかワクワクとしている様子の宜野座に
常守は半分、呆れたように笑みを零す。
「刑事のカン、ですね

宜野座さん」

2人は目を合わせニッと笑うと

少しずつ前進していく様に胸を撫で下ろす。

• • • • •

作戦会議

・・・・・

「当日にアポイントメントは難しかつたみたいね

…大手の製薬会社だつてのに広報と薬品生産担当者が不在だなんて

都合の良すぎない？」

ふうーー、とタバコの煙を吐き出す唐之杜。

「強行捜査を行えるような条件は揃つていませんし

大人しく待つしかなさそうですね」

その隣で、まだ解明できていない刻印のデータを解析する六合塚。

どんなに洗いざらい調べても、とくにめぼしい結果を得られなかつた。

「まあ、霜月がいない所で

勝手に捜査を進めたりなんでしたら、アツイもカンカンだろうし

ちようど良かつたんじやないか？」

「…霜月監視官はそんなんに…、その

…今まで短気なんですか？」

「…もつともな事を言う宜野座に

恐る恐る問いかける須郷。

結局、トランスペアレント社に問い合わせたところ

また本日中に連絡するとしか回答は得られず。

局長に強行捜査を依頼するも、予想通り突っぱねられ
返答待ち状態に。

「とりあえず新たな出動命令が下るまで

唐之杜さんと六合塚さんは密入国者を調べられるだけ調べて
須郷さんと宜野座さんは昨日の現場のデータをもう少し解析してほしい
：籬河君は…」

後ろのソファでぐつすりと眠っていた。

先程まで炯々としていたが、さすがに充電切れのようだつた。

「徹夜で相当疲れてるはずだからそのまま寝かせてあげて

：私はもう少しトランスペアレント社を調べます

あとは連絡を待たな：」

その瞬間、常守のデバイスに1件の通知が届く。
相手はまさかのトランスペアレンント製薬会社、
文面を見ると、”明日の午前10時にお待ちしております”と
予想外の返答内容が届いていた

「…思つたより早かつたわ

トランスペアレンント社から捜査協力の返答が来た」

メールを全員に転送、

もつと遅くなると予想していたが、明日と確かに明記されていた。

「相手が公安局だから、さすがに待たせすぎても怪しまれる…
なーんて、考えすぎかしらね？」

吸い終わつたタバコを灰皿に押し付けると

唐之杜は広報担当者などの名前をすぐに調べ、
全員分のID情報を分析室の画面に映し出した。

「広報担当者

舟橋 明美（フナバシ アケミ）28歳

へへ、さすが一流企業の広報、
経歴も容姿も一流ね

それに、色相も綺麗、何の薬使つてのかしら？」

「薬品開発部門及び薬品管理の責任者

一宮 祥太郎（イチノミヤ シヨウタロウ）46歳
彼は看板商品の1つ、メンタルケアサプリメントの開発者ですね
テレビで見たことがあるわ」

唐之杜、六合塚が2人のデータを次々と明かしていくも
特に怪しい経歴はなし。

恐らく、明日案内をするのはこの2人だろう。

「明日の搜査は

私と霜月監視官、六合塚さん、雛河君

このメンバーで行きます」

「俺達は行かなくていいのか？」

意外な人選に不思議そうにする宜野座。

須郷か自分は連れて行くと思っていたが違うらしい。

「製薬会社ですしあまり大人数で行くのも…それに

メインは薬品ですから、分析に優れた六合塚さんに
薬品に詳しい雛河君がいれば百人力ですよ」

「常守監視官の命令であれば、従うまでです

私と宜野座執行官で進められる調査は実施しておきます」

「よろしくお願ひします

宜野座さん、須郷さん」

2人に頭を下げる常守は六合塚へと近寄る。

「六合塚さん、用意して欲しいものがあるんです」

なにか耳打ちすると六合塚は不思議そうに首を傾げる。

「それならすぐに用意できますけど

「一体何に使うんですか?」

「もし出荷前の薬品管理の倉庫などに入れた場合

発信機を上手く取り付けて欲しいんです

…きつと梱包もされてトラックに乗せる寸前の物であれば
検査もないでしょうし、引っかかることはないと思います」

「常守、いくらなんでもそれはハイリスク過ぎるぞ
バレたらどうなるか…」

「でも、こうするしか方法はありません

薬品の行く先が病院やドラッグストア、調剤薬局…

何も無ければ、それ以外の場所に運ばれる訳がないですから」
せつからく入れるチャンスを逃す訳にはいかないと
用意周到だった。

「何も無ければ、それはそれでいいんです」

じやあお願ひします、六合塚さん

と言い残せば常守は分析室を出ていく。

「トランスペアレント社の薬品管理倉庫なんて
一体どれ程の規模なんでしょうか?」
「追いかけ甲斐があるじゃない? 楽しそう、

分析官としての腕が鳴るわ！」

恐らくとんでもない規模だろうと須郷は想像していた日本一の製薬会社、全く想像がつかない。

「……面積は約46,000m²…

：その倉庫が：確か二棟あるはず…です…」

後ろで眠っていたはずの籬河がゆっくりと体を起こすとボソボソと呟く

「起きてたのか籬河？」

「…トランスペアント社から…メールがきたつて

…そのあたりから…起きて、た…」

モゾモゾと人差し指同士をつつきながら途中から起きるのが何故か恥ずかしく感じたらしく寝たふりをしていたと話す。

「46,000m²…

昔で例えると東京ドーム2個分ってところかしら？」

「…全然分からん例えだ」

「かなり広大な倉庫…」

「簡単に入ることが出来るかが鬼門になりそうですね」

須郷はかつて所属していた軍の建物の広さなどを頭で思い浮かべ
とてつもない大きさだと察す。

「弥生、バレない程度に大量に持つていくしかなさそうね」
「…管財課から目をつけられない程度に

上手く申請して準備するわ」

六合塚も準備のため分析室から姿を消す。

「さてと、俺達も行くか須郷」

「僕も…朝ごはん…食べに行く…」

次々と己の役割を果たすために姿を消していく。

漂流する薬品

・・・・・

テソンから過去の話を聞いたその日の夜、

舞白の姿は、営業中の酒場のカウンターにあつた。
いつもの様に客で溢れる酒場。

テソンもいつも通り、客たちに料理や酒を作り
変わらない日常を送っていた。

舞白は馬乳酒を片手に、今後の経路を固めるために
地図に印を付けていく。

「出発は明け方…、運良く吹雪いてもないし

順調に行けば3日でたどり着くハズ…」

ブツブツと独り言を漏らしていると、

酔っ払ったひとりの男が舞白の隣に酒を持って現れる。

歳は30代後半程だろうか？

周りと比べやけに若く見える男だつた。

「昨晚のあの殴る蹴る…圧巻だったぜお嬢さん？」

「俺の名前はタツカ、一杯奢らせてくれよ」

「そんなそんな…あのままだと私が殺されそ Rodgers だったので

：いいんですか？じゃあ頂きます！」

ノリの良い舞白に笑みを零すタツカ。

男はカウンターに広げられている地図に目を移し、

行き先がある危険な場所だと分かると舞白へと目線を移す。

「もしかして、お嬢さん

？の拠点に行くつもりかい」

赤いペンでグルグルと囲まれた場所。

そこは？が支配している地域でもあり、巨大収容所がある場所だつた。

「はい、そうですよ？」

「やめとけやめとけ…さすがに強いお嬢さん一人でも

あそこに入つたら最後、二度と出てこれねえぞ？」

「大丈夫です、入つたら今度は中からこじ開ける予定ですから
 …それに、行かないといけない理由もあるので」

にこやかに微笑む舞白に、どこか心奪われそうになり
 目線を外しグラスの酒を飲み干すタツカ。

昨晩は混乱もあつたため、なかなか容姿を見ていなかつたが
 改めて女性だと分かると何故か恥ずかしくなる。

「…お嬢さん、日本人…だよな？」

流暢にこの国の言葉を話すもんだから…

それにその白い風貌、珍しい」

「日本人です、

元々は黒髪だつたんですけど

急に髪の毛が真つ白になつちやつて

多分どこかしら患つてるからだと思うんですけどね？」

「気をつけるよー、奴らはあんたみたいな女は大好物だ

目立つし、中は汚ねえからやたら白さが映える…」

「……やけに詳しいんですね、タツカさん」

急に冷めたような声質になる舞白に

ビクッと肩を震わせる男

「わざわざ近づいてくるなんて、

もしかして組織のお仲間さんだつたり？」

「ちつ…違う違う！」

……昔……ちよつとだけ……関わったことがあつただけだ……
もしお嬢さんの力になれたら、なんて……」

酔つ払いすぎていたのか、何なのかは不明だが

?の事をよく知っていたその男に様々な情報を流させた

????????????????????????
25年ほど前、

タツカは金欲しさに?の傭兵として拠点に身を置いていた。

劣悪な環境、非人道的な組織の活動に
次第に後ろめたさを感じ、最終的になんとか脱走したという。

しかし、その時

気になることがあつた。

「ア????????? イツら、変な薬を配つてた

飲んだら楽になるとか、：：それが気味が悪いほど真つ赤な薬で
カウンターに両肘を付き手に顎を載せる。

必死に思い出すように、ギュッと瞼を閉じる。

「…俺も金と一緒にその薬を貰つてたんだが

氣味が悪くてよ、飲まずに廃棄を繰り返した

…俺の仕事は牢に入れられてる女、子供の監視
そいつらには栄養剤だと言つて飲ませてた」

「…………それで？」

「数日経つと様子がおかしくなる

饒舌だつた女が2日3日で人が変わつたように静かになつたり、急に暴れ出したり……」

「そういつた薬を作れる環境がよくあるわね

劣悪、な環境なんでしょう？」

建物も古くなつてゐるつて聞いてるし……」

タツカはギュッと手に力を入れ

横の舞白を見据える。

「俺は日本語は分からない

……でも、その薬を一度だけ補給しに行つたことがあるんだ

……俺の記憶が間違つていなければ

その薬が大量に入つていた箱に日本語が書かれていたんだ」

「日本製の薬つて事……？」

でも日本はどこの国とも外交を閉ざしていたはず

最近は緩和されてるみたいだけど……5年前つて……」

訳の分からぬ内容の話しに舞白はタツカに対し疑いもした。

しかし、彼の様子を見る限り嘘をついているとは思えなかつた。

そしてこの情報を何故自分に教えたのか、不思議でたまらなかつた、

「……タツカさん、あなたももしかして

あの中に家族が……？」

「……ああ

……しかも、俺が金だけのために傭兵としてあの中で働き始めた時

生き別れた妹が居ると知つたんだ

名前はダリナザ、俺より7つ下だ」

過去の紛争で生き別れた妹

彼が牢の監視をしている時に

やけに自分を見てくる少女がいた

当時、まだ20歳だったらしい

「驚いたさ、すっかり美しい”女性”になつてた

……でも、俺は助けることもできないまま

妹は姿を消した、跡形もなく

死体もどこからも見つからず

生きているのか死んでいるのかも分からぬ

……そんな状況なのに、俺は逃げ出してきた最低な兄貴だ」

グビっと酒を飲み干せば

酒瓶もグラスも空に

「氣をつける、お嬢さん

…あの場所に足を踏み入れれば地獄しか無い」

「もちろん承知の上

苦しんでる人が沢山いるのに、放つておけるわけが無い」

同じく舞白も馬乳酒を飲み干せば

カウンターの地図に目を移す

「情報がありがとう、タツカさん」

?により人生を狂わされた人間たちは
思いのほか多すぎる。

一体どのような組織で何が目的なのか、

ハツキリとはまだ不明。

そして、日本から薬品が流れているかもしない、という話しひに余計に放り出せるような話ではなくなつてきていた。

・・・・・

兄を知る者

「ナイフ、リボルバー銃：

スコープも入れた、ライフルもOK

弾は：こつちのポケットと：」

営業が終わつた店内で、ゴソゴソと準備を整えれば
テソンが丁寧に乾かしてくれた分厚いコートを羽織る。

大きなリュックやライフル銃を背負えば

顔を覆うマスクを手に取り、

背後で舞白を見守つていたテソンへと振り返る。

「色々とお世話になりました、テソンさん」

深々と頭を下げ、手に持つていたマスクを被る。

「…本当にそうやつて見ると

可愛らしい女の子には見えないよ」

「へへへ…可愛らしい女の子…」

鼻まで覆われたマスク。

兄に似た切れ長の瞳と、特徴のあるホクロしか見えない。

可愛らしい、と言われると照れるように頭を搔く。

「気をつけるんだぞ

…恐らく道中も危険が待つてゐる

「今まで危険なことだらけでしたから慣れっこです

必ず？をぶつ壊してきます」

手袋を外し、グツと拳を握ると
テソンへと向け前へ突き出す。

「大丈夫、私強いんで」

それに応えるように、テソンも拳をぶつけるのであつた。

・・・・・・・・・・

月明かりにてらされる寂れた町。

明け方ということもあり、人は誰ひとりとして歩いていない。

雪を踏む度にサクサクと音が鳴れば、

余計に静かな町を寂しく感じていた。

向かう先は舞白も想像できないほどの場所。

どれだけの傭兵がいるのか、ボスは誰なのか

どれだけの人々が囚われているのか、

分からぬことだらけだつた。

「とりあえず今日中に山1つは超えない」と…

あまり人が多いところに長居するのも危険だろうし

町はさつさと抜けてこう…」

ビュウッと強い風が吹く度、厚着をしているとはいえ

寒さを感じる。

足を取られないようにしつかりと踏み込みながら

舞白は先へ先へと歩みを進める。

?????????????????

スラム街やゴーストタウン。

舞白が行く先々はどこも同じように
荒れ果てていた。

隠れるように、身を隠す人々や

物騒な武器を手に徘徊する傭兵。

シーアンの他にも様々な紛争地を巡ってきたが

明らかにこの地域は危険度が高い。
舞白はできるだけ目立たないように
町を1つずつ越えていく。

?????????????????????????

「…とりあえず、今日はここで休もう
思つたより進めたはず…」

山岳地帯にたどり着き、岩場の間にちょうど良い場所を見つけると
荷物を置き、枯れ木を積めば火をおこす。

冷えきつた体を暖めようと焚き火に手を伸ばす

時刻は16時過ぎ、まだ微かに夕陽に照らされていた。

山岳地帯から見下ろす雪原地帯はとても美しく、

紛争地とは思えないほどの景観だつた。

重い羽織を脱ぎ、マスクを外す。

気持ちいい程に清々しい空気を吸い込み深呼吸をすると
何やら近くで車両音が聞こえ、人の声も聞こえてくる。
舞白は慌てて岩場に身を隠す。

そつと岩場の隙間から声がする方を覗き込むと

武装集団らしき男たちが複数人、

鎖で繋がれた女性や子供達が車両から降りると
列をなして岩壁に追いやられていた。

怯える人々

1人、黒髪の少女が何か男たちに怒鳴りつけているように見えるが
何を話しているか分からない。

そしてその人たちの服装を見るとやけに鮮やかで
ウイグル地区の人間ではないと。

恐らくは隣接しているチベットヒマラヤ同盟王国の
独特的な民族衣装だつた。

「…確かに同盟王国の境界近くだけど…」

「…何でこんなところに…」

そんなことを考えていると、

男たちは銃を構える。

舞白は次に起ころうであろう出来事を止めようと

小銃を片手に岩場から飛び出す。

1人の男の銃を自身の銃で撃ち落とせば

一斉に視線が舞白へと向く。

「!? 何だ！」

「誰か知らないが邪魔するものは殺せ！

相手は1人だ！」

男達が驚く手前、次々となぎ倒していく。

襲いかかる前に倒されていく男達は、

驚いて逃走する者やその場で気絶する者も。

発砲音に臆することも無く

男達に突っ込む舞白。

それを黒髪の1人の少女が魅入っていた。

「クソっ…全滅する前に全員逃げるぞ！
コイツらは置いていけ!!」

意外とあつさり姿を消す男達。

運良く大型の車両も残され舞白は微かに笑みを浮かべる。
そして無事、人質らしき人々を救出するのだつた。

?????????????????
隠れていた岩場へ全員を連れて行き、
繋がれていた鎖を車内に残させていた鍵で外していく。

10人の人質。

舞白の予想通り、全員が隣接地域の
チベットヒマラヤ同盟王国の人々だつた。
1番の年配女性曰く、

境界線付近で暴動が起き、それに乗じて
男達に拉致されたらしい。

そして車内である少女が暴れ、生意気な発言をしたとかで
逆上した男が皆殺しにしようとした…と…。

「本当に…なんとお礼を言つたらいいか…」

「この指輪をどうか受け取つてください…」

年配女性が嵌めていた指輪を差し出すも舞白は手で押し返す。

「見返りを求めてやつた事じやないですから」

「…あなたがいなかつたら…どうなつていた事か…」

ほら、テンジン

あなたもお礼を言いなさい」

傍らでじつと舞白を見据えていた少女が
ゆっくりと近寄ると頭を下げる。

「助けてくださいありがとうございました」

そう言つて顔を上げると

じつと舞白の顔を見ていた。

「…えっと…私の顔に何かついてる?」

ぱりぱりと薄く笑みを浮かべながら頬を搔く。
やけにじつと見続けるテンジンという少女。

そしてやつと口を開く。

「私の名前はテンジン・テンチュク、

…あなたの名前は?」

好奇心の目を向けるテンジン

舞白もそれに応える。

「私は舞白…狡噺舞白、ちなみに日本人…」

「…やつぱり…狡噺の妹…」

先程の戦いぶりにどことなく似ている雰囲気、
話すことも兄の狡噺と全く同じだと、テンジンは目を見開く。
「狡噺つて…あなた兄を知ってるの?」

???????????

?????????????????????????

兄と妹

日が沈み、辺りは真っ暗に。

さすがに暗いうちに行動するのは危険すぎる為

今夜は全員、岩場で過ごすことに。

幸いにも、男達が残していった大型車両に燃料や飲食物が乗せられており安心して過ごすことができそうだつた。

?????????????????

「…そんな事があつたんだ…」

舞白とテンジン以外が眠る中

2人は岩場の入口付近で語っていた。

そこでテンジンの口から語られたのは

ほんの数ヶ月前のチベットヒマラヤ同盟王国での出来事。

兄は今、指名手配されているとか：

しかし、舞白は悲しむことはなくむしろ情報が聞けて内心喜んでいた。
「でも、狡噺は絶対そんな事しないし

むしろ濡れ衣を着せられてる」

「…停戦監視団の暗殺、

暗殺なんてそんな性にあわないこと絶対私の兄はしない

…まあ、悪役を引き受けないといけない理由があつたんだろうなあ

意外と呑気な舞白にテンジンは驚いていた。

普通、家族が指名手配されていると聞けばもつと動搖するはずなのに、と

「とりあえず生きてるなら花丸

連絡手段なんてないし、正直心配してたから」

「…やつぱりあなた達、兄妹なのね

見た目もだけど…考えてることもすごく似てる…」

くすくすと笑みを浮かべる舞白。

余裕そうな雰囲気はやはり狡噺と瓜二つだった。

「ところでテンジン、

…今回みたいな誘拐つて

最近増えてたりするの？」

地域の境目とはいえ大胆なことをした男達。

車両の中から舞白が追っている？に、関連してそうな資料を見つけたため恐らく彼らは？に関係しているのは間違いない。

ウイグル地区のみならず他の地域にも手を伸ばしているのであれば、早急に解決しないとならない。

「ううん、誘拐とかそういった事は聞いてなくて

…ただ境界線付近で怪しい車両の目撃情報とかそういったのは増えてたかも」

「暴動と、なにか関係があるかもね

「…早急になんとかしないと…」

「なんとかつて…あなた一人で

危険なところに行くつもりなの？」

「そうだけど？

…つて…私も行く！つてわけにはいかないよ？

明日早朝にすぐに同盟国の境界まで皆を送り届けるから

運良く車も手に入つたし……」

狡噺の妹となればついて行くと言つても聞かないだろう、と分かりきつっていた。テンジンはそれ以上何も言わず岩場の隙間から空を見上げる。

「狡噺の妹……何か羨ましい……」

「へ？ 何か言つた？」

テンジンの呟きは聞こえず

笑つて誤魔化す。

確かに、狡噺は妹がいると話していたが

ここまで強いとは知らなかつた。

互いを真剣に大切に思い合つている2人を

テンジンは羨ましく思つていた。

「明日早く出るつもりだから少しでも寝た方がいいよ？」

私は見張つてるし、何かあれば起こすから」

舞白はサツと上着を羽織れば、小銃片手に岩場から姿を消す。

テンジンは大人しく仲間たちと同じように体を休める。

• • • • • • • • • • • • • • • • • •

舞白は外に出て一面の雪景色をぼーと見つめていた。すると久しぶりに首元がズキズキと痛み出せば、その場にしゃがみこむ。

「…ツ…」

クラクラと目眩がする。

なんとか倒れないようにと岩壁に身を預け空を見上げた。すると、久しぶりにあの幻覚を見るのだった。

?????????????

「兄は南のチベットへ

そして妹の君は北のウイグル自治区

兄妹でそれぞれ対称的な場所に踏み入れ

まさか兄は指名手配犯とは…」

隣に現れたのは槇島聖護、

舞白は首を押えながら、現れた人物を睨みつける。

「君がそこまで執着する理由は?

別に身を呈してまで護るものではないだろう?

…兄妹揃って、相変わらず面白い…」

「…別に困ってる人がいるなら、助けが必要と言っている人がいるなら

私は構わざどこへでも行く、未来に繋がるなら…」

舞白の言葉に薄笑いを浮かべ、

隣に同じようにしやがみこむ。

「このウイグル地区は18世紀半ばに”ムスリムの土地”を意味する「回疆」また”新しい領土”を意味する「新疆」と名付けられた

：しかし革命に反乱が耐えなくてね、大量虐殺、迫害、民族や宗教問題、名ばかりの”新しい領土”、本当に君はこの国のに未来なんてあると思うのかい？」

「……煩い……死人は黙つて見てればいい

：あなたにはわからないでしよう」

舞白は横の人物を手で振り払えば幻覚は消えていく。

徐々に首の痛みも薄れていき、ゆっくりと立ち上がる。

「……本当に嫌な奴……」

……………
再び目線を空へと向け深いため息を漏らした。

まだ陽も昇らない早朝。

大型車両に全員が乗り込めば

舞白が運転をし、同盟王国との境へと向かう、

そこまで距離も離れていなく、小一時間ほどで辿り着いた。

?????????????

「テンジン、あとは宜しくね」

舞白以外全員が車両から降りれば

同盟王国方面を見渡す。

雪も積もつておらず、気持ち暖かい気温で
うつくしい緑の草原が広がっていた。

「うん、大丈夫！」

本当に私たちを助けてくれてありがとう、舞白

もし、狡噺に再会できたらよろしく伝えておいてね」

「もちろん、伝えておくね
兄も喜ぶと思うわ」

少しづつ草原に陽の光が射し込む。

明るくなるとこの車両も目立つてしまふ。

舞白は再びエンジンをかけると、

テンジン達に手を振り境界から離れる。

テンジンは車両が見えなくなるまで手を振り続けていた。

「…また会えますように」

そう呟くと、仲間たちと草原へと姿を消す。

・・・・・・・・・・

そして、舞白は

程よい距離で車両を乗り捨てると

再び雪原地帯へと降り立つ。

お陰で予定よりも早くたどり着く目処が経てば、
自然と踏み出す足が速くなつていた。

・・・・・

2章

健全な会社 健全な薬品

・・・・・

2118年 2月1日 午前10時

港区 トランスペアレント本社前。

常守、霜月、六合塚、雛河の姿があつた。

霜月は、休んでいた分の資料に一通り目を通し、

本社ビルの入口にて、担当者が現れるのを待つていた。

「氣を遣つて非番だからと一切連絡がないと思つていたらまさかこんな事になつていたなんて本当にビックリです」
休み明けに出勤後、まさか直ぐに大企業への捜査……
しかもデータの中には都知事の名前や、薬物情報

目を通すのもやつとだつた。

「ごめんね、美佳ちゃん：

非番明けに激務を…」

「別に大したことないんで大丈夫ですけど…

にしても、この報告書が全て本当ならかなりマズイですよね
トランスペアレンント社の薬品を使つたことががない人なんてこの日本に絶対いないで
すし」

「監視官がいつも口にしてるサプリメントも
確かトランスペアレンント製ですよね」

霜月がいつもポケットに入れている、

まるでお菓子のような見た目のケース。

中身はサプリメント、まるでラムネ菓子のようにボリボリと食べている姿は全員が見
ていた。

「……服用し過ぎ……です…」

「激務に耐えるためにも服用しないといけないの
……つて……あの人たち…」

本社ビルの入口の立派なガラス扉が開く。

白衣に身を包んだ男性と女性が姿を表せば
霜月達は話すのをやめ、2人を見据える。

「すみません、会議が少し長引いてしまって

お待たせしてしまいましたね」

清潔感があり薬品会社の管理者、

という言葉がまさにピッタリな容姿の男性が申し訳なさそうな表情を浮かべ4人へ
と近づく。

その後ろに立っていたのは息を飲むほど美しい女性。

ID写真より遥かにはつきりとした顔立ちで、微かに浮かべる笑みに落ちない男はい
ないだろう。

「いえ、私達もたつた今到着したところですから

こちらこそ急な検査に御協力頂けてありがとうございます」

常守は深々と頭を下げて礼を述べる。

そして警察手帳を掲げれば自己紹介を始める。

「公安局刑事課 監視官の常守朱です」

「同じく監視官の霜月美佳です」

常守と霜月の背後にはそれぞれ六合塚と雛河が、

2人も頭を下げるに常守が口を開く。

「本日は執行官2名も同行させて頂きます

もし不都合があれば…」

「いえいえ、そんな事ありませんよ?

私達も自己紹介を…」

男性職員も社内のＩＤを4人に掲げると

穏やかな笑みを浮かべる。

「薬品開発部門及び薬品管理の統括をしております

一宮祥太郎です」

「私は広報の最高責任者

舟橋 明美と申します

：公安局の刑事さんとお話できるなんてとても嬉しいです」

2人とも第一印象は特に問題なく

むしろとても好印象だつた。

まさに、経歴通りの肩書きが相応しい人達。

「ささー！外は冷えますし早速中へどうぞ

前もつて調査をされたい内容は確認済ですのと

どうぞ何でも言つてください」

「本当に突然の搜査協力依頼にも関わらず

ご親切にありがとうございます」

常守と一宮が先頭を歩き、何やら色々と話を進めているようだつた。
トランスペアレント本社…メインエントランスは異常に広く
天井は一面ガラス張り、

白衣をまとつた職員たちも活き活きとしている様子で
まさに日本を代表する大企業だつた

「天井、すごいですね全部ガラスで…」

霜月が隣を歩く舟橋に声をかけると

彼女は柔らかな笑みを向ける。

「ホログラムも使わず全て本物なんですね」

「すごい技術ですね…、

それに職員一人一人の胸についてる名札

あれつて…色相…？」

「それ違う職員全員、首から提げているＩＤ証のようなものに色がついていた。
「はい

「ここ」の職員全員、常に色相があのように表示されるんです
色相状態によつては勤務ができなくなつたり、特定の部屋に立ち入ることが出来なかつたり」

「すごい管理体制…」

「私たちは国民の皆さんのが命を守るための薬品を扱つていますから

造り手側の色相を第一に考えて いますよ」

「まさにホワイト企業の代表、ね…」

あまりにも整いすぎている環境に、驚きを隠せない。

後ろを着いて歩く六合塚と雛河もかなり衝撃を受けているようだつた。

???????????

4人は各施設へと案内される。

薬品の企画室から製造工場まで、ありとあらゆる施設を確認していく。
どこも完璧な管理体制で、怪しい部分は見つからない。

「一宮さん、質問してもよろしいでしょうか？」

「はい、答えられることでしたら何でも」

「：製造された薬品がP.T.P.包装されることなく

どこかへ届けられることはありますか？」

大量に無造作に袋に入れられていた薬品を思い出す霜月。

わざわざプラスチックの包装から1錠ずつ出す事も可能だが
さすがにあの量の薬品をわざわざ出す必要性もない：

だとしたら、製造過程で包装されず、どこかに輸送している可能性しか無かつた。

「それは有り得ません、P.T.P.包装の目的は

薬が大気に触れるのを防ぐことで吸湿、紫外線などによる変質を防ぎ、清潔な状態を
保つこと、破損を防ぐ効果もありますから」

「薬品の製造工場はこちらの本社直結の工場のみですか？」

「はい、その通りです

この敷地内で全て完結できるようになっていますからね」

確かに、製造工程も確認したが

全て包装されているのも確認済。

六合塚が建造物のデータを密かに照らし合わせながら確認しているが
今のところ、怪しげな場所は見つかっていない。
「他に、なにかご質問は？」

一宮の言葉に雛河がそっと手を擧げる。

「どうぞ、雛河執行官、お答えしますよ？」

ぶつ飛んだ質問をしないかヒヤヒヤしつつも

霜月は雛河に視線を送る。

「この会社…、なにか脳神経に直接作用するような

そんな薬を開発してたりしますか…？」

「脳神経薬なら数種類、既に世に出回っていますが…」

「もつと強力な、抗うつ薬よりもつと神経を麻痺させるような…

過激で強りよ」

「雛河執行官！」

…すみません、彼は元々ドラッグバイヤーをしてた者で…

薬品の人一倍興味があつて…」

霜月が雛河の腕を掴み、なんとか話を止めさせる。

恐らくあの赤い薬について情報を掴もうと

ついつい興奮してしまったのか、あと少しで
かなりの不信感を抱かれてしまうところだつた。

「そうだつたんですね！」

それなら気になつて仕方ないはずですね」

一宮はとくに怪しんでいる様子は無く

むしろ嬉しそうに会話を弾ませていた。

しかし彼はそれ以上”脳神経に作用する過激な薬”について何も言葉を発さなかつた。

「では次が最後ですね：」

超巨大物流倉庫にご案内します

「ここから少し距離があるので車で移動しましよう」

「もう車は中庭に待たせておりますので、皆さんこちらへ」

テキパキと、まるで指摘するような所もなく

全て隙なく準備されているとしか思えなかつた。

「…六合塚さん、準備は」

「大丈夫です

霜月監視官、籬河君にも既に渡しています」

超小型発信機

4人はそれぞれ数十個ずつ懐へと隠し持っていた。

「では皆さん、どうぞ、こちらの車へ」

舟橋が車内へと4人を誘導する

ここからが一番の勝負処だった

そして6人を乗せた車両は物流倉庫へと向かう
・
・
・
・
・
・
・

崩れる微笑

「すごい規模の倉庫ですね…」

車を降りると目の前には巨大な物流倉庫。

航空機やトラック、様々なドローン。

また、珍しく完全に機械管理ではなく人の姿も多くあつた。

「完全機械化を行っていないなんて珍しいですね？」

「なにか理由でもあるのですか？」

六合塚が一宮に問いかけると

ニコニコと満面の笑みで答える、

「機械はとても便利です、ミスもなければ事故も起こさないまさに優秀な”機材”

しかし、我々は人の”目”も大事にしてます

機械が細かく管理を行い、最終的には
生身の人間でチェックを行っています

この会社の昔からのポリシーといいますか…

「全てを機械に頼らない…成程ね…」

関心するように倉庫を見上げる六合塚。

「では、中に案内しましょう

念の為こちらのヘルメットを着用してくださいね」

ヘルメットを手渡され、よいよ内部へ。

六合塚は列の一番後ろで興味深そうに、辺りを見る仕草をしながら
微かにデバイスで倉庫の形や、周辺の地図を確認していた。

药品は鉄製の箱に全て梱包され

次々とトラックや輸送機に積まれていく。

シルバーの鉄製の箱には、

”トランスペアレンント製薬”と誰もが知るロゴマークが印字されており

箱は全て環境問題の観点も含めて、
全て回収を行つてゐるらしい。

環境問題にも視点を向けられ、徹底した管理体制。
人の手も使い最終チエツクも怠らない姿勢。
指摘する点はどこにもない。

「素晴らしい管理ですね

従業員の色相もクリアカラーナー：」

「ありがとうございます

こうして国民の皆様に薬品を届けられるのも

従業員の日々の頑張り……

…おつと、管理部から内線が、

少し失礼するよ

舟橋くん、宜しくね』

一宮のデバイスが鳴ると、申し訳なさそうに姿を消す。

残された舟橋が返事をすれば
にこりと4人に笑みを向ける。

1人、会社の人間が姿を消し

今がチャンスだと常守達は目を合わせる。

「舟橋さん、少し倉庫内を見学させていただいてもよろしいですか？もちろん立ち入り禁止区域などありましたら近づきませんので」

「はい、もちろんです

ただ大型の重機やドローンがありますので気をつけてくださいね？」

「…そうですね…広くて迷子になつても大変ですし
よかつたらこちらのマップを使つてください」

舟橋から送信される倉庫内のマップ。

見学者用に作成されているのか、とても分かりやすく大まかに作られていた。

「一般の工場見学者用のマップで申し訳ないのですが…」

20分後に再びこちらの倉庫のエントランスに集合でいかがでしようか？」

「はい、分かりました

「ご親切にありがとうございます」

常守が礼を言うと

4人は二手に分かれて倉庫内を捜査することに。

常守、雛河ペアは2階

霜月、六合塚ペアは1階を重点的に回る事に
しかし時間はたつたの20分、

一宮が戻つてくる前までに疑われない程度に回る必要があつた。

「何かあればすぐに連絡を

：雛河君、行きましょう」

コソッと全員に声をかけ

常守と雛河は怪しまれない程度に急ぎ足で姿を消した。

「六合塚さん、私達も行きましょう」

「はい」

六合塚は工場見学者用のマップと

密かに手に入れた工場マップの大元を唐之杜に即送信。

4人はそれぞれ各自の仕事をこなしていく。

従業員やカメラの場所を把握し

ランダムに発信機を取り付けていく。

特殊な発信機でサイズは直径約2mm。

こちら側から遠隔で壊すことも可能。

万が一、再びこの施設に発信機付きの箱が戻ってきたとしても
恐らく、タダのゴミ程度で処分されるような造りになっていた。
「特に怪しげな箱は無し……」

「……一度梱包された箱の中……」

特殊な機械がないと開かない造り……

…というかロックされてる……」

「病院や薬局に届いてから

工場側でロックを解除する、すごい徹底管理ね……」

「たとえ輸送用のトラックが何者かに襲われたとしても
簡単に開けられない……」

常守は何かをひらめくと

持つてきていたハンドバツクから何かを取り出す。

「輸送先、箱の解除先のデータ

例えば病院、薬局：それ以外の怪しい場所が分かれば

話は早いわよね」

「え…もしかして、ダンゴムシ…」

常守はシーインでもハツキングで大きく役に立つた

高機能小型ドローン 通称“ダンゴムシ”。

バッグの中で起動させ、近くの電子版の隙間に潜ませる。

「あとはダンゴムシに任せて

私たちは残りの発信機を」

大胆な行動に雛河も驚きを隠せない。

常守ペアは残り時間、残りの発信機を設置していく。

・・・・・

「とりあえずそれとなく発信機は付け終わつたし…」

霜月達も発信機を付け終わると
あと残り5分ほど。

倉庫内を適当に歩いていると、六合塚宛に唐之杜から電話が入る。
「志恩、なにか見つかった?」

『もうダンゴムシからの解析に大忙しよ』

「ダンゴムシ? つて…もしかして先輩

この施設にダンゴムシを使つてるの?』

「ここだと死角も多いし

何より監視の目も今ならない』

「…大胆すぎるでしょ…』

常守のいつもの大胆な行動にため息を吐くも
珍しく、それ以上は文句を言わなかつた。

「で、連絡をしてきたつてことは何かあつたんでしょ?・志恩」

『そうそう

…まだ動ける時間ある?』

「あと5分くらいなら」

『5分：ギリギリね

：今2人がいるその場所から北西方向に

送つてもらつた地図と大きく違う箇所があるの

恐らく：そこに地下施設へ繋がる何かがあるはず』

霜月は再びマップを見るも

こここの表示階数は1階、2階のみ。

「地下施設？」

ただの下水処理施設とか

そういう規模のものじゃなくて？」

『小さい通路、とかそういうレベルじやない

その施設同等の大きさの地下施設があるみたい

あくまでも色んな情報を重ねた結果だから確実かは分からないけど……』

「オーケー、

：六合塚さん、行きましょう

志恩さんは同じデータを先輩にも送つておいてください

連絡している暇は無さそうなので……』

2人は通話を終わらせると

唐之杜が言つていた場所まで専用の移動車に勝手に乗り込み、目的の場所へ向かう。

従業員達は不思議そうにその光景を見るも

2人は無我夢中で走り抜ける。

?????????????

「マップを見る限りこの辺りのはずです」

目的地にたどり着くも

地下に繋がるような場所は特に見つからない。

箱などがただ積み重なつて置かれているだけの場所のようだつた。

従業員の姿は無く、監視カメラだけがやたら設置されていた。

「…大体、こういつた所に隠されてたり…」

デバイスの機能を使い

壁に向けて光を放つ。

すると箱が積まれて いる後ろの壁に、なにか反応が示された。

「ビンゴ……」

微妙に壁と箱の間に隙間。

その後ろに隠されていた扉。

しかし、セキュリティがかかつており中には入れそうになかった。

「あと1分……なんとかロックを解除できるかやつてみます」

六合塙が、扉の傍らの装置に触れようとした瞬間、誰かが駆け寄ってくる足音が聞こえると2人は慌てて隙間から脱出。そして現れたのは

総括者の一宮祥太郎だつた。

かなり慌てた様子で先程の柔らかい印象ではなく、若干怒りを滲み出しているような雰囲気だつた。

「すみません、倉庫内が広すぎて」

気づいたらこんな隅まで来てしまつて

霜月は平然を装い、

ただ迷つて奥まで来てしまつたと弁明する。

しかし男の表情は変わらなかつた。

「専用車を使つてこんな奥まで……」

「一体何が目的で?」

「捜査ですよ、何も問題ありません

……特に立ち入り禁止場所はないとの事だつたので

色々と調べていただけです」

霜月は何かを確認した、というような怪しげな表情を向けると
一宮に浅く礼をする。

「わざわざ探しに来てくださつたみたいで
申し訳ありませんでした

：そろそろ時間ですよね？舟橋さんに指定されていたエントランスに戻りましょう
途中でお借りした専用車も戻さないと……」

霜月と六合塚は2人乗りの専用車に乗り込むと
一宮から離れ、エントランスへと向かう。

「……おそらく気づいてますね、あの男……」

「あの人もあんな顔するのね

よっぽど見られたくないものがあの扉の向こうにあるんでしょう
六合塚がデバイスを開き

先程の扉の写真を開く。

「さすが六合塚さん！」

「記録ありがとうございます」

「残念ながらロック解除のコードまで解析は出来ませんでしたが……」

「もし先輩たちもなにか見つけていれば

最悪強制捜査も可能ですから

……何か胡散臭いのよね、あの一宮って男……」

笑顔を絶やさなかつたあの男の

焦つたような、怒りを滲み出したような表情。
どう考えても違和感しか感じられなかつた。

・・・・・

任務完了

・・・・・

「…美佳ちゃん、六合塚さん

一体何をしたんですか？」

志恩さんから何となく話は聞きましたけど……」

帰りの車内にて、常守は2人に問いかける。

理由は明白だつた。

・・・・・

・・・・・

「専用車の無許可利用に倉庫内スピード違反
誰も怪我はありませんでしたが

……常守監視官、部下の再教育をよろしくお願ひします
そして捜査協力は次回からは令状を用意してください！
私達も大切な薬品を扱っていますので
そこのところ、ご理解頂きたい」

あの温厚な一宮が人が変わったかのように
常守にキツく言い放つた。

確かに、言われるようなことを行つたのが悪いのだが
一宮の焦り方、まるで別人のように顔色が変わり
広報の舟橋も慌てた様子だった。

・ · · · ·

「唐之杜分析官があの倉庫の異変に気づいたんです
…その場所に行つて調査をしていたら
慌てた様子で一宮が現れた」

六合塚がギリギリ撮影した扉、ロツクされた装置を送信すると常守は眉を顰める。

「その地下に何かある

でも残念ながら、中まで調査は出来なかつた」

「大量に箱が積まれていて

他の従業員たちにも分からぬように隠されているようでした
霜月と六合塚は、明らかにあの場所が怪しいと勘づいていた。

「さすがにあの様子だとまた捜査協力は難しいでしようね」

常守は送られてきた画像から

発信機の追跡画面に切り替える。

「でも、目的は無事達成したわ

…」れで、なにか掴めればいいんだけど…

あとはダンゴムシの解析結果に期待するしかなさそう

デバイスをオフになると

視線を外へと向ける。

そして暫くすると

ハンドルを握っていた雛河が言葉を発す。

「……結局あの赤い薬品……何かわからなかつた……」

暴走しかけた雛河は

霜月にこつびどく叱られ、どことなくシウンつと落ち込んでいる様子。あの赤い薬品については何処にも手がかりはなく

雛河が追いかけていた情報は結局掴めず、

もしかすると、トランスペアレント社は白なのかもしれない自分自身を疑心暗鬼していた。

「まだ捜査は始まつたばかり、焦らなくて大丈夫よ

とにかくやる事はやつたんだし、皆お疲れ様……」

4人の乗つた車両は

厚生省へと戻つて行く。

・ · · · · · · · · · ·

厚生省公安 局 分析室

唐之杜は啞えていたタバコを灰皿へ押しつぶす。

ダンゴムシがハツキングした情報をモニターへ映し
怪しげな数字の羅列を見つけ眉を顰める。

見ていた情報は

トランスペアレント社の薬品の輸送先一覧。

大学病院から小さなクリニック、薬局、

小中高校、老人ホーム、ありとあらゆる場所の名前や住所が
何千、何万件と羅列されていた。

「……埒が明かないわね……」

「でも、こうすれば……」

カタカタとキーボードを捜査すれば

徐々に絞り込まれ、最終的に目の前のモニターに

とある位置情報らしき情報が一件だけ表示される、

しかし、名前や住所、電話番号は空白

ただ数字だけが羅列されている項目が一つだけあつたのだ。

「…3726228425083723345825132355916833820」

長つたらしい数字に目が疲れ、眉間を指で摘むと

後ろへぐーっと仰け反り、体を伸ばし

再び羅列された数字を睨みつける。

「何かしら、この数字…」

新しいタバコに火をつけ、首を回せば気合いを入れ直す、

「朱ちゃん達が付けてくれた発信機にも動きが出てきてるし

これは今日も眠れないわね」

分析室のモニターに映るのは無数の赤く点滅する印。

各薬品が正しく指定された輸送先へ運ばているのか、

はたまた、空白の場所に、リストにない場所へ運ばれればすぐに分かる。

唐之杜は疲れているはずだが、どことなくワクワクと

気持ちが高揚していた。

・・・・・・・・・・

偶然の出会い

・・・・・

乗り捨てられた大型車両。

中には既に誰もおらず、

しかし数時間前まで誰かが使用していたのか
エンジンは温かかった。

中には追い求めていた組織に関連する資料が散らばっており、
”?”の文字を見つけるとその人物は
即、何者かにデバイスを介して連絡を入れる。

「…御報告を

おそらく?の所有物だと思われる車両を確認

しかし中は既にもぬけの殻で……

……はい、……はい」

被つていたフードを外すと、珍しいブロンドヘア。瞳の色は美しいグリーンカラーでこの国の者ではないとすぐに分かる。

「いえ、私一人で問題ありません

……狡噺はそのままそちらで待機の方が良いかとウイグル自治区といえどほぼチベットとの境界、指名手配犯にウロウロされては困りますから……

……はい、では

また何か分かれば報告をさせて頂きます失礼いたします」

その人物は外務省海外調整局の

花城フレデリカ

とある調査のため、単身でこの危険地帯に足を踏み入れていた。
「何故……こんな所に奴らの車両が……？」

運転席など組まなく調べると

やけに白く光る毛髪を見つけ指で拾い上げる。

「乗組員の1人は白髪、ね

…まだそんなに遠くへ行つていないはず

さつさと取り押さえて聴取しないと」

花城は再びフードを被ると外へと飛び出す。

少しづつ雪の量が増えていき、益々視界も悪くなつていく。

・・・・・

進むにつれて、空から降り注ぐ雪が増えていき
なんとか目を細めながら道を確認し進んでいく。

途中まで車両移動が出来たため

予想より2日も早く目的地付近へたどり着く。

しかし、すぐに乗り込むのは危険。

できるだけ状況を確認して、自身の体調も整えて乗り込むつもりだった。

しばらく進むと寂れ放棄された町を見つけ

なんとか一息つけそうな小屋へとに入る。

木造の小屋は酷く寒く

すぐに暖を取らなければ凍傷は確実。

小屋の中に石窯を見つければ

すぐに車両から盗んだ燃料を使い火を起こす。

マスクを外すと口から漏れる白い息

手がブルブルと震え危険な状況だつた。

「…………はあ…………はあ…………」

危なかつた……

こんなに視界が悪いならやつぱりあの車使えばよかつた……』

石窯に手を近づけ徐々に体が温まると

ゆっくりと地べたに腰を下ろす。

強まる吹雪にガタガタと揺れる小屋

荷物から、ウール製のひざ掛けを取り出すと体にまきつけるように羽織り目を閉じ

る
9°

????????????????????????????

「…………しろ…………おい…………」「

誰かが私を呼んでる
でも眠くて眠くて堪らない。

「おつづき」

……舞白……舞白！」

「あと……5分……」

「起きて！死ぬぞ！……おい！舞白！」

激しく体を揺さぶられる
その相手は

?????????????????
!?

慌てて飛び起きる

既に部屋は真っ暗。

外の吹雪も止んだのか、やけに静かだつた。

そして付けていたはずの石窯の火は消え、
室内は異常に寒くなつていた。

「危ない……私眠つて……

……変な夢見て……」

もし眠り続けていたらおそらく死んでいた。

寒いと眠くなるつて本当なんだ、なんて呑気に考えながら
再び石窯に火をつける。

「……まさか、夢の中にまで出てくるなんて
そろそろ死ぬのかな私……」

私をたたき起こしたのは、宜野座だった。
血相変えて、私の両肩を掴み、強い力で揺さぶられ
気づけば命を助けられた。

ゆつくりと立ち上がると石窯へと近づき、そばに置いていた燃料へと手を伸ばし再び
火をつける。

しかし、舞白はなにかに気づくと
ゆつくりと両手を上げる。

「……動かないで、そのまま」

何者かが背後に立っていた。

声からして女性だと確認する。

銃口を向けられている感覚を察せば

戦う意思はない、と舞白は無言で両手を上げ続ける。

「ポケットのナイフ、銃、全て床に捨てなさい」

「……分かりました……」

言われた通りにすべてを床に投げ落とす。

その姿を見た背後の女は微かに銃口を降ろす。

そして刹那、女の手元に舞白の長い脚が振り下ろされれば手から銃が転がり落ち、

容赦なく舞白は女に向けて攻撃を繰り返す。

(（……強い……つ……）)

女はなんとか攻撃を防ぐことで手一杯何とか相手の顔を確認すると女は目を見開く。

雰囲気が、戦術が、鋭い目付きが
とても似ている、と
狡噺慎也に——

「はあっ！」

舞白は女を床にねじ伏せ
女のマスクとフードを剥ぎ取る。

ブロンドヘアに透き通つたグリーンの瞳
花城だつた。

「……あなた、何者!?

突然銃口を向けるなんて……」

花城は床に抑えられたまま、なんとか懐から身分証を取り出す。

「私は外務省海外調整局……花城フレデリカ……」

「……外務省、あなた日本人……?」

「落ち着いて話をしましよう、銃口を向けたことは謝るわ

：あなたは……」

花城が舞白に名を聞こうとした瞬間

2人は瞬時に何かを察知する。

舞白はすぐに石窯の火を消すと銃を片手に、

窓辺へと向かい外の様子を伺う。

同じく、花城も舞白の向かいに立てば、外の様子を同じように伺う。

松明を持つ人々

そして鎖で繋がれ、この寒さのなか裸足に薄着、

酷くやせ細り、今にでも倒れそうな人間達が複数人歩かされていた。

「……もしかして、？……」

舞白は呟くと窓辺からゆつくりと離れ
コソコソと荷物をまとめていく。

「……あなた、何をするつもり？」

「奴ら、おそらく私が追つている組織です
外務省の花城さん？」

「すみませんが話はまた今度……」
「待ちなさい！ 危険よ！」

舞白は、ナイフや銃を懷に入れ
スナイパーライフルを背負えば上着を羽織る。
「チャンスなんです

……では、どこかで会えたら……」

花城は舞白を追うことが出来ず
中から外の様子を伺うことしかできなかつた。

(（……白髪、涙ボクロ、それにあの強さ

目付き、雰囲気……戦術も……

……間違いない、あの子は

狡噺の妹……）

以前狡噺が話していた妹の特徴が一致。

花城は微かに笑みを零せば、銃を握りしめたまま外の様子を伺っていた。

・・・・・

面影

・・・・・

「お願ひだ……どうか命は……命だけでも…」

げつそりとやせ細つた老人が地面に跪き、

松明を手に持つた集団に頭を何度も下げる。

他にも赤ん坊を抱えた女性や、少年少女、

10数名の人間達が鎖で繋がれていた。

その老人が話していた言語は片言の中国語、

テソン達は仲間内ではウイグル語を使用していたが

おそらく彼らは収容所内で何年も過ごし

ウイグル語を手放している。

昔から根強よく残るウイグル人への迫害は、まだ続いているようだつた

舞白はそつと建物の物陰から様子を伺う。

?と思われる集団、全員がマスクを被り
目元しか確認は出来ないが

武装した風貌を見る限り、間違いない

体格からして全員男、ガタイの良い大男ばかりだつた。

「あ……あう……いの、ち、……

……この……こ、の……ああ……うあ！」

赤ん坊を抱えた母親らしき女性。

まともに言葉を話すことが出来ておらず、

口をパクパクとさせながら、男たちに何かを訴えていた。

「殺せ」

中でも飛び抜けて背の高い男、

確かにそう呟けば、一瞬で女性は頭を撃ち抜かれ

赤ん坊を抱きしめたまま、雪の積もる地面に崩れ落ちる。

そのまま布に包まれているであろう赤ん坊も

撃ち殺されれば舞白は思わず口を塞ぐ。

「…………ッ……酷い……」

助けに出たい衝動をなんとか抑える。

男たちの数は確認できるだけでも10人以上足場も悪く、松明だけで照らされたこの場所で1人で立ち向かうには無謀すぎる状況だつた。

「…………ッ……お願ひします、

何でもするから……助けて……：

せめて妹だけでも……お願ひします……」

おそらく歳は10程だろうか

1人の少年がビクビクと怯えながらも傍らで、ぼんやりと座り込む幼い妹の手を握りしめ男達に訴えかける。

「…………いいだろう」

リーダー格らしき男がそう呟けば

懐からナイフを取り出し、少年の足元に投げ捨てる。

「何でもするんだろう？」

：選択肢をやろう

妹の首を切り落としてお前が生き残るか……

お前が自害して妹の命を救うか……」

「へ…………」

「何でもすると言つただろう？」

お前の命か妹の命、どちらかを保証してやろう」

残酷な選択肢に少年の表情が更に恐怖へと陥る。

妹も先程の母親のように何かブツブツと呟きながら
目が虚ろになっていた。

兄と妹、なんとなく舞白は自分と狡噺を重ね合わせる
そして銃を握る手の力が更に強まつていた。

「どうした少年？せっかく与えた選択肢だ

……首はこの辺りを引くように一気に差し込めば

確実に死ぬ……

太い血管がこの辺りにあつてな？

ただ……かなり苦しむだろうなあ、痛いだろうなあ……」
ケラケラと笑いながら少年に近づき、

首を厭らしく指でなぞると、周りの男たちも笑い出す。
ナイフを両手で握り呼吸を荒くする少年。

横目で妹を見るも、なかなか決心がつかないようだつた。
「どうした？ 怖いか？」

……やはり、自分の命が惜しいか？」

「ツ……本当に妹を助けてくれるんだよな？」

「ああ、勿論だ

約束はきちんと果たそう」

大嘘だ

こんな野蛮な奴らが約束なんて守るはずがない。

しかし少年は妹が助かるなら、と

再び深呼吸をすればナイフを突き立てる。

妹の為に命を投げ出す幼い少年。

((……こんな事……許されない……))

舞白は我慢ならず銃を構え、トリガーを引く

少年が突き立てていたナイフに命中すれば、
ナイフは弾かれ、地面へと落下。

「?」

続けてリーダー格らしき男に発砲するも
交わされてしまう。

「何者だ!」

男達は一斉に銃を構えると、

発砲された方向へと向ける。

舞白は勢いよく駆け出すと

男達に襲いかかる。

松明の灯りのみを頼りに戦うも、やはり条件は悪い。

多勢に無勢

相手方もかなり訓練をされているのか
なかなかいつものように簡単には倒れない。

「ツチ……」

リーダー格の男は仲間を数人連れ逃げるようになその場から離れる
残った10人程度の男達に邪魔をされ
追うことが出来ない。

「……ツ……

…あなた！その人たちを連れて逃げて！」

立ち尽くす少年に向かって、舞白は声を荒あげる。

「で、でも……」

「妹を助けるんでしょ！？」

：早く！他のみんなも連れて逃げるの！」

幸いにもこの場所には他にも小屋がある

寒さを凌げば生き残るチャンスは十分にあつた。

「は……はい!!」

少年はなんとか他に捕縛されている人々を誘導するよう
その場から離れる、

「クソ！……いつ……

さつさと殺せ！」

更に激しくなる相手の攻撃。

しかし、相手も視界が悪いのか発砲するものの、舞白を捉えることは出来ていない。
1人ずつ確実にねじ伏せていく。

逃走する者やその場に倒れる者、

残り2人になつた時、舞白は動きを止めて銃口を向ける。

「……はあ……はあ……

……動かないで……そのまま……」

「こつ……降参だ！ほら！この通り……
な？なつ？」

2人は膝をつき武器を捨てる。

その様子を確認すると舞白も銃口を降ろす。

?について聞き出すチャヤンス。

2人を捕縛しようと近づく瞬間、

舞白の後ろで倒れていた男が銃を握り弾を籠める。

微かに聞こえた音に舞白は慌てて振り返るも時すでに遅し。発砲音が響くと舞白の右首を微かに弾がかすれば

その場に倒れ込む。

衝撃で顔を覆っていたマスクも吹き飛び、白銀の髪の毛が露わに。

降参していた男達が再び銃を握ると

仰向けて倒れる舞白に笑みを浮かべながら見下ろしていた。

「……ツ……」

重症は避けられたもののえぐれた皮膚からは血が溢れる。体を起こそうとするも、力が入らない。

「おい、アルビノだぞ

これは上玉だ……」

「脚でも切り落として連れて帰ろう……」

絶体絶命

まさか、こんな所で……と

舞白が顔を歪めた瞬間。

銃声の音と同時に

目の前の男たちが倒れていく。

「……馬鹿ね、あなた」

現れたのは花城。

手にはライフルを構えており、容赦なく男たちを撃ち殺した。

「……………」

舞白はガクツと意識を失う

花城はササッと応急処置を施せば

軽々と体を抱き上げ、先程の小屋へと向かう。

「本当、お兄さんにそつくり」

花城はデバイスである人物のID情報を確認していた。
IDの画像は黒髪だが間違いなく顔は同じ。

狡噺舞白

花城は微かに笑みを浮かべていた。

・・・・・

負の連鎖

「…………」

・・・・・

意識を取り戻し

ゆっくりと瞼を持ち上げる。

微かに光を感じ、顔を左横に動かすと

窓から陽が射していた。

そして右横に目を移せば

助けた少年が地べたに座り首をコクコクとさせ、

眠気と戦っているようだつた。

「……確かに撃たれて……あの人があけてくれた……」

体をゆっくり起こすと見覚えの無い景色。

先程の小屋と同じようにかなりボロボロだが全く違う建物だと気づく。

首の傷も浅く、ガーゼが当てられていたがすでに出血も止まつており、痛みも少ない。かけられていた毛布を剥がし、少年へとかけるとそれに気づいた彼は目を覚ました。

そして嬉しそうに目を見開き声を上げる。

「……っ！白髪の姉ちゃん！起きた！！」

大声で舞白が起きたことを知らせるように叫ぶと部屋の外から足音が近づいてくる。

コンコンつとノック音が響き、扉がゆっくりと開く。

「あら、早い目覚めね」

「……花城……さん」

花城は舞白へと近づき、しゃがめば首の傷を確認する。問題ないと分かれば、巻き付けていた包帯を解いていく。

「あの……すみませんでした、」迷惑を……」

頭を深々と下げる花城へと向き直る。

すると花城はフフッと笑みを零すとこう話す。

「本当に無茶するのね、」兄妹揃つて

「……え？ どういう…」

花城はただ笑みを浮かべるのみ。

再び立ち上ると少年に1階に降りるように伝える。

「一先ず、の人たちを引き渡さなければならぬのあなたが無茶して助けた人達ね

ほら、さつさと起きて手伝いなさい」

問い合わせに答えることはなく

部屋から立ち去る。

舞白は追いかけるように1階へと降りていく。

?舞白が撃たれてから数時間が経過しており

既に時間は朝の9時を回っていた。

身を隠す場所を変え、保護した対象者達の健康観察を行い、花城とまた、目的の為に既に様々な情報を得ていた。

そして以前舞白が乗り捨てた車両に

花城は保護対象者達を乗せると小屋の前に立つ舞白に声をかける。

「私はチベットの境界までこの人たちを送らないといけないから

あなたはそこに居なさい」

「……」

「何よ、また戻つてくるから

気になるんでしょ？私の話」

花城は笑みを浮かべれば運転席の窓を閉め車を発進。

どちらにしても彼らの情報を聞いたであろう花城から離れる訳にも行かず

舞白は言われた通りに小屋で待機することに。

?????????????

????????????

外務省のとある別部隊に
保護した人々を引き渡す。

中には薬物により酷く精神を壊した者。

ストレスにより言葉を発することができない者、など

様々な問題を抱えていた。

そして全員に共通していたこと、

体のどこかに、必ず痛々しいあの焼印を押されていたのだつた。

????????????????

「うん、やつぱり……

目とか……雰囲気?

どう見ても狡噺よ」

戻ってきた花城はひたすらに舞白の容姿見れば
兄とそつくりだと言ひ放つ。

「まあ、兄妹なので…

性格は私の方が結構呑気とか言われたことはありますけど」

すっかり暗くなり、2人は小屋で目立たないように暖を取りつつ
様々な会話を交わしていた。

舞白が？を追う理由

今までの経緯、

花城のチベットヒマラヤ同盟王国での出来事

兄が指名手配犯に仕立てあげられた理由

元公安局に居たことや

このウイグル地区に来た理由……

花城曰く、？はウイグル人による組織だと。
大昔から迫害され続けたウイグル人達は
武器や薬品、そして大金を手にし、

負の連鎖を今の時代まで繋げ続けていた。

「過去に迫害を受けてきたウイグル人の残党たち、

おそらくアイツらも子供の時から迫害されて来たのよ
 …自らその連鎖を絶つことは無く、むしろ金や権力を手に入れれば
 その支配欲をむき出しにして、また新たな世代へと迫害を続ける」
 確かにあの男たちは目元しか確認はできなかつたものの
 ウイグル人特有の骨格をしていた。

そして言語は中国語、

過去に洗脳されていた子供たちが今はあの様に、
 今度は自分たちが迫害を続けている。

「……で、その出どころを調べているのが

外務省…つて事なんですね」

「ええ、そうよ

薬物に武器、そして金

どう考えたつてこここの国で貪れるような物じやない」
 舞白は不意にタツカが話していたことを思い出す。

「ある町で元々？で傭兵をしていた人物に遭遇したんですけど

…薬品が入つていた箱に日本語が書かれていたって」

「その情報、信頼出来る？」

「その人物が嘘をついているようには思えません

日本語は分からぬいけど、確かに日本語が箱に印字されていたと」

花城は顎に手を添え、考え込んでいた。

「実は極秘なんだけど

今回私が来た理由のひとつに、日本の企業が絡んでるんじやないかっていう噂があつてね」

「武器提供や薬品提供を日本がやつてるってこと……？」

花城は頷くと

舞白に視線を移すと何かを決めたような表情を浮かばせ

次の単語を呟く。

「……ピースブレイカー」

「……？」

「つて、どこかで耳にしたことは？」

全く聞き覚えのない単語に舞白は首を振る。

花城は残念そうに肩を落とすと、ため息を吐く。

そして話を変えようと再び花城が口を開く。

「……そういえば、あなたはいつ?に乗り込むつもり?」

「今夜、向かいます

夜の方が色々都合は良いので

…花城さんはこの後は?」

「私は?に乗り込む前に少し調べたいことがあつてね

できればあなたと行動をしたかつたけど
きつと断るでしよう?」

「私は単独行動が良いので…

でももし中で会えたらその時は

「協力、してくれるのね?」

舞白はへへへつと笑みを零すとこくりと頷く。

「…兄が、あなたのような人に出会えて

日本に戻ると決めたと聞いてホッとしました
偶然にも、花城さんに会えて良かつた
実際あなたがいなければ私は死んでいたかもせんから」
舞白はリュックに荷物を詰めていくと
上着を取り羽織り始める。

「どうか兄に伝えておいてください

私はめちゃくちや元気だよ、つて

「……あなたが直接伝えればいいのよ」

舞白はマスクを被つていると花城の声が上手く聞こえなかつたのか聞き返す。
しかし花城は“なんでもないわ”と呟くのみ。

「では、お世話になりました

花城さん

⋮どうかご無事で

深々と頭を下げれば舞白は外へと消えていく。

3章

良いコンビ

港区四丁目 港南地区

ひと仕事を終えた霜月と宜野座は
休憩がてら車を停めて、
海を眺めていた。

宜野座はなんの気なく住宅地に目を向ける。
目線の先は、見慣れた低層マンション。

狡噺兄妹の住んでいた家、

目の前の浜辺はある時舞白が事件に巻き込まれた場所に

続いていた。

そして霜月はいつもと様子の違う宜野座に気づくと口を開く。

「元刑事課、狡噺慎也の妹、その友人が巻き込まれた事件
ここからすぐ側ですよね」

「…あの事件に関しては箝口令が敷かれているんだが
もしかして調べたな？ 霜月」

「狡噺舞白に関しての事は全部調べさせてもらいましたよ

唯一分からぬのはＩＤ情報の閲覧制限 Lv5 の部分だけです
相変わらずの調べ癖に、宜野座は微かに笑みを浮かべれば

マンションから視線を外し海を眺める。

「…実は俺もあいつに関してのことは調べ尽くした

でも、結果として大した情報は得られなかつた

「宜野座さんと狡噺舞白ってどういう関係性なんですか？」

霜月は車に寄りかかり両手を組むと横の宜野座に視線を向ける。

シーアンの時も、少しづか様子は見られなかつたものの、舞白と宜野座の関係性は何か違うものを感じていた。

「どういう…つて

まあ……妹みたいな存在だ」

「…嘘でしょそれ、絶対嘘です」

「何だ、いきなり？」

「今は休憩中なので勤務外ですから

それに、私もたまには部下と：プライベート、といふか

普通の会話を……」

どこかバツが悪そうに、ごによごによと言葉を誤魔化す霜月。

再び視線を海へ戻すと、宜野座は霜月の変化に、心の奥底で微妙に嬉しさを感じていた。

「珍しいな、そんなことを言うなんて」

今まで、監視官と執行官、という立場で大きな壁があつた霜月。

しかし、最近は彼女も変わろとしているのか

そんな姿勢が、日々の部下との関わり方で感じられていた。

「舞白の事、気になるのか？」

「…正直、境遇がかなり似ているので

興味はあります」

史上最年少で監視官に抜擢された2人。

そして霜月は幼なじみを、舞白は親友を

槇島の手により殺害されていた。

そして2人が同期で、監視官として、働いていた可能性は十分あつた、

「霜月と舞白が、もし監視官として一緒に働いていたら

きつと良いコンビだつたと思うぞ」

「……」

「あいつは傍から見るとただの天真爛漫な”少女”

霜月とは正反対の性格だ

：だが、時に奇想天外な行動を起こす、

自分のことは二の次、突発的に行動するからな」

「絶対無理なんんですけど、振り回されるの確定じやないですか

：先輩と一緒に……」

「いや、常守ともまた違う

……何ていうか……面白い奴なんだよ、舞白は

”舞白”という名前を口にする度、どこか儂げになる宜野座。その表情を見ればすぐ分かる

「常守が昇進して、一係の監視官が霜月と舞白、そんな環境も悪くないな」

「無い無い、有り得ないです

変な妄想するのやめてください、宜野座さん

それに昇進するのはこの私ですから」

霜月の言葉に笑みを浮かべる宜野座。

「会つたら分かるさ、

直感だが、霜月とはいコンビになる」

”まあ、そんな時は来ないだろうが”なんて呟き

宜野座は車内へと戻る

「振り回されるのは先輩だけで結構です」

フンつと息を吐き

霜月も車内に戻ろうとした瞬間。

宜野座と霜月のデバイスが鳴ると

唐之杜が焦った様子で通話を始める。

『2人とも、もうさつきの件は片がついてるわよね?』

さつきの件、エリアストレス上昇に伴い出動していた2人
しかしとつくに解決し、休憩もしていたところだつた。

「はい、ちょうど公安局に戻る予定で……」

『例の件、動きがあつたの

トランスペアレン特社の薬品輸送』

「残りの発信機に動きが?」

トランスペアレン特社の物流倉庫の薬品の箱に取り付けた発信機、

あれから一週間が経つていたが、今のところ全ての薬品がきちんとした病院や薬局に届けられていた。

『あの謎の数字が羅列されてるの、あつたでしょ?』

その場所に1台の無人トラックが向かって、経路予測もバツチリ』

『その経路予測地点は?』

宜野座は唐之杜から送られてきた、
リアルタイムの無人トラックのナビを確認する。

『ちょうど、2人のいる近くなの

港区一丁目、何年も前に放棄されてる

台場の航空輸送倉庫よ』

「……距離的にトラックよりも後に到着になるけど

大丈夫です、すぐに向かつて確認します」

『美佳ちゃん、宜野座君、頼んだわよ

他のみんなは出払っちゃつて応援も厳しいと思うわ』

「問題ない

俺と霜月でなんとかなるさ」

『さすが良いコンビね、こちらからにか分かればまた連絡するわ』

刹那、切断される通話

宜野座と霜月は目を合わせ軽く頷くと
現場へと急行する。

最低最悪な状況

・・・・・

港区一丁目 台場

何十年も昔は、商業施設などでかなり栄えていた場所。
しかし今では一部は廃棄区画になつていて、
使われていない物流倉庫などが立ち並んでいた。

発信機の示す場所は

既に使われていない小型機専用の飛行場。

その敷地内にある輸送機の倉庫だつた

2人は車を停め、ドミネーターを手にして鎧びれた

鉄格子の門を開けると敷地に足を踏み入れる。

「飛行場……

もしかして航空機でも使うつもり?」

「どうだろうな

……でも、もしあの密入国者たちと薬品に直接的関係があれば
なんとなく辻褄が合う

もしかすると案外この場所が入り口になつているのかもな」

この辺りは警備ドローンもなく、抜け道はいくらでもある。

様々な可能性を2人は思い浮かべつつ、ゆっくりと倉庫内へ足を踏み入れる。

「あの謎の数字の羅列の場所がもしここののであれば

薬品の入った鉄の箱は自動的に開くはず

……そうなれば即刻あの会社に

強制捜査ができるわ……」

「……こんなに簡単にバレるような場所なら

わざわざ数字で誤魔化さないはずだと俺は思うが」

「ここが『ゴール』じゃないって事？」

「そういうことだ、恐らくその箱とやらは開かない

必ず次の目的地があるはずだ」

倉庫内には、もう動かないであろう小型の航空機や、軍用のヘリまで放棄されていた。発信機を見る限り、恐らくはトラックから既に積み込みを完了されている様子が見て

とれる。

「宜野座さん、二手に別れましょう

私は直接薬物の入った箱を抑えます

宜野座さんはトラックを調べてください」

「輸送機が飛行機やヘリだつた場合、その場で離陸する可能性も否めない、危険だ」
「その前になんとか止めてしまえばこっちのものです

……薬物が乗せられていたトラックにも何かカラクリがあるかもしれません

そのまま走り去られて証拠隠滅なんてされたら最悪ですから

……命令です、執行官」

頑固な霜月が引くわけないと半ば諦め、ため息を吐く。

「…………分かつた

でも自分の身を最優先にしろ、変な気は起こすなよ」

宜野座はそう零すとトラックのエンジン音が微かにする方面へと向かう。

霜月は発信機の元へと駆け出す。

倉庫はかなり広い、そのままどこかへ逃げられてしまえば
計画が全て無駄になる。

(絶対追い詰めてやる、トランスペアレント社……)

ドミネーターを握る手が一段と強くなる。

当たりを警戒しつつ、目的地へと向かうと

かなり大きな軍用の貨物輸送機が停められていた。

機体にはC—123Kと記されており

やたら機体の胴体が大きい型のようだつた。

「……何これ……デカすぎ……」

……えつと……入り口は……」

薬品の入った箱は既に機体の中へ。

恐らく、無人トラックに引っ付いていた積み込みドローンが
運び出したのだろう。

生きた人間の気配も、姿も、一切感じなかつた。

入れそうな入り口の扉を無理やり引くと、錆びた音を鳴らしながら開けられる。
機内は真っ暗、本当にこの機体が飛び立つかも怪しい。

すると、デバイスが鳴り宜野座からの通話を知らせる。

「宜野座さん、何か見つけましたか？」

『いいや、こちらはハズレだ

走り出そうとしていたトラックを停めたものの中は空
積み込みドローンが数体乗っているだけだ』

「……何も無しか……」

『そつちはどうだ？ 機体は？』

「かなり昔の軍用の貨物輸送機

機体の種類はC—123K

：複数の銀製の箱は見つけた、でも宜野座さんの言う通り

開く気配は無し

いくつか記録を撮つたから、これをすぐにトランスペアレント社に突きつけ…』

刹那、真っ暗だつた機内に電気が灯る。

同時に耳が壊れそうなほど大きなエンジン音が響くと、機体が動き始める。

突然のことに霜月は驚き

両手で耳を塞ぎしやがみこむ。

「…………ツ……耳が……！」

『おい！霜月！どうした……』

「…………まさか機体が……』

宣野座にも聞こえているのだろう、

機体が飛び立とうと、エンジン音を鳴らしている騒音が。

「大丈夫です……なんとか停めれば……』

揺れる機体の中、壁を伝いながらコツクピットへと向かう。古いせいか、やたら音が煩く耳を塞いでいないと

頭がかち割れそうだつた。

コツクピットの扉に向けて思いつきり体当たりするとそのまま突っ込む形でなんとか入ることに成功
もちろん人の姿はなく、自動操縦のようだつた

「…………緊急停止……』

「…………あつた、このボタン……』

透明の蓋で覆われていて、赤い緊急停止ボタンを見つけると霜月はすぐに押し込む。

しかし、止まる気配はなく

スピードが上がっていくのを体で感じていた。

「……なんで……なんで!?」

止まらない!!」

ガチャガチャと何度も押すも反応しない。

ほかのボタンを適当に押すも、それにも反応がない。

『おい……霜月!……聞こえるか!?』

「聞こえてるわよ!

クソつ……止まらない!』

『かなりスピードが出て追いつけない

……こうなつたらデコンポーザー……』

「ダメよ! そうしたら全部、証拠も消える!

私もぶつ飛ばすつもり!』

宜野座は必死に迫りかけるも、

霜月の乗っているであろう機体はすでに滑走路に向かい、スピードを上げていた。

「……こうなつたら、この機体の行く先に私も行けば……ッ

『馬鹿なことを考えるな!』

ドアでもなんでもぶち破つてすぐにそこから脱出しきる!』

ドアも全てロックがかかり出ることは出来ない。

窓も軍用、簡単に割れるはずが無い。

完全に閉じ込められた霜月は出ることを諦め、コツクピットの椅子にしがみつくように座る。

「宜野座さん、私はこのままこの薬品の行く先へ向かいます必ず、私を見つけて助けに来てくださいね

……その間に、この事件の全容を私が解明しますから」

フワツと機体が浮く

完全に離陸すれば追いかけていた宜野座もさすがに諦めると滑走路で立ち尽くす。

「霜月！・おい！」

遮断される通信

機体は空高く登つていき

暫くすると姿が見えなくなる。

すぐに宜野座は唐之杜に連絡を入れれば、

慌てた様子の相手に何があつたのかと唐之杜は焦りを見せる。

「唐之杜！不味い事になつた

…霜月が機体ごと消えた」

『ちょっと待つて…どういう事？

……本当、…美佳ちゃんの位置情報が掴めなくなつてる……』

通信外区域に入ったのか

居場所が全く掴めなくなつていた。

ドミネーターを持っているはずだが

使い物になるはずも無く、そつちの通信機能もオフラインへと切り替わる。

「箱に取り付けた発信機は？」

『そう思つて今調べたんだけど

その発信機自体も使い物にならない、通信外区域に入ったみたい』

「…常守達にも伝えてくれ

俺はすぐに公安局に戻る

どうにかあの箱の行き先を見つけるんだ

：それと、トランスペアレント社にもすぐアポを取つておいてくれ」
慌ても仕方ない

霜月は消えてしまった、あの箱と共に。

ならば早く場所を見つけるのが得策。

強硬手段だが、トランスペアレントに乗り込むのも手だつた。

『オーケー、任せて

：とにかく、早く助けないと

美佳ちゃんの身が危険よ』

最悪な結果に陥つてしまつた。

行き先も目的も何も分からぬこの状況。

宜野座は車へと乗り込みすぐさま公安局へ戻るのであつた。

・・・・・

血に塗れた要塞

・・・・・・・・・

歩き続けて数時間、辺りは真っ暗に。

真っ白な地面が月明かりに照らされてキラキラと光っていた。

「やつと……着いた……」

物々しい雰囲気を醸し出す大昔からの収容所。

それはかなり巨大で、頑丈なコンクリート製の建物。

四方八方を鉄格子で囲まれ、恐らくは電力が流れているであろう有刺鉄線が巻き付け
られていた。

監視塔らしきものや、脱走者を逃がさないようにな。

そこら中に電灯が照らされており、

侵入するのにも一苦労しそうだつた。

脱走を試みたのだろうか、

有刺鉄線の柵には死体がぶら下がつており悪臭を放つ。

舞白は木陰に身を隠し

侵入準備を始める。

できるだけ身軽に、上着やマスクを脱ぎ捨てるも不思議と寒さを感じない。

黒の無地の長袖のTシャツに、防弾ベスト、

黒の細身のパンツに軍用ブーツ、

背にはいつものスナイパーライフルにスコープ

小銃やナイフを懷に入れると、ブーツの紐を結い直す。

小さなウエストポーチには弾を

そして気休め程度に鎮痛剤の入った注射器を入れておく。

「ふうーー……」

深呼吸をすると冷気が体に一気に入り込む。

監視塔から辺りを警戒する監視員、照らされる照明。巡回している傭兵の動きのタイミングを上手く計算し、白い息を吐ききつたと同時に鉄格子に向けて駆け出す。

舞白の背丈の倍以上はある鉄格子をサクッと登り。

電流が流れる有刺鉄線を上手く交わすと、難なく侵入することに成功。すぐに建物内の木陰に身を隠せばスナイパーライフルを握り締める。

「……傭兵の数、結構いる割には警備はガバガバ雑魚は大したことなさそうね」

スコープで敵の数を確認する

同時に内部に入れそうな場所を探し始めていた。

そしてその瞬間、段々と大きく、何かがこちらに向かつている音同時に強く風が吹き荒れ上空を見上げる。

「何あれ、軍用の航空機？？」

舞白の頭上を通りすぎる巨大な軍用機。

さらに奥の敷地内へと着陸するのか

続々と傭兵達が集まり始める。

残念ながら何が輸送されたのかは見ることが出来ないが

複数の傭兵達が軍用機へと向かつたおかげで周辺の警備は皆無状態。

侵入のチャンスだと判断すると

身を隠しながら収容所へと近づく。

正面突破は現実的ではない。

他に入口がないか探ししていると、

地下へと繋がるような通気口を見つける。

それに、そこそこ大きくギリギリ人が入れそうなサイズ。

舞白は再びスナイパーライフルを背に戻せば人が戻る前に侵入することに成功した。

まずはここ のボスが誰なのか、

収容されている人々から、話をなんとか聞き出す必要もある。

そして、混乱を起こし一気に人々を逃がす。

目標は明け方までに

寒さも落ち着けば、人々は逃亡もしやすくなるだろう。

「あとは、捜さないと……」

生きているか、死んでいるか分からぬけど……」

テソンやタツカ、

そしてここに向かうきつかけとなつた友人の家族を
消息を確かめる、それが元の目的だ。

通気口を進んでいくと人の気配を感じるように。

「……ッ……何、この臭い……」

そして進むたびに濃くなる異臭。

血なのか、排泄物なのか、死臭なのか、

全てか混じったような異様な臭い。

思わず顔を顰め、手で口と鼻を覆う

紛争地でも嗅いできた臭いだが、少し違っていた。
ズリズリとほふく前進をしながら更に進むと
何やら騒ぎ声が聞こえてきた。

「お願い！やめて……ッ……やめてえええええっ!!」

女性が何かを必死に止めるようになると訴える声。

通気口からその部屋の内部が微かに見えると、格子の隙間から様子を伺う。

椅子の隙間に机を置く

上半身は身ぐるみ剥がされ剥き出しに。

周りには傭兵が4人

じゅうううううううう……と何かが熱を帯びた音が聞こえてくる。

この焼印を刻まれた者は一生ここから出られない
例え出されたとしても……この印を見る度に

自分が奴隸だと思い出させてくれるさ」

「お願ひ！お願ひ……いやつ……」

暴れる女性を抑え込む男2人

そしてその瞬間、焼印が背中に押されると鼓膜が破れそうなほど鋭い悲鳴が響き渡る

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!!」

同時に肉が焼ける音、臭い

ハツキリと顔は見えないものの

叫び声からどのような形相なのか想像がつく。

そして暫く悶える女性、

ガクツと体が動かなくなれば氣絶したようだつた。

「牢に戻して薬でも飲ませとけ、

ちようどさつき補給分が届いたからな

……ほら、次連れてこい」

引き摺られながらその女性は部屋から出ていくと、また違う人物が部屋へと入る
恐らくここはあの焼印の焼き場だろう

舞白は険しい表情を浮かべ更に通気口を進んで行く。

「…………からなら出られそう」

恐らく廊下らしき場所へ出る出口にたどり着けば
物音や人影を確認し、そつと通気口から抜け出す。

夜遅いことや地下だからなのか、関係しているのかは不明だが
そこまで人影は見らない。

当たりを警戒しつつ、時たま物陰に隠れながら

収容所内を散策して行く。

「さっきのこの臭い……、この部屋から……？」
通気口で途中に嗅いだてつもない臭い
とある部屋から臭つてくるのが分かると
そつと扉に手をかける。

銃を握り、ゆっくり扉を開けると

そこにはとんでもない光景が広がっていた。

「……ツ……酷い……これ……」

血塗れた床、ハエや蛆が目につく。

袋を被せられた人間が

無数に並んだ調理台のようなものの上に並べられていた。
部屋に傭兵が居ないと分かれば扉を閉めて

室内を探索する。

パツと袋を捲れば内臓を全て抜かれた死体、そして中には首から上が無い死体など。

「…体の部位を抜かれた死体……」

そういうえば、縫い跡があつたって……」

タツカの言葉を思い出す。

以前脱走したと思われる人物の体について、
縫い跡、そして生殖器が無くなっていたとか。
奥へ奥へと進むと袋を被つていらない人間が。

しかも、胸が動いていた、生きている人間がいる。

ゆっくりその人が乗っている台へと近づき確認すると
腹部あたりに縫い跡が、
上半身のみ裸でまだ若そうな男性だった。

「……ねえ、……ねえ？ 聞こえる……？」

……聞こえ……」

刹那、パツと目を見開き舞白の声に反応する男、
パクパクと口を動かすも思うように声が出ないのか
恐怖で体が突如震えだしていた。

「あ……つ……あう……あ！」

「大丈夫！ 落ち着いて！」

……私はアイツらの仲間じゃない……ね？

……大丈夫だから……」

ぶるぶると体を震わせる男、

舞白がギュッと手を握ると徐々に安心したのか落ち着いていく。

「……」れ、縫われた跡

何をされたの?」

「つ……臓器……取られた
さつき、こゝで……」

やけに雑な縫い跡

恐らく麻酔も何もされないまま
そのまま取られたとしか思えない、
生きているのが奇跡だつた。

「仲間が!……上に……」

アンタ、助けに来たのか!?

他に誰か!」

「落ち着いて!しーーつ……」

助けが来たと思つた男は興奮し声を荒あげる
外に聞こえるとマズいと思い、必死に落ち着かせる。

「俺の兄が……移送される、日本に

日本に移送されるつて!

お願い助けて!……父も帰つてこないんだ……

……ツ頼む！頼む!!

舞白の服の襟を掴むと必死に懇願する男。
そしてなにか気配を察知すれば、

舞白は手を振り払い男の腕を掴む。

「誰か来る……お願ひ、落ち着いて……

後で話をまた聞くから！」

すぐさま近くの棚の裏に身を隠し
入ってきた扉に目を向ける。

日本のスパイ

「煩いと思えば……」

なんだ、お前死ななかつたんだな
運が良い……」

1人の傭兵が室内にスタスターと足を踏み入れると
一直線に青年の元へと歩み寄る。

「……つ……」

酷く脅えている様子の青年。

腹部を押さえ、入ってきた男へと視線を向ける。

「言われた通りアンタらに貢献した

兄を助けてくれるんだよな？な？」

どうやら青年は

臓器と引き換えに、兄の移送を止めるという取引をしたのだろうか。位置からして恐らく腎臓を抜かれているはず。實際ひとつ抜かれたところで死ぬことは無い。

舞白は息を潜めて様子を伺う。

まだこの建物の構造も、一体傭兵が何人いるのかも不明安易に動く訳には行かなかつた。

「ああ……そうだつたなあ……」

男は不気味に笑いながら

弄ぶように青年を見下ろす。

「そうだ、良いことを思いついた

お前も兄と一緒に移送してやろう」

「本当!?

「……だつたら、俺もつ……」

青年が喜びを浮かべたのも束の間

男の持っていたナイフが青年の首に突き刺さる。

ドバつと吹き出す血液

青年は声を上げる隙もなく、ダラリと首を落とせば即死だつたようだ。

「お前の臓器と一緒に

送つてやろう、本望だろう?」

((……狂つてる……))

躊躇せず一突きで……))

その男はぐちやぐちやと音を鳴らしながら

青年の体を開いていく。

表情をひとつも変えず、無心でナイフを突き刺していく男は

まさにただのスプラッター、イカれた奴だつた。

「なーんて、お前の他の臓器なんて要らねえんだよ

腎臓だけで十分だ……

これでまた金が手に入るんだからな……」

暫く青年の体を弄んだ後、飽きた様子でナイフを床に投げ捨てると男は意味深なことを口にしていた。

”金が手に入る”

そして青年の口からは
日本に移送される、とか

花城が言つていた日本との繋がり

恐らくこの事だろうと、そして本当の話だつた。

詳しく述べ話を聞くことが出来ず、むしろ自分のせいで見殺しにしてしまつた

舞白は悔しそうに表情を歪め、息を潜め続けた。

????????????????
男が部屋を出ていくと再び部屋を捜索。

この収容所の、どんな事でもいい
何かないかひたすらに物色する。

そして目をつけたのは、室内の隅に何台も置かれている
冷凍庫のような大きな箱。

中を開けると、この古く汚れた収容所には似つかわしくない近代的な箱が所狭しと収められていた。

ステンレス、銀製、触っただけでは分からぬが
やけに手入れもされている様子で
管理されているのが分かる。

中から1つ箱を取り出せば
ロツクを解除し、蓋を開ける。

「取り出した臓器を冷凍保存、

まさかこれであの話が本当なら

……奴らは日本にこれを輸送してゐる」

中には特殊な容器に入れられた臓器。

ひとつひとつの箱にタイマーのような物も取り付けられており、
間違ひなく、ここの技術で作られたものでは無いと分かる。

そして箱の隅に小さく刻まれたマーク

どこかで目にしたことがある、と

記憶を引っ張り出し思い出そうとする。

「……確かに、トランス……ナント力製薬会社

テレビで見たこともある気がする……」

傍らには無造作に紙媒体の書類も置かれており
目を通す。

全て中国語で書かれているものだつた。

その書類にも同じマークが隅に印字されており、
関連性があるのは間違いなかつた。

「提供臓器……、必要数

……実験……？」

羅列されている単語に眉を顰める。

更に詳しく見ようとペラペラと書類を捲るも、
部屋の外がやけに騒がしくなると、
書類を元の位置に戻し、再び物陰にかくれながら
外の様子を伺う。

入口の扉に耳を当て、
何やら部屋の外で会話をしている傭兵達に耳をすませる。

「輸送機から日本人の女が現れたつて
「で？ そいつは？」

「ああ、酷く暴れたらしいが

すぐとつ捕まえて2階の牢に放り込んでる」

「何で輸送機に日本人が？」

今までこんなこと無かつただろう？」

「噂じやあ、日本のスパイだとか

日本の警察のマークが付いた服を着てるらしいぜ
とにかく拷問して吐かせるつて」

ここに侵入する前に上空を飛んでいた軍用機
あれはどうやら日本からのものらしい。

” 警察 ” “ 日本人の女 ”

飛び交う予想だにしていなかつたワード。

少なくとも、その女性がこれから危険な目に合うと分かればじつとしていられなかつた。

((……さて、2階までどうやつて行くか……))

男達が立ち去るのを確認すると、扉から顔を出しキヨロキヨロと見回す。ただでさえこの髪色のせいで嫌でも目立つてしまう。しかし、ここで立ち止まる訳にもいかないと、

舞白は部屋から飛び出せば、足早に施設を駆け巡るのであつた。

・・・・・

強情な女

「……っクソ!!

通信も何も出来ないなんて…」

離陸して数時間、

機体の中をウロウロと歩き回り、どこかで電波を拾えないか試す霜月。
しかしデバイスは全く役に立たず

使い物にならない。

どうやら、この航空機自体も遠隔操作なのか

そもそも何か組み込まれているのか、緊急停止もドアを開けることさえ
何も出来ない。

下手をして墜落させる訳にもいかず

貨物室などを捜索しながら

航空機が目的地にたどり着くのを待つしかない。

「外は真っ暗だし、今どこを飛んでるのかも分からぬ……」

行き先も目的も不明、

さすがに霜月も不安に駆られていた。

どうにか、仲間たちが行き先を突き止めて
助けに来てくれないかと、心の底から願っていた。

「手元にあるのは使えないデバイスとドミネーター……
もし行先が国外だつたら一貫の終わり……」

ドミネーターを握りじつと見つめる

通信外のエリアに行けばもちろん作動しない。

「とりあえず着陸するのを待つしかないわね

どこかで体を休めよう……」

慌てても仕方がないと冷静になれば

貨物室の物陰に座り、ゆっくり瞼を閉じる。

?????????????

「全く……美佳ちゃんつたら
また無茶して……」

霜月の腕を引くのは常守

困ったようにしやがみこむ霜月に笑みを向ける。

「……あれ…、私……」

「監視官、もう大丈夫ですよ」

続いて六合塚も現れれば

霜月の表情が明るくなつていく。

「もしかして、来てくれたんですか？」

「困った監視官だよ、あなたは

無茶ばかり

1人で突つ走つてないで俺達も頼れ」

「……宜野座さん……」

???????????

うとうと頭を揺らす。

しかし、次の瞬間一気に降下する感覚が体に襲いかかると
霜月は目を見開き慌てて立ち上がる。

「……なんて夢を見てるの私…

あの人たちが出てくるなんて……」

眉間に指で摘み顔を顰める。

何を夢見ているんだ、と自負していると
更に機体が揺れ出す。

もちろん、シートベルトも何もしていない霜月。
再びコツクピットまで向かい、座席に掴みかかると
微かに地上の様子が見える。

東京の景色とは打つて変わつて真つ暗闇。

だがよく目を凝らして見てみると、ほんのひと区画だけ
ぼんやりと灯りが見える。

「どう見ても日本じゃない……
どこよこ……」

だんだんと地上に近づく
すると徐々に全容が明らかになつていく。

かなり巨大なコンクリートの施設。

その周りを柵で囲まれ、何やら監視塔のようなものも見受けられる。

「悪趣味な建物、

まるで大昔の収容所じゃない
…文献でしか見たことないけど……」

着陸体制に入る機体。

霜月は再び貨物室に向かうと、身を隠そうと
積み重なる薬品の入った箱の裏に息を潜める。

ふわっとした浮遊感を一瞬感じると
完全に機体が着陸。

それと同時に、今までビクともしなかつた扉が自動的に開き
冷風が機内に入り込む。

ここは、雪国だろうか？

((……つ……寒い……))

上下スカートスーツのセットアップに公安局のジャケット
足元はストッキングにパンプスのみ、

さすがにこの寒さに耐えられるような服装ではない。

暫くすると、口から吐き出される息が白く染っていく。

そしてその直後、貨物室の後部の1番大きな扉が開けば
ぞろぞろと人の姿が現れる。

全員同じような身なりだつた。

厚手の防寒着を羽織り、マスクのようなものを被つてゐるため

目元しか確認はできない。

体の大きさからして全員男だろう

かなりガタイもよく、鍛えられているような印象。

そして目元の雰囲気を見る限り

アジア人である事はすぐに分かつた。

(時間が分からぬけどそんなに長くあの機体には乗つていなければ)

……この寒さ、浅黒い肌の人の姿

恐らくはアジア圏なのは間違いない)

物陰からじつと様子を伺う。

彼らは何か喋っているようだが、

聞き取れない言語に霜月は眉を顰める。

通信はできないにしても、オフラインで

翻訳機能は使えるはず、

こつそりとデバイスに触れ、翻訳機能をオンにすると

彼らの言語をこつそりと拾う。

「……中国語……

でも上手く翻訳できない、

何？この言語……」

中国語とウイグル語が飛び交っていた。

ウイグル語のみ、上手く翻訳機能が働かず

霜月も完全にお手上げだった。

「ほら！さつさと運び出せ！」

運び出したら次はこの機体にすぐに
奴らを移送しなければならんからな！」

1人の男が大声で叫び散らす。

続々と箱が運び出されていくと、

霜月も身を潜める場所をなんとか探さなければと
キヨロキヨロと辺りを見回す。

（彼らが何者か分からぬ以上、接触するのは危険
……全員武装してるし……）

本物の銃を手にしている男達。

丸腰の霜月には危険すぎる、

最悪ここに残ることも可能だが

積み下ろされていく薬品を目の前に

霜月は逃げるという選択肢は既に無かつた。

(逃がしてたまるかつての……)

隙を見てもう1つ開いている扉へ向かうと

外へ飛び出す。

上手く闇に溶け込む。

足場は悪いが、なんとか駆けることができた。

「とりあえず……」の中に入らないと

凍死……」

刹那、目の前に飛び出す人の姿。

その姿はサーチライトのようなものに照らされると同時に銃声が響き渡る。

霜月の2mほど先で

頭を撃ち抜かれた髪の長い少女が、地面の雪を真っ赤に染めあげ
倒れ込む。

「ひつ!!」

突然すぎる出来事に霜月は思わず尻もちを着く。

ジワジワと赤い血が、真っ白な雪に染み渡っていく光景。

完全にサーチライトの存在を忘れ、

霜月は倒れる少女の体に触れる。

「ちよつと！ちよつとあなた！」

死んでいるというのに無我夢中で声をかけ続ける。
ゴロンと体を仰向けにさせ顔を確認する。

恐らくは霜月と同じくらいか、もしくは若いか

美しい女性の顔が一気に青白くなつていくのだつた。

「何なの……一体……、ここは……」

霜月の背後でカチャツと銃の弾が装填される音が鳴る。

ゆっくり振り向くと5人の傭兵が銃を霜月へと向けていた。

「なんだこの女、どこから來た?」

「この辺りの人間じやない」

霜月は少女の体に手を添えたまま

男たちを睨みつける。

「…あなた達、何をしてるの!」

もちろん日本語は通じるはずもなく、

男たちは戸惑つたように、互いを見合つていた。

「日本語…………？こいつ

日本人か？」

「もしかして、あの機体に乗つっていたんじやないのか？」

ざわつく男たち

目の前で人が死んでいるというのに

まるでいつもの事のように何も反応なければ
彼らにとつては当たり前の事のようを感じていた。

「私は日本の公安局刑事課の人間よ！」

……英語も通じないの!?」

胸元から警察手帳を取り出し掲げるも

男たちは無反応、

英語で話したものとの通じていない。

「日本人の女なんてレア物だよ

さっさとボスに連れて行くぞ」

1人の男がそう呟くと

霜月の体を押さえつける男たち。

突然の事に霜月は体を捻じるも、

相手の力が強すぎて全く意味をなさなかつた。

「ちょっと！離しなさいよ!!」

バタバタと暴れ、何とか逃げようとする

落ち着かない霜月に男たちもさらに力を込める。

「あなたたちこんな事して……政府が黙つてな、」

再び鳴らされる銃声。

ツーッと霜月の左頬から生暖かい血液が垂れると
ぱたぱたと、白い雪が積もる地面に落ちていく。

「…………」

男たちを睨みつけるものの

容赦ない相手の行動に怯む霜月

「強情な女だ、こういう奴は体で分からせてやらないと」

翻訳機能で内容を少し聞き取れた霜月は

さらに相手を睨みつける。

刹那

男の蹴りが霜月の頭に命中すれば

その場にグラリと倒れると

視界が歪んでいく。

((……マズイ……))

衝撃で意識を完全に手放す。

そのまま霜月は引き摺られながら
収容所内へと運び込まれるのであつた。

・・・・・

協力関係

・・・・・

「ぐああつ!!」

地下から1階へ繋がる階段を警備していた傭兵が静かに声を上げ、その場へ倒れ込む。

首の頸部をめがけて手刀を落とし、一時的ではあるが気を失わせる。

だらりと力をなくした男を物陰に隠すと、再び当たりを警戒し血なまぐさい地下から脱出する。

1階は地下に比べると傭兵の数も多い。

しかし同時に、死角が多くなんとか避けて通れそうだった。

岩で作られた壁を伝つて天井へと移動し

上から様子を伺う。

「お願ひだあ……ここから出しててくれ！」

「子供の意識がないんです！ お願ひ！ この子を病院に！」

「……う……ああ……あうあ……」

そして1階には牢に入れられた人間たちで溢れていた

数は数百人以上だろうか？

窮屈な複数の牢に無理やり押し込められ
環境も劣悪で最悪だった。

出してくれと叫ぶ男、ぐつたりとした子供を抱き抱える母親。

口からだらりと涎を溢れさせ、焦点の合っていない青年。
死体や汚物が辺りに転がっている異常な状況。

今はまだ冬という季節だからいいものの

夏の暑い時期になればもつと酷い状況だろう。

監視役の武装した傭兵が複数人、

時たま牢に向けて発砲したり、罵声を浴びさせていた。

「この中から探し出すのはかなり困難かもね
……待つててね……」

友人の顔や、テソン達の顔を思い浮かべる
今はとにかく2階に囚われている日本人を救うのを第1優先に、
あわよくばその人物の協力を促せられれば
この施設をなんとかできるだろうと考える。
予想以上の規模に劣悪な収容所。

なかなか一筋縄ではいかなそうな状況に
舞白も久しぶりに苦戦を強いられる。

何にせよ今回はいつもと状況が違いすぎる。

下手な行動をすれば民間人が大量に命を落としかねない。

「……2階には……」

あの階段から行けそうね」

2階へと続くであろう場所を見つけると
音をさせないように、慎重に天井の柱を伝つていく。

恐らく照明が照らされている下からは天井は見えないはず。

恐る恐る進み続け、巡回している傭兵の動きのパターンの隙を見計らえれば一気に2階へと駆け上がる。

まだ舞白が目にした収容所内はほんの一部に過ぎない。

恐らくは見た場所の4、5倍の広さを持つてゐるこの収容所そんな場所から、囚われている日本人へたどり着けるのかが鬼門だつた。

卷之三

恐らくは傭兵達の居住区域になつてゐるようで

部屋をいくつか覗き込むと

眠りにつく傭兵の姿が田につく

夜が明ければさらに傭兵の数は増えるだろう。できるだけそれは避けたかった。

1部屋 1部屋 慎重に確認していき
時たま現れる傭兵を警戒しながら
順調に奥へと進んでいた。

そしてとある扉の前に

他の部屋と若干扉の形状が違い、扉の前には銃を手に持った
傭兵が1人立っていた。

(あの部屋だけ警備されてる

……明らかに怪しい……)

距離は約5m先

部屋の中に仲間がいるとすれば、騒がれると危険。
一瞬で仕留め、無人だつた近くの部屋に隠し
どうにか中へ入ろうと、

頭の中で先の動きを想像すれば早速行動に出る。

パツと死角から姿を現せば、ナイフを相手の傭兵目掛けて投げ込むと
男は突然の事に驚き怯む。

舞白は一気に間合いで駆け込み、

声をあげられる前に頸部へ力を加え気を失わせる。

焦らずゆっくりと男を引き摺り、

空き部屋へと投げ込むと、見張りの居なくなつた部屋の扉を見据える。

警備をしなければならない理由、

何かがあるはずだつた。

そつとドアノブに手をかけて
音をさせないように覗き込む。

人の気配を感じることはなく安全だと分かれば
サツと内部への侵入に成功。

扉にロックをかければ部屋を見渡す。

部屋の隅に仮設で作られたような牢。

硬い床に転ばされている人物を見つけるとゆっくりと近寄る。

「……」のマーク、日本の公安局…

お兄ちゃんが監視官の時に着てたジャケット……」

顔は見えないが、その人物が着ていたジャケットに見覚えがあつた。

宣野座も確か着ていた記憶。

ということは、公安局刑事課の監視官だと理解した。

(スカート…、女性だけど恐らく朱さんじやない

少し骨格も違うし……)

牢の鍵をナイフのハンドル部分で力技で破壊し

難なく開けることに成功。

頑丈な作りのはずなのに、甘い鍵の管理で詰めが甘いと呟く。

監視官に近づき顔を確認する。

何となく見覚えのある顔に記憶を呼び起こす。

1つまとめに髪を結つて、

…確かにシーアンで朱さんと話をしていた……

「……シモツキ……確かにそんな名前だつたような…」

うーん、と顎を指でトントントントンと叩き何とかその時の状況を思い出していた。

その瞬間、もぞもぞと霜月の体が動けば舞白は傍らにしゃがみこむ。

「……つ……痛……」

「あれ…………」……「ひつ！ 誰よあんた！」

体を起こし、目を覚ましたと思えば、

舞白の姿を目になると小さく悲鳴を上げ

体をビクつかせていた。

「私は敵じゃない、

……あなた、日本の公安局の人よね？」

そんな霜月をよそに、冷静に声をかける舞白。

霜月もやつと目が覚めてきたのか、相手の顔を目を細めながらじっと見つめる。白髪にトレードマークのホクロ。

見覚えのある顔だと思えば、パツと目を見開く。

「狡噺……舞白？」

……何でここに!?

もしかして、あんたがこの組織を……?」

「しーっ! 声が大きい!」

助けに来たんです、あなたを』

「どういうこと?」

ちよつと……説明しなさい!」

霜月の手首に巻かれていた縄を解くと
迫り来る物音に気づいた舞白は、
しゃべり続ける霜月の口を手で塞ぐ。

「……まずい、バレてる

扉を突破される前にとりあえず逃げないと』

ドンドンと扉を激しく強打する音

出れるとするならば窓しかない。、

しかし、やつと警備をかいくぐつてここまで入れた

それを無駄にはしたくなかった。

「ちょ、ちょつと！なんとかしなさいよ！」

「…………」

「ねえ！聞いてるの？狡噺舞白！」

部屋の隅に通気口を見つけると、

中を確認し、入れると分かれば蓋をこじ開ける。

そして同時に、部屋の窓を置かれていた椅子で思いつきり割ればそのまま椅子も外に放り投げる。

「まさか、窓から出るつもり？」

「そんな事しないですよ

……そんな薄着で外に出れば凍死するし

何より、また侵入する経路を探すのはゴメンだから」

窓はフェイク、

外に逃げたと思わせれば少しは時間稼ぎができるだろう。

「こっちの通気口にとりあえず入つてください

絶対どこかに繋がってる……

「わ、私が先に入るの？」

扉が割れる音が聞こえる

もう時間が無い。

「ほら！さつさと入る！」

舞白は強引に霜月の腕を引くと、通気口に入るよう促す。

仕方ないと諦めた霜月は中へと進むと、舞白も追うように通気口へ体を入れ込む。蓋を閉めたと同時に、部屋に扉が完全破壊される音が聞こえまさに危機一髪だった。

「窓が割られてる！外に傭兵達を集めろ！」

思惑通り、外に逃げたと勘違いする傭兵達

その言葉を確認すると舞白はニヤリと笑みを浮かべた。

「とりあえず何とかなりましたよ

⋮適当に進んでいつてください

様子を見て通気口から抜け出さないと

「……」

「ほら、早く前に……」

「……とりあえず礼は言つておくわ

助けてくれたことに対してね」

ぶつきらぼうに話す霜月

冷静に物事を判断し、極限状態でも落ち着いていた舞白に
どことなく悔しさを滲み出す。

「霜月監視官ですよね

シーアンで、あなたを見たのを覚えています」

「あんたはさつさと姿を消したの、忘れもしないわよ」

ほふく前進を始める霜月。

2人はなんとか敵の目を欺く事に成功し

協力関係へとなつた。

名コンビの予感

「ど、こにも見当たらないぞ、あの女……どうやつて逃げた……」

傭兵達が忙しなく辺りを捜索する。

その中でやたら身長が高く、大柄な男。

顔には大きな切り傷の痕が痛々しく残つており、

その男を傭兵達は恐れているように感じる。

男は飛び降りたであろう窓の下から部屋を見上げていた。

「…………」

あの状況で、あの女が一人で脱出など不可能。

そして地下と2階の警備を行つていた傭兵が気を失った状態で見つかっていた。

部屋に落ちていた真っ白な髪の毛。

男はタバコの煙を吐き出し眉を顰める。

「ご報告です

近隣に兵を向かわせ調査をしておりますが

未だにそれらしき人物の姿はなく……」

「お前ら、あの女が外に逃げたと思つてゐるのか？」

「へ？

……ですが、窓を突き破られて……」

刹那、男は懐から小銃を取り出すと
目の前の男の頭を躊躇なく撃ち抜く。

周りの傭兵たちがその様子を目撃すると、恐れるようにな
身を震わせていた。

「ふう――――――

タバコの吸殻を死体に落とし
足で踏み付けると、無表情で空へと目線を向ける。

「侵入者はあの白い髪の女だ、

恐らくそいつがあの女とどこかに潜んでる

……まだこの中にな」

その男は昨夜、舞白と遭遇した男だつた。

突然の奇襲に逃走したもの

舞白の姿はしつかり捉えていた。

「…いかがなさいますか、アブドル様」

身長は2mを越え、スキンヘッド姿

見た目だけで十分その男の恐ろしさが分かる。

男の名はアブドルラーマン、歳は40を越えていた。

中東では”慈悲深い神の奴隸”という意味をなす。

この収容所の最高責任者であり、恐ろしい独裁者。

目的のためなら手段を選ばず、いとも簡単に命を奪う。

そして彼もまた

大昔に迫害を受けてきた過去を持つていた。

「徹底的に中を捜索しろ、寝て いる傭兵達を叩き起こせ
見つけるまで休む間も与えん」

「は、……はつ！」

「見つけた者には褒美も与える

…金でも女でも薬でも、望むものをな」

指示を促された男はアブドルに怯えながらも敬礼をすれば
そそくさと目の前から立ち去る。

「……とつ捕まえてどうしてやろうか…

強気な女ほど弄び甲斐がある……」

不気味に笑みを浮かべると、再びタバコを吸い始める
久しぶりにワクワクと昂っていた。

・・・・・・・・・・・・・・

通気口の隙間からあたりの様子を伺う舞白と霜月。

明らかに先程より傭兵の数は増え

まるで中に入ることがバレているように感じていた。

「……さつきまで外に出払つてた奴らが

戻つてきてる……」

舞白は異変に気づくと隣の霜月に視線を移す。

「もしかして、私たちがここにいるつて……」

「多分だけどね、外に逃げず中に留まつてつて勘づいてる

……この収容所の傭兵、頭が弱そうな奴らばかりだと思つてたけど意外と頭がキレる奴がいるみたいね」

霜月は舞白の言葉に何かピンとくるものがあつたのか、

一瞬悩んだような表情を浮かべ、舞白に視線を移す。

「……このリーダーっぽい奴を見たんだけど……」

そいつがやたら他の人間とは違うつて言うか、

もし指示を出してる人物がいるとすればアイツな気がする」

「どんな奴？」

霜月は傭兵に蹴りを入れられ氣を失う寸前に、やたら大柄な男が傍で傍観していた光景を思い出す。

「暗くてハツキリは見えなかつたんだけど

とにかく巨体でスキンヘッドの男だつた

……あとは顔に大きな切り傷……」

「…………巨体で、顔に傷…………」

昨夜、やたら巨体な男がいたのを思い出した舞白。

顔をマスクで覆われていたため目元しか確認はできなかつたが

他の傭兵に護衛されながら、逃げていく姿からして

重要な人物だと予想していた。

「ていうか、あなた、何でこんな所にいるわけ?

お兄さんと一緒にやなかつたの?」

通気口から出ることがまだ難しく

2人はうつ伏せ状態で肘を立てたまま

会話を続ける。

「まあ、色々合つて単独行動する事にしたの」
「……日本以外の国なんて危険しかないのに
本当に変わり者ね」

「へへへ……」

「……何笑つてんの、しかもこの危険な状況なのに……」

宜野座さんの言う通りだわ、あなた』

宜野座、というワードを久しぶりに聞くと

舞白は若干切なそうに、哀しそうな表情を浮かべた。

「彼は元気にしてますか？」

「元気も何も、毎日煩いくらい説教してくるわよ」

霜月の言い方から、宜野座は変わつていらないんだなと安心する。

その様子を、霜月も感じ取ればため息を漏らしていた。

「……あんたの経歴、見させてもらつた

なんでエリート街道まつしぐらだつたのに日本を抜け出したの？」

教育課程考查も兄の狡噛慎也と同じく、ポイント700越えの全国1位。

現在は空白の職能適性結果も聞いた話によれば、13省庁6公司に全てA判定。そして霜月と同じく、最年少で公安局刑事課の監視官に適正が出ていた。

「頭脳も身体能力も圧倒的なのに……」

「なにか理由があるの？」

「…………うーん…………」

「最初はただ日本から出て、兄を助けたいとか兄と一緒に行動したい、なんて考えてた」

「…………ただのブラコンじやない」

霜月の発言に呑気に笑みを浮かべるもふと、真剣な顔つきになる。

「でも……世界を見て、紛争地を駆け巡つて、

言語も容姿も生きる環境も違う人々に出会つてきつと私にしか出来ない事があるつて思つたのそうすれば本当の私の姿、人生……

「この世界に生まれた意味が見つかるんじやないかなつて」

「…………」

呑氣で何を考えているのか傍から見ると分からなかつたが、真剣な目付きを見て、霜月は常守の姿を何となく重ねる。

「この収容所に来た理由もね

とあるスラム街で知り合つた女の子が理由なの
その子の家族を見つけるために、
そしてまた他の町で出会つた人々の話を聞いて
余計この場所を見離せなくなつた

……なんとかここを破壊して、奴隸のように扱われている人々を解放したいの
”つて感じかな～”と再び呑気に笑みを浮かべる舞白
宣野座が言つていた、まさに天真爛漫な姿に
そして掴みきれない、不思議な人物像

「霜月さんは日本からの輸送機に乗つてここに来たんでしょう？」

「傭兵達がそんなこと言つてた」

「まあね、調査してて色々と

それで運悪く巻き込まれてここに来たつて感じ

……ていうか、あなたここの人達が話してる言語聞き取れるの？」

「一応は……」

「……あなた、ぶつ飛んでるわよ本当に……」

計り知れない舞白の有能さに引くほど驚く霜月。

こんな奴がもし本当に自分の同期だつたらと想像すると、恐ろしくて堪らなかつた、同時に同期じやなくて良かつたと安堵する。

「そういえば、確認したくて

あの輸送機に入つているものは何だつたの？」

「あれはトランスペアレン特製薬会社からの薬品よ
残念ながら中身まで確認はできっていないんだけど」
「やっぱり、何か見たことあるマークだと思った」

「？」

あなた、どこかで見たの？」

舞白は地下にあつた大量の臓器入りのケースを思い出す

「この施設の地下に酷いスプラッター部屋があつて

その部屋に大量の臓器が入つたケースがあつたの
しかもその会社のマークの入つた箱
……あと、日本に人を移送するとか

怪しい会話も聞いたの」

舞白の言葉に目を見開く霜月。

まさに欲しかった情報を目にしていた舞白、どうにかその証拠を手にしたいと考えていた。

「やつぱりあの会社胡散臭いと思つた

……」この収容所と何らかの取引をしてるのは間違いないわね」

「恐らく、あの輸送機にその人たちを乗せて

日本にまた向かうはずなの

：霜月さん、あなたはその機体に乗つて

証拠とともに日本に戻れば良いと思う」

怪しい書類も地下にあつた。

なんとかそれを手にして持ち帰らせれば

霜月の身も安全だと舞白は言い放つ。

「……」は私が何とかするし、

恐らく外務省も何らかの力を貸して……」

「……外務省？」

「……」に来る前に日本の外務省に所属している人物に遭遇したの

狙いは恐らく霜月さんと同じだと思うけど……」

「外務省に先を越されてる……」

何故か絶望する霜月。

その様子を不思議に思うと

これ以上その事は話さない方が良さそうと判断すれば
適当に話を逸らしていく。

「とにかく、どうにか薬品やら証拠になりそうなものを探しめよう
…それで、あなたをあの機体に乗せる

収容所の解放はその後でもきっと大丈夫だから」

「あなた一人でこの規模の施設を解放しようつて
本当に考えてるの？」

「勿論」

「……………とんでもない奴ね、あなた」

舞白は不意にウエストポーチから拳銃とナイフを取り出せば
霜月に手渡す。

「これ、さすがに丸腰は危険すぎるから

使つてください」

「……リボルバー銃……サバイバルナイフ…

私扱い慣れてないんだけど……研修でしか……」

手渡したりボルバー銃は舞白が槇島を撃ち殺した時に使用したものだつた。

さすがにそれを言うと、彼女の犯罪係数が大きいに濁りそうだと思い、口にはしなかつ

た。

「それ、大事な銃なので無くさないでくださいね？」

あと、私の名前は舞白

私と同い年でしょ？ 霜月さん

あなた呼びはなんか慣れないし……」

「……こんな状況下でそんな話をする？ 普通

どうでもいいでしょそんなこと……」

振り回されっぱなしの霜月もさすがに呆れ尽くす。

そして騒がしかつた通路が静かになると

通気口の蓋に触れる舞白。

その手を不意に掴む霜月。

「…あなた」

「あなたじゃないよ、霜月美佳さん」

クスッと笑う舞白

軽々しく躊躇なく名前を呼ばれると

「ま、舞白さんにはまだ聞きたいことがあるの

…だから絶対に死ぬんじゃないわよ」

意外な言葉に舞白は笑みを向け続ける。

生意気で強がりな霜月とここまで短時間で語り尽くし
距離が縮まつたとお互い感じていた。

やけにウマが合う、一緒にいて信頼できる存在だった。

「大丈夫、私強いから」

勢いよく通気口から飛び出し

霜月の腕を引っ張れば2人は目を見合う

そして入り組んだ収容所内を2人は駆け巡る

4章

涙に隠れた真実

「公安局刑事課　監視官の常守朱です」

険しい顔つきの常守。

その背後には、宜野座、須郷、六合塚、雛河の姿
ドローンにより規制線が敷かれ、

現場は物々しい雰囲気を醸し出していた。

霜月が機体と共に消えてから約12時間後。
ようやく強行捜査の許可が局長から降り、
ransparentト製薬会社の入口にて
令状をとある人物に突き出す。

「そのような話は聞いておりませんが？」

わなわなど怒りと焦りの感情が入り交じった表情を浮かべるのは、一宮祥太郎。常守は再び男に令状を突きつける。

「捜査協力には令状を」

そう仰いましたよね、一宮さん

……この製薬会社の管理を任せられているあなたに捜査協力を願います」

「……ツ……く……」

「刑事課の監視官の1人が

あなたの方の薬品と共に姿を消したんです

…それも軍用の貨物機で……

さすがに強行捜査は拒否できませんよ」

まだ陽も昇っていない早朝。

一宮は連絡を受けてかなり慌てて出社をしたのだろう。

同時に、なにかバレたらまずいものもあるのか

やたら汗を額から流していた。

そして彼の胸元の、名札の色相が濁っていく。

この男は明らかに何かを隠していた。

「六合塚さんと雛河君は薬品の管理室、及び

製造工場内の薬品のチェックからお願ひします」

「了解です」

2人はドローンを連れ、早速中へと向かう。

「宜野座さんと須郷さんは私と共に

⋮物流倉庫へ」

「了解です、監視官」

「例の秘密の部屋だな」

宜野座は怯える一宮の腕を引き、無理やり歩かせる

4人は物流倉庫へと向かう。

????????????????
ランスペアレント本社 薬品製造制御室

早朝ということもあり、まだ人の姿はなく

薬品を製造する機械だけが稼働していた。

「……やつぱり、ここには何も怪しいものはないわね」「混ぜられてる薬品も怪しいものはありません至つて普通の成分配合値……」

六合塚と雛河があらゆるデータを見るも一切何も見つからなかつた。

そして2人が別の部屋に行こうと部屋を出た瞬間思いがけない人物が、廊下で2人を待ち伏せしていた。

「あなた……舟橋明美さん……」

広報の最高責任者の姿がなぜかそこにあつた。なにか思い詰めたような表情で胸に手を当て2人を見据える。

「……何で……あなたが、こんな時間にこの場所に……？」

雛河が様子がおかしい彼女を心配しつつ問い合わせる。

「あの日……

……私、クビになつたんです……」

「どういうこと……」

どこか寒れた彼女はあの日起こつたことを語り始めた

?????????????

常守達が捜査協力にと訪れた日

一宮が物流倉庫で席を離した際に

4人を自由に行動させたことを酷く咎められていた。

「何故だ！あの物流倉庫で

公安局の連中を自由に行動させるなど！」

酷く激昂する一宮に

舟橋は恐怖を感じるほどだった。

「別に物流倉庫は衛生面でも何も問題ないですし

捜査協力となればこちらも誠意のある対応をするのが当たり前かと……」

舟橋は時間に制限をかけたもの

厚意で4人に捜査を許した。

捜査協力ならばそれくらい当たり前だと

当然のこととしたと言い放つ。

「……これだから、見た目だけで”最高責任者”などと名を与えた女は……」

「それは関係ないじゃないですか！」

「そういえば、あんたには

ユーストレス欠乏症を患つた父親がいるんだよな？」

「……いきなりなんですか？それも関係ないですよね？」

一宮は不気味に笑みを浮かべれば

舟橋を壁に追いやり顔の真横の壁を殴る。

「舟橋明美、お前の父親はかつて薬品開発部の研究員

：そして、とある薬物実験を境に犯罪係数上昇

過剰なストレスケアの結果、今は会社が管理を置いている大学病院に世話をになつて

る、そだらう？」

「……だつたら何なんですか……」

ニタツと笑みを零せば

整つた顔をした一宮の表情が、より一層氣味悪く歪む。

「俺は気に入らない奴は全員棄てる

…さて、お前の父親の命とお前的人生、

どちらを棄てる?」

「待つてください、そんなのおかしい……」

「俺が病院の関係者に一言言えば

お前の父親の命なんて簡単にどうにでもなる

……俺の前から消えるか、選べ』

舟橋の怖がる表情を弄ぶように

厭らしく頬を撫でる一宮。

彼女はもちろん、父親の命を選んだ。

???????????

「……私はあれから色相も濁つて

サプリメントも何も効かないまま、

あと少しすれば矯正施設に入れられるのも時間の問題です」

そして何とか会社に、一宮に仕返しをしてやろうと思いつたまたま今日この時間に会社に侵入したと言う。

偶然、警察車両が現れ、

それに乗じて行動しようと決めたらしい。

「……辛いことを話させて悪かったわ」

六合塚は優しく声をかけ背中を撫でる

「あの物流倉庫、地下に施設があることは気づいてるんですよね？」

舟橋は2人に視線を向ける。

2人はこくりと頷き、舟橋の返答を待つ。

「……私が広報の責任者に任命された時

一宮に言われたんです

物流倉庫の一角には関係者しか入れない

秘密の地下施設があると」

任命の祝いにと飲みに行つた帰りに

気が昂つた一宮はこう話していた。

「違法薬物の製造、実験、確かにそう言つたんです

⋮最初は嘘だと思いました

そして話した本人も私に暴露したことは覚えていない様子で……」

舟橋はデバイスを操作すると六合塚と雛河にとあるデータを送信する

それには

違法薬物の情報と他にも様々なデータが入つていた。

「……見つけたデータです

あくまでも実物がないので私にはどうもできません

でも皆さんならこの会社の隠している事実を暴いてくださると信じています

雛河がデータを見ていくと

あの赤い薬の写真が目に入る。

やはり、あの赤い薬はこの会社で製造されていた。

「六合塚さん……これつ……」

「やつぱり、あの薬はこの会社で……」

2人はデバイスを閉じると舟橋に頭を下げる。

「情報、ありがとうございます」

……あとは私たちが何とかしますから

あなたはここから逃げた方がいい

後々データを盗んだ罪で咎められる前にね」

舟橋は窓を開け笑顔を向け首を振る。

「いいんです

……そもそもあの日に、私が皆さんに話せばよかつた
だからこんな大事に……」

「……自分を責めないで

あなたは権力に屈さずこうやつて行動に移した

それは称えるべきことよ」

舟橋はその場で涙を流す。

まだ若い女性が大企業の権力に圧され
人生をも壊されかけていた。

六合塚と雛河は彼女を会社から逃がせば
データを引き抜いた痕跡もすべて消去した。

「……」それで彼女が咎められる事は無いはずよ」

「いいんですか……こんなことして」
「いいのよ、

…それに彼女は私たちに大きな情報を渡してくれた
そのお礼よ、雛河」

そして六合塚は常守達に連絡を入れ
合流すると伝え、物流倉庫へと向かうのであつた。

・・・・・

残酷な恩恵

・・・・・

物流倉庫

霜月と六合塚が見つけた地下へと繋がる扉

壁のタッチパネルには”LOCK”の文字が。

常守は、宜野座の隣でバツが悪そうに俯く一宮に目を向ける。

「一宮さん、この扉の向こうには何があるのでしようか？」

渡されていたマップには存在しない扉なのですが」

「……し、知らない」

目を合わせず、ひたすらに知らないと言い張る一宮

常守は男に近寄ると眉を顰める。

「一宮さん、正直に答えてください

……これは強制捜査、もし嘘をついたり非協力的なのであれば

「私たちあなたを即逮捕しなければなりません」

「だから……私は……」

「これ以上、自分自身の色相を濁らせるつもりですか？」

あなたは、そこまでして何を守つてているのですか？

……あなたは何かを隠し、そして何かを庇つている……」

ハツとした表情を常守に向ける一宮。

ただの”責任者”が1人で何かを隠しているとは思えない。

恐らく上層部の誰かに圧を掛けられているのは間違いない。

「……地下に、何があるんですか

一宮さん

一宮の色相がどんどん濁つていく

その様子を見るのも常守は内心辛く感じていた。

「一宮さん、お願ひ……答えてください

……それ以上濁つてしまえば

あなたを執行しなければならなくなります」

ゆっくりドミネーターを一宮に向ける常守。

こんな脅迫めいた事は行いたくないが仕方がない。

『犯罪係数 93 執行対象ではありません

トリガーをロツクします』

一気に70以上もはね上がる犯罪係数、
100を越えるのも時間の問題だつた。

「国民に安全な薬を届ける

あなたが言つていた言葉です

……本当に心の底から思つてのことならば

……協力してください』

グツと唇を噛み締める一宮

そしてようやく口を開く。

「……国民に良い薬を、充実した人生を

快適な生活を提供する為にも

より良い薬の開発が必要なんだ

……メンタルケアのサプリメントも我が社の物が1番だと

国民から賞賛を受けている」

一宮はゆっくり歩き出し

扉へと近づいていく。

「だがそれを作るためには犠牲も必要だつた

……マウスの実験にも限度がある

そして動物愛護の観点からむやみに動物も使えない

……じやあどうやつて更に高度な薬を開発すればいいと思う？」

一宮は指紋や眼球認証を行うために

タツチパネルに触れる。

そして次々と放たれる言葉に、

3人は徐々に悲痛な表情に歪ませていく。

「…………まさか…………」

常守が言葉を詰まらせる。

ロツクが解除され開く扉の先は

地下へと繋がる階段。

そして同時に六合塚と雛河が息を切らしながら現れると

3人に合流する。

一宮は、5人に振り返れば薄く笑みを零す。

「本物の生きた人間の人体実験だ」

常守はグツとドミネーターを握りしめる力を強め

一宮を睨みつける。

「……なんて事を……」

一宮の色相が更に濁れば、犯罪係数はオーバー100を越えていた。

「何を言つているんだね？」

君たちが……この国の人々が健康に暮らしているのは薬品のお陰だ
風邪や伝染病、そしてメンタルケア……
その実験があつたからこそ受けられている恩恵だよ？」

「……ツ……」

一宮は階段を降りていく。

「もうここまでバレてしまえば仕方がない
……全容を見せてあげよう」

258 残酷な恩恵

わなわなと震える常守の肩を、そつと触れる宜野座。

「……常守、大丈夫か」

恐らくこの先はとてつもない光景が広がっているだろう
宜野座は常守の身を案じていた。

「問題ありません

…とにかく、眞実を見なければ

そして霜月監視官の行方を早く見つけないと……」

常守は一宮の後をついていく。

やけに長い階段の先は、さらに警備が張られた扉。

そしてその先に足を踏み入れた5人は

予想以上に残酷な光景を目の当たりにした。

・ · · · · · · ·

無茶苦茶な奴

・・・・・・・・

何とか傭兵たちの目を掻い潜り1階へと降りると、

舞白は天井の岩の柱へ、得意の身体能力でいとも簡単に登つていく。

「ちよつと……正氣!?

さすがに数mもの天井を簡単に登ることなど安易ではなく

霜月はその場でたじろいでいた。

「そこの木箱、多分頑丈だから大丈夫

それに登つて思いつきりジャンプして?」

「ジャンプつて……届かなかつたらそのまま落ちちゃうじゃない!」

「私がキヤツチするから、それでそのまま引き上げる

天井の柱は岩で作られてるし壊れないわよ」

「心配してるのはそこじゃなくて！」

私がそんな事……」

コソコソと2人が言い合つていると

傭兵の姿が、

このままだと、まだ下に残つている霜月が危険だつた。

「いいから！早く！」

その前に傭兵に捕まるわよ！』

「あーーーーーーーーもう！」

不安定な木箱に足をかけていく霜月

かなり高い位置まで登ると

天井の柱に両脚をかけてぶら下がる舞白に視線を向ける。

「大丈夫だから、掴んだらすぐに引き上げる」

「……信じるわよ、狡噺舞白……」

「ツ！」
霜月は勇気を振り絞つて思いつきり木箱から飛び立つ。

ギュッと目を閉じ手を目いっぱい伸ばすと

発言通り、舞白が両手を掴むと一気に引き上げる。

「……ツ……早く……そつちの柱に……」

向かいの柱に霜月が無事しがみつけば

舞白は体を戻し額を流れる汗を拭う。

同時に、数人の傭兵が先程まで霜月が居た木箱の真横に現れると
2人は安堵のため息を漏らす。

「私たちの下に照明があるから

下からは見えないはずよ、

……このまま向こうまで進んだら地下入口があるから……」

「これを伝つて向こうまで行くの？」

「それしか方法はない

…下、見てみなさいよ」

霜月は下の光景を目にする
ゾツと身を震わせた。

無数の牢屋、無数の奴隸達

そもそもここから落下すれば即死だろう。

「あの人たちって……あいつらが言つてた奴隸？」

「そう、この中から日本に移送されたり、内臓引き抜かれたり
あとは傭兵に弄ばれるか……」

「……酷すぎる、こんなの……」

下の光景を見ながら2人は恐る恐る進んでいく。

特に霜月は見慣れない異様な、残酷な光景に表情を歪め続けていた。

「…………」は確かに群を抜いて酷すぎるけど

だいたい紛争地なんてこんな感じ

私も何度か同じように危険な目には合つてきたけど

日本が異常なのよ、あんな平和な場所、日本以外にどこにも無い』

「…………」

想像を絶する状況に霜月は言葉を止める。

淡々と慣れたように話す舞白、

彼女がここまで強い理由が分かつてきた。

法と秩序に守られた日本で過ごしていた霜月と

法も秩序も存在しない世界で戦ってきた舞白。

きつと霜月が想像できないような環境で、何年も過ごしてきたのだと考へると少しだけ舞白を見る目が変わっていく。

「私が地下の様子を先に見てくる、

大丈夫だつたら合図を出すから飛び降りて」

「無茶苦茶よ……本当に、簡単に言うわよね」

「勿論受け止めるから

⋮もし危険だと分かつたらそこから動かないで」

先程とは違う地下への入口。

タイミングなのか運なのか分からないが、見張りの傭兵は居らず

舞白は一気に飛び降り、受身をとつて無事に着地。

霜月はその光景を目にするとボソッと呟く。

「⋮どんな身体能力してんのよ」

警戒しつつ地下へ向かう舞白。

そして暫くすると戻つてくれば、

霜月に向かつて手招きをする。

” ジヤ・ン・ブ ”

確かに口でそう言う舞白。

背負っていたスナイパー・ライフルを傍らに置き、両手を広げるとここにジャンプしようと無茶を指示する。

相変わらずの無茶苦茶な行動だが

もう泣きごとは言つていられないと腹を括る霜月。

「行くわよ……」

ゴクッと息をのみ飛び降り

慣れない浮遊感に叫びたい気持ちを抑える。

「ツ……と……

ナイスキヤッチ！」

体全体でなんとか受け止めると

ニコニコと笑みを浮かべる舞白。

舞白が仰向けの状態でその上に体を預ける霜月。

目の前に舞白の顔、

狡噺慎也にもちらん少しは似ているものの

どこか目元などは六合塚を思わせるような矯正された顔に
霜月は思わず慌てて体を離す。

「ツ！」

「痛！ちよつと、ゆっくり離れてよ」「う、煩いわね！」

とりあえず助かつたわ、ありがとう」

両手を組み、フンつと顔を逸らす。

その姿にクスクスと笑みを浮かべ、服についた埃を振り払う。

「どういたしまして

……ゆっくりしたいけど早く先へ進もう」

傍らに置いていたスナイパーライフルを再び背負うと地下へと進む。

霜月もしつかりとリボルバー銃を握りしめ、後を追う。

それぞれの目的のために

先程と違う入口から地下へ侵入した為、再びうろうろと部屋を潰していく2人。霜月は地下の酷い状況に顔を歪めるも必死に舞白について行く。

「…酷い臭い…頭がおかしくなりそう

…色相が…」

一体、自分の色相がどれほど濁っているのか不安で仕方がなかつた。

ポケットからいつものサプリメントを取り出すとラムネ菓子のように口の中で砕き始める。

「大丈夫?」

「…なんとかね…」

よく平氣でいられるわね、この臭い、

それにあんな死体見たあと……」

いくつも存在していた通称スプラッター部屋。

霜月の身を案じ部屋に入るのを止めたが、

なんとか霜月も証拠を探そうと、無理をしてその光景を見てきた。

「最初に私がたまたま見つけた部屋に

証拠が沢山あつたの

……なかなか見つからぬ……凄く入り組んでるし……」

「風漬して行くしかないみたいね」

氣味が悪いほど静まり返った地下。

それに違和感を感じた霜月は前を歩く舞白の腕を掴み呼び止める。

「ねえ……何かおかしいと思わない？」

突然掴まれた事に驚くと

後ろを振り向く。

「何が？」

「……あまりにも傭兵がいなさすぎる」

「私たちが1階、2階にいると思つて

そつちに重きを置いてるんじゃないの？」

「…………」

神妙な面持ちの霜月を不思議そうに見据える。

「あいつらがもしこの地下に何かを隠してるとして
日本人の公安の人間が向かう先を予想するなら
きっとこの地下のはずでしよう？」

……私の事を日本の警察とか、スパイとか
それっぽいことを言つてた気がする」

デバイスの翻訳で拾つた単語。

霜月の事を間違いなく日本のスペイだと、

だとしたらこの施設が隠していることを暴こうとしている、どう考へてもそう思われ
てもおかしくない。

「だつたら、さつさと何か見つけて

ここから脱出しよう、霜月さん」

「…………」

霜月は嫌な予感しか感じていなかつた。

しかし、ここで引き下がる訳にもいかないと再び歩みを進める。

?????????????????

「……見つけた」

とある部屋の扉を開けると

ビニールカーテンが目の前に吊るされ、他の部屋とは圧倒的に違う雰囲気だった。
中に誰もいないことを確認し、2人はそつと室内に侵入する。

「トランスペアレント製薬の箱⋮

これよ、私と一緒に運ばれてきた物は

「普通のダンボールとかじやないのね、ステンレス⋮

にしては硬くて頑丈そう……」

霜月はそつと蓋に手を伸ばしロックが解除されているのを確認する。

目的の場所に運び込まれた時のミロック解除されるという特別な仕様。
「開けるわよ……」

蓋が開けられると中には雑に詰められた薬品
そしてその色に、霜月は目を見開く。

「真っ赤な薬……これだわ

……この薬が大量に密入国者の傍らに置かれていた』
包装されていない薬品。

やはりあの薬はトランスペアレント社のものだつた。
この箱に入れられていたのは間違いない。

「こつちの箱にも大量に入つてる！

……普通の白い錠剤……」

舞白はペロッとその錠剤を舐めると
微かに刺激を感じ眉を顰める。

「なにやつてんの！ 何の薬か分からぬのに……」

「多分これ、違法薬物よ

覚せい剤みたいな成分が入つてるとと思う

：一緒に入れられてる注射器に液体……」

いくつも積み上げられている箱の中身は

全てが違法薬物だつた。

そして、部屋の傍らに置かれた机には複数の書類。

舞白はその書類に目を通し、霜月に一枚の紙を手渡した。

「トランスペアレント社がこの組織に宛てた手紙、

必要臓器、人間の数、

そしてそれと引替えに大量の違法薬物、大金、燃料

「これだけの情報があれば十分だわ

デバイスで写真も残せたし、これを突き出せば……」

その瞬間、室内の電気が落とされ真っ暗闇に。

同時に、室内に何者かが侵入する気配を感じれば舞白はすぐ様
霜月の腕を引き、部屋の奥へと隠れる。

やはり、霜月の読み通り罠だつた

恐らく、ここにたどり着くと予想していたのだろう。

背中のスナイパーライフルを手に取り厳戒態勢に入る。

「なんなのよ！あとは輸送機に乗り込むだけなのに……」

霜月も銃を握りしめると

舞白の背の後ろで悔しそうに顔を歪める。

「霜月さんの読み通りだつたわね」

「ほら、言わんこつちやない……」

足音や物音を聞く限り、

かなりの人数が室内に侵入しているのが分かる。

そして全員が銃を手にしていた。

「私が奴らを引きつける、霜月さんはなりふり構わず外に逃げて

……だいたいこの地下の造りは分かつたでしょ？」

この部屋を出て左方向に地上へ繋がる通気口があるはず
そこにすぐに逃げて」

「この状況を一人で乗り切るつもり！」

「……自分の目的を見失わないで

その証拠を手にして、日本戻るのが目的でしょ？

私の目的はこここの壊滅、たつた今その引き金が引かれた

ただそれだけの事』

舞白は防弾ベストの胸ポケットから閃光手榴弾を取り出す
そして留め具を口で引き抜き、霜月へ振り向く。

「走つて!!」

閃光手榴弾を投げると激しい光が室内を照らす。

傭兵達はその光に怯むと、霜月は一気に走り出す。

「絶対に振り向かないで! 止まつたらダメだからね!」

「……ツ……煩いわね、分かつてるわよ!」

舞白が上手く引き付けている間に、なんとか傭兵を搔き分けながら走り抜ける霜月。

「ほらほら!

あんなに弱い人間たちの前では威張つてるくせに……ツ

武器がなければ所詮何も出来ないのよ、あんた達は!』

次々と傭兵達をねじ伏せていく。

暗闇にまだ目が慣れず、どれだけの傭兵が居るのか確認しきれないが
手当り次第邪魔をする傭兵に掴みかかる。

「ツ！ ハアツ！」

傭兵の1人の頭を回し蹴りで思いつきり部屋の壁へと吹っ飛ばす。
しかし、その瞬間
気配を感じなかつた背後から強い衝撃が
舞白の体を襲う。

それぞれの目的（2）

（しまつた…！）

背中に強い衝撃が走ると同時に
体が前方に思いつきり吹っ飛ぶ。

体勢を戻す前に、傭兵達に体を取り押さえられれば
壁に押さえつけられ身動きが取れない。

「ん…ぐつ…」

強い衝撃を受け、タイミングが悪くいつもの頭痛に襲われてしまう。

舞白を背後を取り、蹴り飛ばした男が
目の前に現れる。

大柄でスキンヘッド
顔に刻まれた傷：

「また会つたな、銀髪の女」

聞き覚えのある声

やはり、昨夜の男に違ひなかつた。

「……あんたが……このボス？」

男、アブドルは口元を緩ませ

舞白の目の前へしゃがみ込む。

サラサラと白い髪の毛に触れば

グツと掴みかかり、強引に持ち上げる。

「……ツ……」

「昨夜はやつてくれたな、お嬢さん

おかげでおもちや達が逃げてしまつたよ」

「……下衆野郎……」

あの人たちはおもちやじやない、人間よ

あんたと同じ血が通つた人間：」

舞白は怯むことなく相手を睨みつける

それを面白がるように、アブドルは更に掴んだ髪の毛に力を入れる。

「同じ人間？笑わせるな

…俺たちはアイツらとは違う、弱い奴らは奴隸になる運命なんだ」

「…………ふふふ

「何がおかしい？」

まるで狼のような鋭い目付きを向けたまま

口角を緩める。

「あなただつて、元々は迫害を受けてきたんでしよう？

薬、金…、くだらない権力を手にして

ただそれの真似事を繰り返してたんだけ…

真つ本当に生きている人間の方が強いわよ、あんた達は群れを生して偽りの強さを見せているだけ、

…本当に弱いのはあんた達よ！」

その瞬間、体を思いつきり捩らせアブドルの顔面目掛けて蹴りを入れる

突然のことにはやく相手は、舞白の髪の毛から手を離す。

体を押さえつけていた傭兵を、いとも簡単に振り払えば

小銃を懐から取り出す。

(…もう少し、引っ張るのよ

そうすれば霜月さんは無事逃げられるはず…)

その場から逃げることも出来るが

あくまでも今は時間稼ぎに徹する。

しかし、その考えが舞白を窮地に陥れることに。

まだ若干視界が歪みふらつとよろけてしまう

その隙を取られ、アブドルの容赦ない攻撃に襲われてしまう。
圧倒的体格差、体術のレベルの差はないにしても

明らかに今の状態は不利だった。

「…くだらない権力…？」

弱いのは俺達だつて？」

怒りに満ちた男の表情は恐ろしいものだつた。

ほかの傭兵たちも近づかず、ただ2人を傍観しているだけ。

(視界が…ばやけて…)

何やらふらふらとする舞白の隙を見つければ、
男の強烈な拳が舞白の腹部に命中する。

その衝撃で部屋の扉を突き破る舞白の体。

廊下の岩壁に頭を強打すると、頭上から赤い鮮血が滴り落ちる。

「ゲホツゲホツ：

…ますい…」

破壊された扉から現れるアブドル、

手から離れた銃は遠くへと転がつていた。

—よくこの俺をここまで追い詰めたな女…

傷をつけられたのは何年ぶりだろうな」
舞白が振るつたナイフが首に傷を負わせていた
しかし浅く、致命傷にはなつていな

((……))つちはマズイけど

霜月さんは：バレずに逃げれたみたい、よかつた……）ホッと安堵したのもつかの間、

男の大きな手が舞白の首を掴めば力を込める。

「んぐつ……」

細い首を簡単にひと捻りにできるであろう手の大きさに力メリメリと指が喰い込んでいく。

「あの日本人の女を逃がしたのはお前だな？」

「どこへ逃がした？ 目的は？」

「……い……わな……い……」

更に力が込められる。

徐々に視界が白く曇り、耳も遠くなつていく感覚

ああ、このままだと死ぬ……

意識を手放そうとした瞬間、

銃声が響くと男の手から開放される舞白。

そのまま床に倒れ込むと、銃口を向ける人影が微かに視界に映る。

「…しも…つき…」

逃げたはずの霜月が舞白のリボルバー銃を構え、アブドルや傭兵達を睨みつける。

そしてその手は微かに震え、余裕は無い様子だった。

（（なんで戻つて来たの：：）

ぐつたりと体を投げ出したままの舞白。

残念ながら体を動かす力が戻らず、ただ見据えることしか出来なかつた。

「……ツ…その子を離して…」

霜月の日本語は通じるはずもなく

アブドル達は小馬鹿にするように笑い出す。

「日本人のお嬢さん、そんなものを手にして
何をする気だい？」

傭兵達が霜月に近寄つていく。

舞白は他の傭兵達に身柄を拘束され
どこかへと連れていかれてしまう。

「私は日本の公安局の人間よ！」

：大人しくした方が身のため：！」

霜月も男たちにねじ伏せられれば
手に再び縄をかけられる。

「コイツらを“あの部屋”に連れていく
目的を吐かせるまで容赦なく拷問だ」

アブドルが指示を出すと

霜月も運ばれていく。

「ちよつと！離しなさいよ！

…このつ…」

暴れ続ける霜月に

アブドルが容赦なくナイフを向ける。

その刃先が霜月の首に突きつけられると

微かに刃が皮膚を抉る。

初めての鋭い傷みに霜月の表情が恐怖で曇っていく。

「…殺すぞ、女」

殺氣の目を向けられ、さすがの霜月も口を閉じる。

頼みの綱の舞白も戦闘不能、
この状況に絶望する霜月だった。

・・・・・

聞きたかつたこと

・・・・・

岩の壁に囲まれた他の部屋とは雰囲気が全く違う空間。
部屋には暖炉が置かれており

冷え込む地下も、この部屋だけは異様に暖かい。

鉄製の頑丈そうな椅子に座らされている

霜月と舞白。

2人は手足を椅子に縛られた状態だった。

部屋の外には警備をする傭兵の姿。

先程までアブドルを含めた複数の傭兵の姿があつたが、2人を拘束し終えると部屋から出ていき、室内には2人のみだつた。

地下ということもあり今が朝なのか昼なのか夜なのか…

時間もわからなければ、ここに来てどれくらい経っているのかも互い分からず、ただ
ただ何も無い時間が過ぎて行く。

隣で意識を失っている舞白に、何度も声をかける霜月。

「ねえ！起きなさいよ！」

「……」

「狡噺舞白！」

「……う…」

「一体どれだけ声をかけたか覚えていないが

霜月は息を切らすほど必死に声をかけ続けていた。

そしてやつと舞白は瞼を持ち上げると

ゆっくりと体を起こす。

「……」

「霜月…」

虚ろな瞳で不意に隣の霜月に目を向ける

その瞬間、一気に目を覚ましたかのように目を見開けば

霜月に喰いかかるように声を上げる。

「何で逃げなかつたの!?」

「あさまいいけば、間違いなくあんたは逃げられてたのに！」

「何よそれ！あんたが死にかけてたから助けたんじゃないのよ！」

「振り返るなつて、言つたでしょ？」

それに奴らは情報を引き出してから殺すはず

あまま殺されること無かつた

「…そんな事出来るわけない！」

あんな大男に掴み掛かられて：死にそうになつてるのに

放つておける分けないでしょ、バカなの？」

言い合う2人

しかし現実問題そんな事を言い合つても仕方がない
実際、今のこの状況はかなり危険だった。

「……めん、助けてくれたのに

ついカツとなつて…」

冷静さを取り戻し舞白は霜月に謝る。

彼女は身を呈して舞白を救おうと動いてくれた
その気持ちを無下にはできなかつた。

「分かればいいのよ、つたく…」

振り回されっぱなしよ…」

はあ、と盛大にため息を漏らせば

霜月は状況を説明する。

「小一時間前まであいつらがこの部屋にいたの
：何を話してゐるのかわからなかつたんだけど、あのデカい男が男たちに指示を出して
た」

舞白はその話を聞き部屋の内部を観察する。

よく見たらこの部屋、見たことがあると思えば

最初にこの収容所に侵入した時に

通気口から覗いた部屋に違いないと気づく。

目の前の暖炉、そこから伸びる鉄製の焼き^ゴての様なものを見つける。

ここは確か、女性が焼印を入れられていた場所。

そして何やら拷問器具のようなものが置かれている台を見つければ、眉を顰める。

「あいつら、たぶん私たちを拷問する気よ

…とくに霜月さん…、あなたは日本のスパイだとか言われてる」

〔拷問…〕

拷問器具を目になると霜月は身震いする。

そんな残酷なこと、映画や小説の世界でしか知らなかつた。

「銃も奪われてる

椅子も鉄製、安易に壊せれないし

出入口は1箇所のみ」

部屋の隅に舞白の着ていた防弾ベストに銃、ウエストポーチなどが投げられていた。霜月に渡していたリボルバー銃も同じ場所に置かれていた。

しかし舞白は渡していたナイフがその場所に無いことに気づく不意に霜月のジャケットに目を移し頭の中であることを考えていた。

「縄もかなり固結びされてて解くことはできない
参つたわね

：狡噺舞白、あなたはこういう状況慣れてるでしょ？
何かないの？」

「そりや全く私たちに勝算が無いわけじゃないけど

もう下手に動けない

：奴らはそれでも人を殺すことに対する躊躇することも無い

案外簡単に殺されるかもしないし」

手を動かしてみるも繩とは思えないほど固く結ばれておりビクともしない久しぶりに舞白も焦りを浮かべていた

「先ず、あいつらの動きを見るしかない

高リスクだけど、今どうしようもないのは事実だからね」

舞白は首を天井に向けゆつくり深呼吸する。

相変わらず呑気そうな舞白の姿に、

霜月は若干不安を浮かべていた。

「そういうえば、まだ私に聞きたいことがあつたとか言つてたよね？」

話してよ

「はあ？あんた本当にイカレてんの？

この状況分かつてる？」

「あんたでもないし、狡噺舞白つてなんかよそよそしいから普通に名前呼んでよ？さん付けも嫌だなー」

恐怖に怯える霜月を、少しばかりラックスさせようとまたまた呑気な話を口にする。強がる姿の裏には恐らくとてつもない恐怖心。

霜月のちよつとした動きや表情、発言

全てを観察し、分析する。

「…せつかくなんだから話そうよ？」

霜月美佳ちゃん？」

「…本当に…変なやつ…」

この異常な状況下でも笑顔を向ける舞白に
何故か少しずつ安心感を覚えると震えもなくなつていく。
霜月は椅子にもたれ掛かり固まつた肩を軽く回し
真つ直ぐ正面を見据える。

「…あんたは…、

…舞白は…、宜野座執行官とどういう関係なの？」
予想外すぎる質問に目を丸くする舞白。

「え？聞きたかつた事つてそんな事なの？」

「何よ？そんなに変？」

ニヤツと笑みを浮かべる舞白に対して

霜月は至つて真剣そだつた。

「ただのお兄さんみたいな存在」

”妹のような存在”

それぞれがつまらない、本音じやない同様の発言をしていると分かれば
つまらなさそうにため息を漏らす霜月。

「…宜野座さん、あなたの事

絶対好きでしょ、間違いない

「さすがにそんな事ないでしょ」

私が失踪してもう6年、ナイナイ」

「舞白、あんたも好きなんでしょ？」

宜野座さんの名前を出した時の顔を見れば1発で分かるのよ」
まるでプロファイリングもどきの発言。

ズバツと言われてしまえば舞白も笑うしかない。

「まさかこんな所で恋愛話なんて、人生何があるか分からぬね」
「で？どうなの？」

「話そらさなくていいから答えなさいよ」

問い合わせるように言われると

舞白も仕方ないな、と思うと口を開く。

「大好きな人だよ」

そう言つた舞白の顔は今まで見た事がない表情だつた。

普通の女の子、穏やかな笑み

この人もこんな顔をするんだ、と内心思つていた。

「口煩くて、最初は嫌いだつたけど

どんな時も味方でいてくれて、何より人を大切にする姿勢がすごく良いなつて」

「口煩いのは万国共通なのね」

ふふふつと笑みを浮かべる霜月。

笑顔を取り戻したと思えば、自然と舞白にも笑みがこぼれる。

「願わくば、また会いたい

無理だろうけどね」

天井に目を向ける舞白。

最後にあつたのはあのシーアンの時

あれから2年、連絡手段も勿論ない為什麼しようもない。

「…おつかないヤバい子だと思つてたけど

意外とちゃんと人間味もあつて可愛いのね」

「まだそう見えてるならよかつた」

ただ銃を握り締める怖い女の子ではなく、

ただただ同年代の普通の女の子のような反応を見せる舞白に、霜月は安堵する。

「…私さ、舞白とほぼ同じ経歴で

あの槙島の事件で友達を失つたり、職能適性も監視官A判定は私たち2人だけだつた
みたいだから

勝手に親近感が湧いてたの」

「槙島の事件…？」

「桜霜学園の事件

私は幼なじみと友人を失つたわ」

その幼なじみの友人は、舞白の親友の咲良でもあつた。

あの夏の日に咲良が話してくれたのを思い出す。

意外な繋がりに舞白は驚いていた。

「もし、あなたと私が

監視官として同期で働いていたら

…こんな感じだったのかなって」

「……」

「また出会つて数時間だけしか経つてないけど

振り回されっぱなしだし、土壇場でぶつ飛んだ事するし

：でも、何だか楽しい

それに舞白が言う言葉一つ一つに信頼しちやう私がいるの」

宜野座の言う通りだと確信していた。

本当に同期として、一緒に監視官をしていたら
史上最強の名コンビになるだろうと。

「どうにか、ここから一緒に逃げましよう

お互いの目的をきちんと果たした上でね」

2人は顔を見合い小さく笑みを浮かべる。

そして、舞白がとあることを口にすると
霜月は戸惑うもある行動に。

しばらくすると複数の足音が聞こえ
部屋への扉が開かれると傭兵達がゾロゾロと現れた。

喰らいつく狼

「さてと、お嬢さん方

待たせて悪かつたな」

2人がそれぞれ縛り付けられている椅子の前に
椅子を置く男。

クスクスと不気味に笑みを浮かべながら
跨るように椅子に腰をかける。

「自己紹介がまだだつたな

俺の名前はアブドルラーマン、ここリーダーだ

：日本人のお前はシモツキ：ミカ、

白銀の女：マシロ：お前も日本人だつたんだな？

流暢な中国語にウイグル語を話すもんだから

こつちの人間かと思つたよ』

2人の持ち物から名前を割出せば男はスラスラと言葉を発す。

「…なんて言つてるのアイツ…」

「私たちが日本人つて事、

それと名前、私たちは身元も全部バレたみたいね』

男は霜月に赤い薬の入つた小袋をチラつかせる。

タバコの煙を吐き出せば、霜月は激しく咳き込む。

「ケホッケホッ…何なのよ……」

「恐らくお前の目的はこの薬品だろう?

日本の警察がついに嗅ぎつけたとは

…まあ、不幸を被るのは製薬会社だから関係ないが』

薬品を懐に仕舞うと、

今度は舞白に視線を向ける。

「…お前の目的は……

そうだな…俺の暗殺か?この組織の壊滅?

この国の連中に何を吹き込まれた?』

「組織の壊滅、この収容所の破壊と人々の解放

それと、アンタを倒すこと」

「ハハハハツ！そりや立派な事だ

日本人のお前が命の危険まで犯して何が目的何だ
：英雄にでも憧れてるのか？」

男の手が舞白の頬へ伸びる。

厭らしく撫でるその手を気味悪く感じ睨みつける。

「気の強い女は嫌いじゃない

特にお前みたい戦闘慣れしている奴は役に立つ

：どうだ？俺たちの仲間になれば悪い様にはしない
俺の女になつてもいいんだぞ？」

唇に指を這わせる男、

その瞬間、舞白は思いつきり指に噛み付けば
アブドルは顔を歪め慌てて指を引き抜く。

「…ツ…お前…」

「気持ち悪いこと言わないでくれる？

誰があんたの仲間になつてやるか

：あんたの女なんて虫唾が走る」

ぱたぱたと男の手から血が滴る。

人差し指の肉が抉れ、まるで狼のような舞白を睨みつければ
その態度と物言いに怒りを滲み出す、

「アドル様！すぐに手当を…」

「…このクソ野郎が

……その強気な態度、すぐに後悔させてやる」

男は暖炉へ向かうと、あの焼きごてを手にする。

”?”の文字に鎖の装飾

先端は熱で真っ赤に染まり、微かに熱波を感じるほどだった。

「…ちょっと…まずいじゃない…」

目の前で繰り広げられた光景に霜月はやつと口を開く。

男が持っているものが何なのか、だいたい想像できれば
平然としている舞白に目を向ける。

「それを刻んで、私が怯むと思うの？」

傭兵の一人が舞白の着ている服を雑に破れば
露になる白い肌、

しかしその白い肌に痛々しい傷が刻まれていれば
霜月が目を見開く。

「その傷……何それ…」

舞白の体には様々な痛々しい傷が大量に刻まれていた。
親友に刺された跡、肩には銃創の跡、

その傷は全て、過去の事件によつて刻まれたものだつた。

「痛々しいでしょ？」

だから大丈夫、あんなの怖くない」

心配する霜月を横目で見れば微かに口角を上げる。

アブドルは舞白の髪の毛を上へと引っ張れば

焼きցて目の前にチラつかせる。

「さてと、どこに刻んでやるか…」

体を舐めまわすように観察する。

「いい場所を見つけたよ、

これからお前は、この印を見る度この苦痛を思い出す
……ツ！」

刹那、肉が焼ける音と独特な臭いが立ち込める
左胸の上、ちょうど鎖骨の下あたり、
まるで心臓の上に被せるように押し当てられると
さすがの熱さと痛みに歯を食いしばり体に力が入る。
「……ツ……く……う……」

普通ならもつと悲鳴を上げるか気を失うか

しかし舞白は、焼印を押し込むアブドルを睨みつける。

「その焼印は一生消えない、一生この奴隸として
その印とともに生きていく…」

「……つ……悪趣味ね…」

冷や汗が額から滑り落ちる

その様子を心配そうに霜月は見ていた。

「だからって私は絶対に屈さない

暴力に恐怖、そんなもので簡単に降参するだなんて容易なことを考えないことね」

「…ならば分からせてやる、

そんな口が聞けなくなるまで」

焼きごてを体から離せば

そのままその棒を頭目掛けて振りかぶる。

椅子ごと体を倒されれば

先程の岩壁で傷ついた頭部の傷が開き再び鮮血が流れる。

悲惨すぎる状況に霜月も黙つていられず、

アブドルに止めるよう必死に訴える。

「いい加減止めなさい！」

…このままじや…死んじやう：

やめて!!!」

舞白の頭を踏みつける。

しかし口角を上げて笑みを浮かべ続ける舞白に、
ついには不気味さを覚えると男は表情を歪ませる、

「…狂つてるぞ、この女…」

「ふふふ…

…こんな事で、私は死はないよ…」

決して弱音も、屈する気配もない

そんな相手にアブドルは自分の過去を思い出せば
更に憤怒し体に蹴りを入れる。

昔、迫害を受けていた時、

相手の暴力に屈し、惨めな少年時代を過ごしてきたアブドル。

家族も友人も全員が惨殺され

故郷の言葉も失い、洗脳される日々。

強さが、暴力が、

人々を屈する事が出来る力その力がものをいう世界。

いつか、自分がそつち側に君臨してやろうと死ぬ気でここまで生きてきた。

しかし目の前の女は表情一つ曇らせず

鋭い目付きで、獲物を捉えるような目つきで睨み続ける。

「このクソ野郎が!!

お前ら日本人に何が分かる？ぬくぬくと平和ボケしてきたお前らが、
…この俺に屈さないのは許せねえ!!」

何度も何度も舞白の体にめり込む男の硬いブーツ。

気づけば舞白は目を閉じ、生きているのかも分からな

い。「やめて…っ…あんた!!やめてよ!!」

叫ぶ霜月、男にその声は届くはずもなかつた。

「フー…ツ…フーッ…」

ピクリとも動かなくなつた舞白を満足気に見下ろす

白銀の髪の毛は血に染まり
体には無数の痣が滲み出る。

「…そこの斧、持つてこい」

「は、はい！」

酷い光景に怯える傭兵達。

1人の傭兵がテーブルの上の斧を手に取ると
男に手渡す。

「その細い手脚を切り落としてやる！

もう二度と俺に楯突く事も出来ない：：

：一生俺に跪け！！」

斧を大きく振りかぶる

霜月は恐怖に怯え無意識に涙を零す。

「やめて—————っ！」

室内に悲痛な叫び声が響く。

形勢逆転

「……ッ！」

振り下ろされる瞬間、

大きな揺れと爆発音が響けば

斧を持っていたアブドルは大きく体勢を崩し
ギリギリ舞白の顔の真横に振り下ろされた。

「!? 何だ!!」

突然の大きな音に驚く傭兵達。

そして、ずっと無言だった舞白が再び笑みを零せば
男は掴みかかる。

「おい！お前：何をした!?」

首を掴み大きく揺さぶる。

舞白は可笑しそうにアブドルの目を見据える。

「言つたでしょ？」

「こ」を破壊するつて

……この傭兵、もう少し躊躇たほうが良かつたんじやない？

警備も甘いし、弱すぎ」

「だから！何をしたんだ！」

後ろ手に括られていた手元から何かが落ちる
傭兵が拾い上げ、アブドルに差し出す。

「あんた達は、私と霜月に気を取られすぎたの

私たちがただこの中を走り回つてただけな訳が無いでしょ」

舞白は収容所内を探索し

想定外の頑丈そうな建物だと分かれば

収容されている人々が密集している地点からほど近い壁に爆発物を仕掛けっていた。

「それに、運良く協力者もいるの

……多分そろそろ、その人たちが辿り着くはず

この収容所に隠された事実を、日本の企業と怪しい動きをしている事実を彼らは追つていたから」

「…………クソ!!

おい！お前達！すぐに現場へ行くんだ！」

傭兵達が焦った様子で部屋を飛び出していく。

そしてアブドルは銃を取り出せば床に倒れたままの舞白へ向ける。

「それで勝つたつもりか？」

「お前はここで死ぬ、楯突いたことを地獄で後悔すればいい」

力チャツと銃の安全装置を解除する音、

しかし、舞白はまだ笑みを浮かべ続ける。

「傭兵も傭兵ならボスもボスね

視点が狭いのよ

⋮武器がないと所詮ただの無能」

「ツ…死ねえええええ!!」

ついに怒りの頂点に達したアブドルは大声で喚き散らした。

刹那、静かに様子を伺っていた霜月が

思いつきり男に椅子ごと突っ込む。

隙だらけだつたアブドルの巨体が部屋の扉をぶち破り

外へと吹き飛ぶ。

「日本の公安局、ナメないでよ!」

すぐに足元の紐をナイフで切ると

舞白へと近づく。

「⋮作戦通り⋮

演技もバツチリだつたよ?」

へへへへつと呑気に笑う舞白に

容赦なく声を荒あげる霜月。

「バツカジやないの!?」

私が上手く手元の紐切れなかつたどうするつもり…ッ！」

「…やつてくれたなクソ女ども…」

頭を強打したのかふらふらとする男、

霜月の体をいとも簡単に床に押し付けると首につかみかかる。

「グツ…うう…!!」

「ナメやがつて、

…殺す殺す殺す!!!」

力が更に込められる

このままだと簡単に骨を折られそうなくらいの力が加わっていく。

((……つ…しぬ…))

霜月でどうこうなる相手ではない。

メリメリと指が食い込むその時

男は悲鳴を上げると首から手が離れる。

「ぐああああああああああああああ!!!」

放されたナイフが男の左肩に深く突き刺さる。
霜月が転がしてくれていたナイフで手脚の紐を切った舞白。
これで完全に形勢逆転だつた。

霜月は着ていた公安局のジャケットを舞白の体に被せる。

「ほら、それを着なさい」

「…ありがとう」

ジャケットに袖を通して、ジップを全て上げる。

「バレないようナナイフを隠し持つて、少しずつ紐を切つていくなんて…こんな危なつかしいこと初めてよ

：でも、あんたが無茶苦茶な方法で気を完全に向けてくれたから助かつた

「…」の奴らは詰めが甘い

面倒なのはこの男だけだつた

：ありがとう、おかげで死なずに済んだ

「本当に…破天荒すぎるでしょ」

目を合わせる2人

そんな2人を男は睨みつける
ナイフを引き抜き、再び声を荒あげ銃を構える。

「2人でコソコソと…

絶対に殺してやる」

舞白は霜月を背後に隠しナイフを構える。

「外に外務省の人間がいるはず

…早く合流して収容されてる人たちを助けてあげて」

「……はあ…何言つても聞かないんでしょ？あんた」

刹那、放たれる弾

交わして一気に間合いに入ればアブドルと舞白の一騎打ちに。

「早く行つて！私はもう大丈夫だから

今度こそ戻つてこないでよ！すぐ行く！」

「分かったわよ…！」

傍らに置かれている舞白のリボルバー銃を手にして

今度こそ振り返らず部屋から飛び出す。

5章

需要と供給

・・・・・

「……これが、この地下の秘密……」

目の前に広がる光景に常守は言葉を漏らす

厳重すぎる警備が続いた先にたどり着いたのは
巨大な研究所だつた。

人の姿はなく、何やら台の上に袋に入れられた怪しい物体が置かれていた。

それに近づく常守、

そつと袋のジップを下ろすと険しい表情を浮かべる。

「……人体実験、

それも密入国者の体を使っていたのね…」

既に死んでいる浅黒い肌の女性

歳はまだ若く、胸元には

共通して刻み込まれていた焼印を見つける。

「方法は？どうやつて日本の警備をかいくぐつて密入国者を集めたの？」

そつとジップを戻し一宮を睨みつけ問い合わせる。

一宮は淡々と語り始めた。

「需要と供給だよ

：我々の薬や金を求めていた組織に手を貸し

その見返りに人や臓器を寄越させた」

研究所内の別の部屋の扉を見つけた六合塚と雛河が中をのぞき込む。

その部屋の中には、無数の箱が置かれており

その中身は臓器だつた。

「上手くスキヤナーに引っかからないように

独自の電波遮断輸送機を使って、密輸させていた

：そして、使い物にならなくなつた奴は薬漬けにして
廃棄区画に棄てる

どうせ言葉も分からず、体も弱い奴らだ、情報も漏らすことなく死んでいく
残忍な行為に常守をはじめ、宜野座と須郷は表情を歪ませる。

「…誰の指示？」

「指示はない、独断で行つた」

「そんな訳ないでしよう？」

わかりやすい嘘をつく一宮に
宜野座がとある人物のＩＤを突きつける。

「有栖川 吉富東京都知事

「この男は過去にこの薬品会社の執行役員だつた、そうだな？」

「そ、…それが何だ？」

明らかに動搖する男にもはや弁明する措置もない
宣野座は続けて話を進める。

「有栖川は移民肯定派のリベラル

移民を日本に受け入れ始めたのもこの知事からだ
しかし当時、賛成派は少なく肯定党は低迷：」
とあるデータをデバイスに映し出す。

下つていく折れ線グラフ、しかし急激に折れ線が上昇している奇妙なデータだった。
「だが、この年を境に一気に支持率が上昇

とある企業が肯定党のスポンサーとして、大きく広告活動を行つた年
その企業こそがトランスペアレント製薬会社

「調べたデータの結果、

多額の政治献金が動いていることが分かつています

：「データ上、名前もすべて隠されていましたが解明することなんて容易い」

須郷も続いて口を開けば

不自然な帳簿を映し出す。

「かなり高額な金銭の動きがありました

都知事からの献金で間違いないですよね？」

「……ツ……」

絶対に漏れるはずの無いデータが抜かれていることに、驚く一宮。何も言えずただ動搖し続ける。

「政治活動を助ける見返りに多額の資金援助、そして外国人の入国者の一部を実験にと横流し、それを黙認する都知事……その実験で得た強力な薬で財を成し、更に人間や臓器が必要となり、どこかの組織と独自で取引をして不正に密入国者を使っていた」

常守は後退る一宮へ詰め寄ると

鋭く睨みつける。

「この会社の社長は初代社長の孫、

大した成果は出しておらず、ただの会社の顔として席を置いているだけで実質、製薬

会社のあらゆる部門の責任者を担つていてるあなたが実権を握つていた」「どう?」と口にすれば一宮はその場に腰を抜かし座り込む。

「実験の為に用意されている移民達はどこにいるの?」

「教えて下さい!」

容赦なく男につかみかかつた瞬間、研究所に雛河の声が響き渡る。

「見つけました！」

拘束された人達がこつちに…」

須郷が代わりに一宮を抑え込むと

常守と宜野座は雛河の元へと走り向かう。

解除された部屋の中には

数十人の人々が拘束され、檻のようなものに監禁されていた。

全員、青い服を着させられ怯えるように常守達を見上げていた。

生体認証をするももちろん全員ＩＤは無く、どこの国の人達なのかもわからない、何か喋っている様子だが翻訳もされなかつた。

しかし、ある1人の男性が中国語を話すと

常守達の翻訳機能が反応する。

「僕達は新疆ウイグル自治区から連れてこられたんだ！」

助けてくれ！」

「…新疆ウイグル自治区、だから中国語…

…もしかして！」

常守がそう呟いた瞬間、唐之杜から連絡が入る。

『朱ちゃん、美佳ちゃんの行き先が分かつたわよ』

「もしかして、新疆ウイグル自治区ですか？」

『あら、そつちもちようど情報を掴んだ感じ？

…でもこつちはもつと詳細な場所まで分かつたわよ』

唐之杜からデータが送られてくる。

新疆ウイグル自治区のとある場所に赤いマーキングが表示される。

『あの長い数字は経緯度が示されていたの、しかも3カ所ね
それぞれの経緯度を結んだ真ん中、きっとその場所に
美佳ちゃんを乗せた輸送機が向かつたはず』

緯度・北緯、経度・東經

それが羅列されている数字だつたと判明

意外すぎるカラクリに唐之杜はため息を漏らす。

「すぐに局長に国外捜査の許可を取ります

志恩さんはすぐに航空機の手配をお願いします

『了解、任せて』

そして通信が切れる

宜野座は全員の拘束具を解き

雫河は室内に転がっていた赤い薬品を見つける。

薬品に勝る抱擁

「この薬、

やつぱりこの地下施設でのみ作られていた」

研究所の傍らに置かれていた薬品の製造機の一部に
赤い薬の製造形跡が残っていた。

明らかに表には出せない違法薬物

だから地下で作り続けていた。

「…あとはこの施設で働いている研究員…

そいつらの色相と犯罪係数はどれ程のものか…」

宜野座は拘束具を床に投げ捨て常守を見据える。

確かに、ここで働いている研究員が必ず居るはず

そしてその人物たちは、恐らく色相も犯罪係数も普通ではないはずだった。

「ここ」の職員は全員色相管理されてます

異常がある場合、出勤停止や休職指示、

そもそもサイマティックスキヤンに引っかかるはずなんです

「だとしたら…」

「この地下に潜んでいるはずです

「ここ」に潜んでいればスキヤンも何もされませんからね

移民たちは雛河に任せて2人は部屋を出る。

すると、とある扉の前でロック解除を進める六合塚の姿が。

「六合塚さん、この部屋は？」

「この先、多数の生命反応があります

恐らく中に人が…」

手際よくデバイスを操作すると解除される扉

その部屋の中には研究員らしき人物達が、連なつて2段ベッドで眠っている様子
が伺えた。

ドアの開閉音と人の気配に気づいた1人の男が体を起こすと

常守達を見て怯え始める。

「だ、誰だ！お前ら!!」

その声に反応する他の研究員達

怯えるように全員が声を上げる。

宣野座はドミネーターを男に向けると目を見開いた。

『犯罪係数オーバー258 執行対象です：』

同じく六合塚と常守もドミネーターを向けると

全員がオーバー100を超える。

中には300超えの対象者の姿も。

「この人たち、過去にこの会社に解雇されています

：犯罪係数の上昇、最終定期検診も數年前に受けたのが最後の人ばかり…」

六合塚が一人一人のデータを見ていく。

この部屋にいた研究員は全員で16人、

いざれも犯罪係数の上昇などでデータ上では解雇された者ばかり

捜索届けが出ている人物も中には混じっていた。

「潜在犯として矯正施設に入るか、もしくはここで違法薬物や人体実験をするか」「それを知らないままこの地下に入れられ何年もここで生活を強いられていた、口封じの為にもな」

野蛮な手口にそれ以上何も言葉が出てこない。

常守は再び一宮の元へ戻ると

項垂れる相手の前にしゃがみこむ。

「……」までの事をして：人の弱みを利用して
あなたは何がしたかったの？

国民に更に良い薬？多額の献金？」

常守がそう言い放つと一宮は呑気に笑い出す
更に犯罪係数が跳ね上がる。

「ただの興味本位だよ

：人の体を使って実験をして、さらに高度な薬品を作れる
そして国民から感謝され、呑気にその薬を口にする国民：
楽しみだなあ：この真実を知った国民たちは

「一体何を思うだろうなあ：」

まるで人格が入れ替わったかのように狂い出す一宮

須郷もその男の様子に表情を歪める。

「このクソみたいなシステムに抗うためにも

更に強い薬を作らなければならない

：犯罪係数？色相？馬鹿馬鹿しい：

それが薬品で打ち勝てるなら、それこそ国民が待ち望んだ新薬！

そうだろう刑事さん？ そうすればあんた達ももつと楽になるさ…」

「…薬品なんかで人々の精神を真っ向に変えられるわけが無いでしょう？」

「現に、新薬の開発は進んでる

見ただろう？あの赤い薬を

：もつと改良すれば更に脳神経、精神に作用し、システムにさえ計り知れない精神状態を作り出すことも可能なんだ！」

常守はドミネーターをゆっくり向ける。

『犯罪係数オーバー486 執行対象です

セーフティを解除します

執行モード、リーサル・エリミネーター

慎重に照準を定め、対象を排除して下さい』

形状が変わるドミネーターに驚きを隠せない一宮。

「ひつ…ひいいいい!!

薬だ、あの薬を…」

須郷と常守を押し退け

一心不乱に薬品製造機械へと駆け抜ける。

あの落ち着きのある一宮の姿からは全く想像できない無様な姿、
2人は止めることも無く、ただ見据える。

「これを飲めば…ハハハッ…

⋮

ボリボリと錠剤を噛み碎く音。

すると、研究員には見えないが、研究員たちが身を隠していた部屋から少年が一宮に

向かつて走り出す。

「ちよつと！あなた！」

六合塚の制止を振りほどき無我夢中に駆け抜ける少年。
少年は焦ったあまりに足をもつれさせ倒れ込む。

「父さん!! やめろよ!!」

そしてその少年は確かに一宮の事を”父さん”と呼んだ
須郷がすかさずＩＤを調べると、
ドミネーターを構える常守にそのデータを見せる。

「一宮 健太郎 14歳

：数年前に捜索願いが出されています

6歳の時に潜在犯認定…

血縁者は父親の一宮 祥太郎

母親は既に死んでいるようです」

「そんな…」

須郷が少年にドミネーターを向けると
濁つた色相にオーバー158の犯罪係数が表示される。

「やめろよ！ 父さん…ツ…」

何とか立ち上がり父親へと掴みかかる息子

しかし父親は既に理性を失つており、口に薬品を放り込んでいた。

「執行しますか？ 常守監視官」

常守は向けていたドミネーターを下ろし、首を振る

無言で2人の様子を伺っていた。

「父さん…もうやめてよ…」

…いいから、もういいんだ…僕は…」

荒れ狂う父親の体に、しがみつくように抱きつく。

すると一宮は少しずつ呼吸が落ち着き、薬を手にしていた手をだらりと落とす。
「……もうそれ以上おかしくならないで…」

それは僕だけでよかつたんだ、僕が潜在犯だから：

「…ツ…」

「あ……あ……あ…」

再び常守はドミネーターを構える。

『犯罪係数オーバー299

執行対象です

セーフティを解除します

執行モード、ノンリーサル・バラライザー

落ち着いて照準を定め、対象を制圧して下さい』

執行モードが切り替わる

そつとトリガーに指をかける常守。

「……すまない……健太郎…」

その瞬間、ガクッと体を仰け反らせれば
倒れ込む一宮。

「父さん…父さん!!」

泣き崩れる少年、

その光景を見ていた宜野座達、そして研究員に外国人達。常守の表情は段々と哀しみに包まれていく。

この人たちもシステムに翻弄され、このような結果に。

「…例の赤い薬物が彼の精神状態を緩和させたのか…」

須郷が横で呟く

しかし常守は首を振るう。

「それは違うと信じたいです

……きっとそれは…」

倒れる父親を抱きしめ続ける息子

常守はそれから何も言わずドミネーターをしまう。

「二係がすぐにこの現場に到着します

あとは彼らに任せて私たちはすぐに新疆ウイグル自治区へ
急いで霜月監視官の救出に向かいます

局長にはすぐに私が報告に行くわ

……都知事の逮捕はその後よ」

違法薬物に人体実験、外国人、行方不明だつた研究員達
政治も他国も絡んだこの大きな事件。

休む間もなく常守達はすぐに新疆ウイグル自治区へと向かう。

・・・・・

朝陽と共に

・・・・・

爆発と共に空いた大穴

そこから朝日が照られ

久しぶりに日光を浴びる人々は眩しそうに目を細めていた。

「何だこの爆発……おい！」

すぐにアブドル様に報告を！』

1人の傭兵が慌てた様子で他の傭兵達に指示を出す。

すると何やら、収容所の柵の外で複数の気配を感じると
その傭兵は銃を構え、大穴から外へと出る。

収容所の柵を囲むようにドローン達が包囲、

そしてその包囲網の中で一際目立つ4WDから身を乗り出す人物
朝陽が彼女のプロンドヘアを照らすと炯々と光り輝く。

花城フレデリカ

車に付けられている拡声器から彼女の声が周辺に響き渡る。

「この施設は完全に包囲されている

死にたくなければすぐに武器を捨て、収容者達を解放しなさい」

流暢なウイグル語と中国語で繰り返される警告

しかし大人しく引き下がる奴らではなかつた。

続々と外に現れる傭兵達、

全員が武装をし、厳戒態勢だつた

「…簡単に引き下がる訳ないわね……」

刹那、再び大きな爆発音が響き渡る

いざれも収容されている人々に害がなく計算された場所で
幾度もなく爆発物が起爆されると、傷ついた傭兵達が混乱した様子で外へと更に姿を
現す。

「クソつ…どうなつてる!?」

全員緊急時の訓練通り配置につけ!!」

全く統制の取れていなー現場

その光景を目にして花城は勝機の笑みを浮かべた。

「…やるじやない、狡噺舞白

まさかここまでやつてくれるなんてね」

おかげで更に混乱し逃げ惑う傭兵達。

花城は付近で待機している外務省の特殊部隊に指示を出すと、
ドローン達が動き出し、ほんの一部だが降参していく傭兵を確保していく
。

そして、何百人規模の傭兵達は武器を手にしつつ花城達に襲いかかっていく。
「収容者の保護を最優先、そして証拠品の確保

逆らう者は殺しても構わないわ、作戦通り行くわよ！」

花城も銃を構えると傭兵相手に容赦なく応戦していく
まさに戦場だつた。

・・・・・

地下から1階へ向かう霜月

舞白を心配しつつも自分の役目を果たすべく
駆け抜けて行く。

複数の爆発音が聞こえた瞬間、

同時に外で何か始まっている様子を目にする霜月。

聞き覚えのある声、そして微かに見えるドローンには
外務省のマーク。

舞白の言う通り、どうやら外務省は既にこの施設をマークしていたらしい。

(…この声…)

…確か外務省の花城フレデリカ…)

花城は数ヶ月前、内閣官房が推進していた省庁間人事交流にて

監視官補佐として一係を訪れていた。

きつかけはあのシーアンの事件。

一步間違えれば他国への内政干渉、国際紛争に発展していくもおかしくなかつた。

今後そういった事案が発生した場合、外務省と上手く連携をしていこうと、そんな話をしていたのを思い出す。

(（なんか悔しいけど、とりあえず外務省も動いてくれてるならあとは何とかなりそうね
……）

霜月は混乱に乗じて施設内を駆け抜けると

次々と収容されている人々を牢から解放していく。

しかし、既に死んでいるものが大多数、

霜月はその光景に苦しい表情を浮かべるも
立ち止まる訳には行かなかつた。

そしてとにかく通じない言語

なんとか身振り手振りで誘導していく。。

「正面は危険！」
「正面は危険！」

傭兵たちが少ない方から逃げるの!!

必死に何かを伝えようとする霜月の意思が何となく伝わったのか

収容者達は大人しく、言われた方へと進んでいく。

幸い、ほぼ全員の傭兵たちは

収容者よりも外のドローンに気を引かれていた

心底統制の取れていらない連中に呆れる霜月。

「あんな力任せのボスじゃ

部下はついて行かないのね……』

ふーー、とため息を吐くと、霜月は次々と収容者達を解放していくのだつた。
そして牢の奥で死人を見る度に
苦しいほどに胸が締め付けられる。

歴史に喰われた男

・・・・・

迷路のように入り組む地下を

2つの影が止まることなく駆け抜ける。

そして銃声、ナイフが弾ける音、

荒い息遣いの舞白と、アブドルは誰にも邪魔されることなく
ケリをつけようと闘っていた。

「はあ……はあ……」

再び姿が見えなくなれば

舞白は耳を澄まし集中する。

時たま聞こえる外の激しい戦闘音に気を持つていかれそうになるも、気配と音を聞き
逃さまいと呼吸を落ち着かせる。

「ふー……ふー……」

((……どこ)……

どこから出てくる……?)

過去に泉宮寺豊久と衝突したあの地下の悪趣味な空間を思い出す。あの時に比べれば敵は1人、余裕だ、と考える。

ナイフを持つ手に力を入れ

咄嗟に感じた、右からの気配に目を見開く。

「ツ……」

突如鳴り響く銃声、

男から放たれた弾を、なんとか交わせばそのまま相手に向かって

舞白は走り抜ける。

「((この女)……戦い慣れしすぎだろう……)」

向けられる銃口に臆する事なく

襲いかかる舞白に恐怖を覚え始める。

「ハアアアアアッ!!」

ナイフを勢いよく振るい相手を圧倒していく

しかし男も簡単に倒れるような奴ではない

簡単に交わすと舞白の体を掴み投げ飛ばす。

今まで相手をしてきた中で圧倒的な力を持つアブドル
舞白も先程受けたダメージが大きく
ふらふらと体が揺れていた。

同時に男も幾らか攻撃を受け

ダラダラと血まみれになつていた。

どちらが先に倒れるかは時間の問題、

再び、ゆっくりとナイフを構え相手を見すえる舞白。

「チツ……」

弾が無くなつたのかその場に銃を捨てるアブドル、
すると小脇からナイフを取り出せば
男も構えの体勢に。

「もう投降した方が身のためだと思うけど?

……この収容所ももう終わりよ……」

「……煩い……黙れ!!」

2mを超える巨体、もちろんその分振るわれるナイフのスピードも威力も桁違いだつた。

必死に交わすも左腕にかすれば血が飛び散る

霜月から借りた公安局のジャケットに血が滲んでいく。

「くつ……！」

更にそのまま押し倒されれば

頭目掛けてナイフが振り下ろされるも

ギリギリ、手で相手の手首を掴めば動きを制止する。

「……」のナイフで、お前の脳ミソ抉り出してやるよ……」

「……ぐうつ……！」

押さえ込まれる力の方がもちろん強く

ナイフの切つ先をなんとか頬に逸らすも

頬に切り傷が刻まれていく。

「悪いけど、脳ミソはこんな所で抜かれる訳にはいかないのよ！」

両脚を思いつきり突き上げ男の体を離すと

今度は舞白が男に襲いかかり押し倒す。

「……なんで……負の連鎖を繰り返すの……？」

あなた達だつて……過去に同じ思いをして……」

グツとナイフを男の目の上に突き立てる。

「はあ……はあ……

お前に何が分かる……ツ……？

連鎖は繰り返される……それだけだ！」

「そんなの言い訳よ！」

ただ弱い者が弱い者をいたぶって楽しんでるだけ!!

儀物の権力……実際あなたを信頼している傭兵は

話へと聞いていたが、方

ただ偶然持っていた方を振り回して
怯えさせて従わさせてただけ！だから誰もあなたを助けて来ないのよ!!

舞白は力を振り絞つてさらに押し込む

動搖したのか、男は逆らうことが出来ず

そのまま左目に刃が突き刺さる。

「グアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!! 目があああ!!」

「……本当に強い者は……」

どんな権力にも臆さず、正しい道を切り開いていくのよ……
あなたはその真似事をしただけ！繰り返しただけ！

お金に、薬に、どんなに欲しかったものも手に入れたとしても
永遠に孤独なあなたは本当に欲しかったものなんて手に入らない！」

アブドルは左目を押さえゆつくりと立ち上がる

「平和ボケした日本人なんかに……理解されるはずがない……

……この世界はな、奪つた者が、支配した者が、強欲な者が生き残る！
正しい道？そんなもののハナっからこの国には存在しないんだよ！」

とてつもないスピードで舞白に向かって走り出すとそのまま壁に強く押し付ける。

男の腕が首に食い込み舞白は顔を歪め、手に握っていたナイフが遠くへと弾き飛ぶ。
「目の前で家族が殺されたことは？」

牢にぶち込まれ食い物も与えられず、死んだ人間の肉を喰らつたことはあるか？糞尿
にまみれた牢に監禁されたことは？

洗脳され、名前も言語も全て奪われ、信じていた仲間には裏切られ、……そんな奴ら

に正しい道など分かるわけねえだろうが!!」

右手に握られているナイフが舞白の右太腿に振り下ろされる

「ツグ……」

そのままグリグリとナイフを動かされると
とてつもない痛みが全身に襲いかかる。

「どうだ？ 苦しいか？」

すぐ殺さず、こうやつて弄ぶのが快感なんだよ……

特にお前みたいな強気の女をな？」

狂った男、楽しむように弄ぶ姿は
まさに異常、外道だった。

「……ふふふつ……ば、か……じゃない？」

右太腿を滅多刺しする手を掴むと

舞白は笑みを浮かべていたと思えば、鋭く恐ろしい顔つきになる。

そして勢いよくそのナイフを引き抜けば

また容赦なく、今度は男の右目にナイフを突き刺した。

「言つたでしょ？……詰めが甘いつて……」

……私がそんな事で恐怖に怯えると思う？

勝つたと思い込んで調子に乗つたやつほど隙が出来るのよ」

目の前で激しく悶える男、もう両目は使い物にならない

一生男には光が差し込まないだろう。

「……人々の希望を、光を奪つたあなたが

のうのうと生きていくると思わないで……

”すぐ殺さず”でしょ?

私もそういう主義なの」

声にならない悲鳴を上げ、地面にゴロゴロと転がる姿は

先程までこの収容所を仕切つていた強い男は想像もつかない。

この男も所詮、偽物の権力に喰われた、過去の悲惨な歴史に喰われた被害者。

しかしだからといって許せるわけがない

この男もその歴史を繰り返していたのだから。

「……許さん……」

「お前も俺も、ここで地獄に落ちてやる……」
男の手元で何か音が鳴る

何かが引き抜かれたような音。

「((手榴弾!!))」

舞白はすぐに勘づくと

右脚を引きずり男から離れる。

「((ど))か、爆発から逃れられる……」

刹那、爆発音が響けば男の体は粉々に
そして舞白もその影響を受け、壊れていく地下の下敷きになるのだつた。

降り立つ5人

・・・・・

公安局の複合ヘリコプターは
目的地へと時速500kmのスピードで向かつていた。

常守、宜野座、須郷、六合塚、雛河は

目的地の危険な状況に備え武装し、厳戒態勢を敷く。

「皆さん、デバイスの通信は繋がっていますか？」

全員がデバイスの状況を確認しオンラインになつている事を確認する

特殊な電波網を搭載したヘリ。

恐らく目的地にいるであろう霜月にも

あと少しで通信が届くはずだつた。

「問題ない、感度良好だ」

宜野座はデバイスを開き

目的地の新疆ウイグル自治区の地図を表示する。

「新疆ウイグル……」

以前、国防省に所属していた際に少しだけ耳にしたことがあるのですが……」
須郷も同じ地図を開くと過去の記憶を甦らせる。

「大昔から紛争が耐えることなく、おまけに民族間での迫害やジエノサイド、今でもその名残は深く残っているとか……」

点々とかなりの数を建設されている収容所は

今現在も姿を残し、廃墟となっているのが殆ど。

しかし実際のところ、詳しいことは知らされていなかつた。

「臓器や体の弱つた人体の輸送

…それに、見た限りですけど全員体に痣や傷がありました

それにある焼印も……」

離河が研究所で目にした外国人達。

全員が痩せ細り、何かしら怪我を負つていた。

良い環境から送り出されているような状況ではなかつた。

「どう考へてもその名残が残つてゐる、

目的地の地図を見ても何か大きな建造物があるように見えます

志恩からのデータを見るとかなり巨大な建物です」

おそらくトランスペアレント製薬会社の巨大な物流倉庫以上の規模だと確認ができる。

もしこの中に武装勢力や人々が監禁されているとするとなるならば、かなり危険だった。

「念の為、後続のヘリに日本製のドローンも運び込まれてます

……あと、外務省からも連絡がありました」

「外務省？」

…もしかして奴ら気づいていたのか

「私も驚きました、つい先程ですから

…おそらく外務省はかなり早い段階でトランスペアレント製薬会社とウイグル自治区の組織が関わっていたことを知つていました

花城フレデリカからのメール文

公安局が動き出したと気づいたのだろう。

数刻前に届いたメールには詳しい詳細はまだないものの

既にその組織の拠点を包囲し始めている、というような内容だつた。

「連携を取ろう、なんて向こうから言つていたのに

大胆なことをするんですね、外務省は」

六合塚がため息を吐き、以前一係に訪れていた花城フレデリカの言葉を思い出す
「自分達の縄張りは先に抑えておきたい、そういうことか？」

「先方も先方で何か考えがあつての事だと思います

⋮とにかく私たちは霜月監視官の捜索と保護です

そのことに関しては外務省からまだ何も応答がありませんから……」

刹那、ヘリが減速していく

傍らの窓から外を見下ろすと朝日に照らされた巨大施設が

それを囲む外務省のドローン達

地面は真っ白、外の気温はマイナス。

そして既に戦闘が始まっている様子だつた。

「一先ず外務省の花城さんに合流しましよう

状況を把握後、また指示を出します」

「了解」

少し拠点から離れた位置にヘリは着陸全員、公安局のマーク入りの紺色のダウンに身を包みヘリの外へと足を踏み出す。

強く吹き荒れる風にかき消されそうになる声常守は声を張り上げる。

「ドミネーターはもちろん使えません！」

国外捜査ということで拳銃の使用許可是得ています皆さん、気をつけて！」

トランスペアレント社から直接移動した為全員腰にはドミネーターを携えていたもののもちろん使うことは出来ない。その代わりに本物の拳銃が支給されていた。。

「では……行きましょう！」

5人は真っ白の雪に足を取られつつも、外務省が拠点を置いているテントへと向か

う。

予想外の人物

・・・・・

「……早い到着ね、常守監視官」

防弾の音や銃声が激しく鳴り響く

同時に外務省の部隊の隊員たちが、怪我を負った人々を手当し、移送していく姿も見受けられた。

「お久しぶりです、花城さん」

4WDの隣に設置されたテント。

そこには花城の他にも外務省のマークのジャケットを纏つた数人の男性たちの姿もあつた。

：それは後でお聞きします」

常守はデバイスに触れ、霜月に連絡をどうにか入れようとするとまだ電波が安定しないのかなかなか繋がらない。

「この施設内に、監視官が1名居るはずなんです
中に入る許可を頂けますか？」

「監視官？」

「一体どういうこと……？」

常守は霜月のＩＤを花城に向ける。

「霜月美佳、この前公安局に来られた際に
お会いしているはずです」

「……特に見かけてはないけど

気になる情報があつてね

この建物の北側からやけに多くの人質達が解放されてる

……開放された人達は皆

”若い女性に救われた”って口にしてるわ』

若い女性、一係全員が霜月ではないかと
期待を募らせる。

「もしかして、霜月か？」

宣野座が食い気味に花城に問いかける
しかし花城は断定はしなかつた。

「そう思いたいけど、実はこの施設の中に

それらしき対象者がもう1人いるの」

一係の5人に送信される1人のＩＤ情報

その情報を目にした5人は驚きを隠せない。

「狡噺舞白、あなた達なら見覚えがあるはずよ

⋮狡噺慎也の妹、シーアンの件から再び行方不明になつてゐる重要人物」

数日前に遭遇したこと、

この施設を制圧するにあたつて彼女が

制圧作戦の為に爆発物を仕掛けた事など

今までの経緯を伝えていく。

「前もつて彼女の作戦を聞いておいたの

彼女は囚われた人々の解放、

私たち外務省は”?”の壊滅、及び日本の製薬会社との怪しい取引の解明互いの利益の一一致と考えて協力することになったのよ

「なんてこと……」

常守が口を開いた瞬間

デバイスが鳴り響く。

相手は霜月だつた。

「美佳ちゃん!? 無事!?」

電波がまだ悪く若干音が途切れるも
なんとか互いに会話ができる状態に。

『先輩！ 良かつた……』

……通じ……た……』

ぶつぶつと途切れ途切れだが、しつかりと聞き取ろうと耳を澄ます。

『わた……大丈夫、です！

……でも……ツ……地下……』

……狡噺…………ま……』

”私は大丈夫、地下に狡噺舞白
「地下に舞白ちゃんがいるのね!」

『……』の……しき……

……』

六合塚が電波をもつと上手く拾おうと
何やら後ろでデバイスを操作していた。

『組織のリーダーと地下で恐らくまだ応戦中です

男の名前はアブドルラーマン

既に2人とも重症を負っていました、早く救助に行かないと……』

鮮明にきちんと音声が拾えると全容が明らかになる。

花城はすぐにアブドルラーマンという人物の情報を集めていく。

『私の位置情報を送ります、

……こつちも少し傭兵がまだ……

負傷者も……、救護ドローンと戦闘ドローンの手配を……』

再び電波が悪くなると途切れる通話。

しかし、霜月の位置情報が割り出せると常守は安堵した。
そして常守は無意識に宜野座へ目を向ける。
すると目が合えば、懇願するように常守の名を発す。

「常守」

真剣な眼差し

常守は宜野座が考えていることを察していた。

「…宜野座さん、地下は任せます

その代わり、必ず狡噛舞白の保護、及び確保を」

「了解した」

「六合塚さん、須郷さん、雛河君は私と前線へ

霜月監視官の救助、そしてトランスペアレント社の証拠品の捜索を」

「了解」

常守は4人に向き直る

「自分の身を最優先に

相手は訓練された武装集団、かなり危……」

その瞬間、地面が揺れるほどの大爆発が起ころる
恐らくは地上ではなく地下、

花城が状況を確認すると声を上げる。

「まずいわ、地下施設が爆発

早くしないと重要人物の確保も、狡噺舞白も危ないわ」

「……ッ」

宜野座は直ぐにテントから飛び出し姿を消す。

外は激しい銃撃戦、早まる宜野座を止めることが出来なかつた。

「待つてください！宜野座さん!!

……私達も急ぎましよう！」

常守達も急ぎ足で外へと向かい、

ドローンと共に霜月がいるであろう場所まで向かうのであつた。

・・・・・

6章

力タルシス

力なく床に体を投げ出す

もう体のどこが痛いのか分からないくらい、感覚が麻痺している様子だった。
爆発のせいで耳鳴りが続き

脳内に鋭い音が延々と残る。

微かに聞こえる爆発音

銃声、人々の声。

薄らと目を開けると目の前は瓦礫まみれだつた。

「((……ツ……痛い……))」

地下の一部が爆発で崩れたようで

胸元から下が瓦礫で埋まり身動きがとれなかつた。

そして微かにひび割れている天井が目につくと
更に、崩れるのも時間の問題だと気づく。

しかし大怪我を負つた脚は動くはずもなく、
ただうつ伏せで頭上の瓦礫が落ちてくるのを待つだけしか選択肢は無きそつだつた。

「…………私…………こんなところで死ぬの…………か」

なんとか力を振り絞り体を抜こうと頑張るもビクともしない
同時にアブドルから受けた傷のせいか

酷く失血状態に陥り目眩が起ころる。

「…………はあ…………」

立てていた肘をペタつと下ろし
床に顔を擦り付ける。

ぼんやりとし始める視界、

段々と聞こえなくなる音。

ギュッと握つていた拳を緩め

ゆっくり瞼を閉じる。

?????????????????

目の前に広がる海、

あ…、人が死ぬ時たどり着くつてよく言われてる場所。

見える世界は真っ白で

ただ穏やかに打ち寄せる波を見つめる。

「この先を歩いていけば

お母さんにもお父さんにも、咲良にも会えるのかな」

ゆっくりゆっくり歩みを進め
生ぬるい海へと足をつけていく、

不思議と吸い込まれるように、さらに沖へと進もうと体が勝手に動く。

走馬灯のように脳内再生される今までの思い出。

優しい兄に育てられ、友達にも恵まれて
何不自由しなかつた生活。

兄と喧嘩した日もあつた、怒鳴りあつたことも
たくさん困らせて、たくさん迷惑をかけた

兄が潜在犯落ちした時は家でずっと涙を流した
いつも家で迎えてくれた兄がいない、

事件に翻弄された兄に首を掴まれたこともあつた
口煩い兄が何度も現れるとクスクスと笑みを浮かべる。

「本当に……お兄ちゃんは心配性なんだから」

無事、あの花城さんと外務省で活躍していると知るともう後悔はなかつた。
最後の最後で生きていることを知れて、

このまま死んでいいと思つた。

太腿まで海に浸かる

ボーッと水平線を眺めざらに進もうとするが
不意に足が止まる。

「……結局、約束守れなかつた

ノブ兄……」

2度も舞白を信じて見逃してくれた宜野座の姿が思い浮かばれる

どんな時もそばに居てくれた、唯一涙を見せられる相手

強がつても全てを察して静かに隣にいてくれた

何も聞かず、何も言わず、優しく背中を摩つてくれた

幼い頃から沢山可愛がつてくれた宜野座

兄にも言えないこともこの人にならと全てを話せられる人

「……もう一度会いたかつた、

：ちゃんと謝りたい、約束破つてばかりで
泣いてばかりでごめんなさいって……」

ポロポロと溢れる涙。

「あと一度だけでいいからあの腕で抱きしめて欲しいよ
馬鹿だなって、頭を撫でて……」

……ツ……」

気づけば腰まで海へと浸かっていた
徐々にひんやりとした感覚が体を覆っていく
しかし脚は止まらない、深く深く進む。

朱さんにもちゃんとお礼を言いたかったな
秀星に借りたCDも返せてないし、

六合塚さんに貰ったマニキュアのお礼もしていない、

唐之杜さんにもつと恋愛相談しておけば良かつた
征陸さんにもノブ兄の聞きたかつたこと聞けてない
青柳さんに何年も前のクリスマスの時の事も……
色々な人の顔が思い浮かぶ。

霜月美佳、ちよつとしか居れなかつたけど
私と同い年で、面白い人だつたな

……着てた上着も返せてないし、あのリボルバー銃
そういえば貸したままだつた……
無事、皆を助けてくれたかな……
友達になりたかつた、な、……

胸元まで沈む体はもう止まらない。

「「もうこつちに来るのかい？狡噺舞白」」
聞き覚えのある声が響くと

舞白は立ち止まる

目の前に現れたのは楳島聖護。

夢にも最近現れず久しぶりの姿に、
舞白はクスクスと笑みを浮かべる。

「私もそつち側に行くよ」

「案外あつさりしてゐるんだな」

1歩踏み出すと肩まで浸かる

「君とまた語り合えるのは嬉しいことだ

次は何の話をしようか?」

「語り合うのはもう懲り懲り

静かに好きな本でも読んでいたい」

「……君らしいね

そういう所が気に入っていたよ」

楳島は舞白の手にゆつくり触れ、重ね合わせると自分に引き寄せる。

「こうしてみると本当に僕達はそつくりだつたね」

同じ白髪に唇を落とし笑みを浮かべる。

「それは見た目だけって事でいい?」

「……どうだらうか

結局のところ、僕達免罪体質者は

誰にも理解などされず、真っ白な存在

：間違いなくそこは全く僕と同じだよ」

槇島の胸元に頭を填め

いよいよ口元まで沈んでいく

「……もう、孤独は懲り懲りだよ」

そつと瞼を閉じる

?????????????

刹那、首根っこを掴まれるような
腕を強く引かれる感覚に襲われると
目を見開く舞白

色彩のある世界へと引き戻され
徐々に戻る聴覚、聞こえてきた人物の声に
ゆっくりと顔を持ち上げた

二度と離さない

・・・・・

爆発音、銃弾、喚き声

ここは戦場だった。

しかし、最先端のドローンや武器を扱う相手に、

この拠点の傭兵達は刃が立たない様子で陥落するのも時間の問題だった。

危険地帯をなんとか掻い潜り
施設付近へとたどり着くと

宣野座は地下への道を探す。

焦る気持ちも抑えつつ

時たま現れる傭兵達をねじ伏せる。

「((ど))だ入口は……

……()」

唯一見つけた入口は爆発で瓦礫に埋まつており他の道を探す羽目に。銃弾を避けつつ壁を伝つてキヨロキヨロと辺りを見回すと通気口を見つける。

「潰れてないな、

……ここから入ろう……」

入口の蓋を軽々と開け滑るように侵入するしかし何やら煙の臭いがすると眉を顰める。爆発の影響で地下の一部に火災が発生し中は煙が立ち込めていた。

幸いにもかなり広い空間で

煙と炎に包まれるのはまだ先のようだつた。通気口から地下へたどり着くと

すぐさま走り出す。

「舞白!!聞こえたら返事をしろ!!舞白ーーっ!!」

まだ地下に傭兵がいる可能性があるにも関わらず

宣野座は必死に名前を叫び続ける。

しかしかなり広く入り組んだ道、

そうそう簡単に見つかるはずもない。

「（（頼む……生きててくれ…………））」

すると瓦礫が崩れ、炎の熱で暑くなっている空間へとたどり着く。

煙に視界を邪魔され

腕で口元を覆いながら辺りを見回す。

すると微かに白い何かが目につく。

瓦礫に下敷きになりうつ伏せの状態で倒れている人間、

顔が見えたわけでもない、直感で舞白に間違いないと思えば
一心不乱に駆けつける。

「おい！ 舞白！」

公安局のジャケットに身を包み、瓦礫から上半身のみが出た状態。

酷く怪我をしているのか白い髪の毛は血で一部が赤く染まり

そもそも呼吸をしているのかさえ怪しかった。

「この瓦礫……退かないと……」

舞白の体に伸し掛る瓦礫。

1つずつ確実に、取り除いていくと
なんとか体を引き抜くことに成功。

「…………う…………」

小さく声を漏らし、頭を持ち上げる様子を見せ

微かに開かれる瞼。

しかし、再び目を閉じると呼び掛けに応じなくなる。

「((一先ず安全な場所に……))

舞白を抱き上げた瞬間、頭上からパラパラと瓦礫が落ちていき、

すぐにその場から離れた瞬間、一部の天井が音を立てながら崩れ落ちる。

あと1秒でも遅れていれば

舞白の体は完全に瓦礫に潰されるところだつたと

一先ず救出できたことに安堵する。

さすがに来た道の通気口は舞白を抱えて入る事は出来ず
新たに出口を探す必要があつた。

だが、まずその前に舞白の状態を確認しようと
床にゆっくりと降ろし何度も声をかける。

「舞白!! 舞白!!!」

「…………」

胸に耳を当てるとき微かに心音は聞こえ
胸も上下している様子が分かる

しかし失血状態が長く続いたせいか顔色が真っ青に染まつていく。
ジヤケットのジップを下ろすと露になる肌

ナイフの切り傷からは血液が溢れ、

何より目を疑つたのはあの焼印が刻まれていたこと。

「…………
………酷い…………」

焼かれた跡は酷い火傷跡、一部が腫んでいる様子で
直視できるような状況ではなかった。

太腿から溢れ出る血を止めようと

ベルトで止血をし、宣野座が着ていたダウンを羽織らせ
再び抱き上げる。

「あと少しだ……辛抱しろ、舞白……」

走り抜けながらデバイスに触れると

即、常守に繋がる。

「常守！ 舞白は救出完了

しかしかなり状況は悪い、救護ドローンを数台どこにでもいいからばら蒔いてくれないか？」

『了解です！』

こちらも霜月監視官と合流するところです！

……地下から煙が出てるようですが出口は見つかりましたか？』

「今探しているところだ

火災も発生していてかなり危険……ツ！」

その瞬間、ひび割れた天井が崩れ落ち

行き先を塞がれてしまう。

そして通信状況が悪いのか通話がついに途切れると

その場に立ち尽くす宜野座。

「しまった……ツ！」

四方八方塞がれると逃げ道を完全に失つてしまふ
そして、唯一壁に取り付けられていた1つのランプだけが暗闇を明るく照らしてい
た。

「常守！聞こえるか！？」

……どうする、考えろ……」

舞白を床に降ろし何とか瓦礫を退かそうとするがビクともしない
まさに絶体絶命だった。

どうにか出る手段はないかと、閉じ込められた空間を歩き回るが
通気口も何も無い。

「外から爆破してもらうしか方法はないか

……」

唯一外側に面している壁

ここを外から爆破してもらうしか

どう考えても出る方法はない

しかし、デバイスは使い物にならず壁を拳で殴りつける。

「((……考えろ……考えろ……ツ))」

眉間に皺を寄せ険しい表情で必死に考える。

刹那、宜野座の足に何か当たる感触がすると
足元に目を向ける。

「……舞白？」

「……気がついたのか!?」

薄らと目を開け宜野座を見つめる舞白。
しゃがみこみ顔を近づけると、

目を覚ました舞白の様子に表情を緩ませる。

「…………ノブ兄…………

……」

「無理して喋るな、

ちょっと確認させてもらうぞ」

デバイスの照明を使つて瞳孔や

脈を確認する。

苦しそうに呼吸をする様子に気づくと

着ていたジャケットを枕替わりに頭の下に敷く。

「……会えた……」

「……また、……ノブ兄……」

「だから喋るな！」

死にたいのか？……」

嬉しそうに笑みを微かに浮かべる舞白は
ゆっくり手を動かし

宣野座の頬に手を伸ばす。

「……………めん……」

「……………ね…………」

笑みを浮かべ続けると舞白は会いたかった人物に会えた喜びを滲み出していた。
目尻からとめどなく流れ落ちる涙を
宣野座は指ですくう。

「……………な、い…………」

「……………舞白…………」

「…死に……たく、な……い……」

「大丈夫だ、あと少しで助けが来る

それまで頑張るんだ、な？」

宜野座の頬へと伸ばしていた手がだらりと力を失うようにな
床へと倒れる。

すぐさまその手を拾い上げ、ゆらゆらと揺らし始める。

「……おい、舞白？」

舞白？……いくな、まだいくなよ……」

「…………ノブ…………」

虚ろになつていく表情に力をなくしていく体。

「……絶対逝かせない…

こんな所で……やつとまた会えたんだぞ！？」

「……へへ……つ……」

うつろな表情から再び笑顔を作り出す。

しかし身体から体温が失われているのが分かる

宜野座は舞白の顔を両手で挟み

何度も何度も声をかけ続けた。

死前喘鳴の特殊な呼吸音が聞こえ始めると、

宜野座は心臓マッサージを施しなんとか命を繋げようと必死だつた。

「今度こそ……絶対、お前を離したりしない……」

・・・・・

彼女の気銃

・・・・・・・・

逃げ惑う開放された者たち。

その中にその景観に似つかわしくない上下スースツ姿の女性、霜月美佳人々を安全なルートへ誘導する。

「早く！さつさと逃げなさい！」

運良く傭兵たちは外のドローン達との交戦でこつちには目もくれず、絶好のチャンス。

しかし、その様子に気づいた数名の傭兵たちが銃を構える。

「((ますい!!))」

そばに居た幼い少年を抱き抱え、物陰に身を隠す

刹那激しい銃声が響き渡ると
逃げようとしていた人々の行く手も遮られてしまう。

「……応援はまだなの!? 先輩!!」

あれから連絡が途絶え

常守達が今どこにいるかも把握ができます

苦しい表情を浮かべる。

不意にジャケットの内ポケットに入れておいた舞白のリボルバー銃に手を伸ばし
ロツクを解除する。

微かに聞こえる傭兵達の足音、

傍らでは泣き喚く少年。

「……やつてやるわよ……」

ギュッと目を瞑り覚悟を決めたように銃を強く握りしめる。

そして身を隠していた2人の目の前に現れる傭兵、

ニヤッと笑えば銃口を向けられる。

霜月も構えた瞬間

銃声とともに体を仰け反らせる男。

「グアアツ!!」

突如目の前の傭兵が頭に銃撃を受け倒れると、
聞き覚えのある声が破壊された施設内に響き渡る。

「霜月監視官！ご無事ですか!?」

銃を手にした須郷を先頭に現れたのは、

常守をはじめとする一係のメンバーだった。

見慣れた人物たちに安堵する霜月。

数々のドローンも現れると傭兵達を次々と駆逐していく。

「美佳ちゃん、 よかつた……無事で……」

座り込む霜月のそばにしやがみこむと笑みを向ける常守。

霜月は傍らで泣きじやくる少年を抱えたまま、 不機嫌そうに見据える。

「来るのが遅すぎるんですよ！ 先輩！！

おかげで大変な目に……」

常守の視線が手元のリボルバー銃に向けられる。

ハツした様子で霜月は少年を抱えたまま立ち上がり舞白の存在を気にかける。

「狡噺舞白は？」

さつき大きな爆発音が！」

「宜野座さんが先行して向かっています、

ただ地下の状況もかなり危険そうですぐにこの後救出に」

ドローンに少年を乗せると

周辺を見回す霜月。

六合塚がデバイスで生体反応があるか調べると

捕らわれていた全員がこの施設から脱出できたと判断する

「おそらくこの周辺には傭兵以外の生体反応はありません」

「ありがとうございます六合塚さん」

常守は4人に向き直ると指示を出していく

「六合塚さんと雛河君はドローンを連れ霜月監視官と共に

残された人がいなか確認を、何かトランスペアレント社に通づるものがあるか調べ

てください

そして私と須郷さんで地下へ行きます」

刹那、霜月は常守の腕を掴み真剣な目つきで見据える

「私が地下へ行きます！」

……これ以上、あの子に借りを作りたくないの

「でもその怪我で地下に行くのは危険……」

「ここの地下の造りは把握してます！」

それにこんな傷、大したことありません

：絶対に見つけてみせます、宜野座さんも狡噺舞白も」

引き下がらない霜月

そして何より地下の造りを把握しているという発言に

常守も苦渋の決断を強いられる

暫く考える素振りを見せる常守

そして霜月の手を掴み口角を緩め言葉を発す

「分かりました、頼んだわ霜月監視官」

特別行政区 サンクチュアリでの事件から
ひと皮もふた皮も剥けたような霜月の行動、 言動に
彼女の成長を感じていた常守
杞憂しすぎてはいけないと考えていた

「須郷さん、 霜月監視官のフォローをお願いしますね」

手に持っていた銃を握り直すと

須郷は頷く

「六合塚さん、 雛河君、

行きましょう！」

3人はドローンを連れ施設内へと消えていく

「須郷執行官！ついてきてください！」
「了解！」

そして2人も地下施設へと姿を消す
霜月の手には

しつかりとリボルバー銃が握られていた

・・・・・

大海の木片

・・・・・

地下に潜入する2人

しかし進もうにも至る所が瓦礫に埋まり、
場所によつては炎に包まれる箇所も目につく
足止めされる度に陥しい表情を浮かべる
「監視官、ここもダメです！」

瓦礫に塞がれた道、
微かに漂う煙

須郷はデバイスで生体反応を確認しつつも
未だに反応はなく行き詰まつてしまう

「舞白があの男とやり合つてた場所から考えると

この道しかもう辿り着けない

…もしくは一か八か、外から爆発させて

地下に入るしか……」

残念ながら未だに電波は悪く

宜野座の居場所も、連絡を取ることもできない

更に2人を探し始めて時間が経っている状況にも焦りを見せる

外から生体反応を探り

1階の壁を一か八かで破壊し

即救出する、その方法しか残されていなかつた

「グレネードなら2つあります

かなり危険な選択になりますが……」

「中が無理なら外から、迷つてる時間は無さそうね

：外から捜索します！」

中からの捜索を諦める2人は

外で常守が用意していた救護ドローンを引き連れ回り込んでいくのであつた

???????????

???????????

四方を塞がれた地下

ギリギリ生命を保っている舞白を寝かせたまま

宜野座はどうにか出られる方法がないか歩き回っていた

そしてしばらくすると唯一廊下を照らしていたランプも故障し真っ暗闇に、デバイスの灯りを頼りにする方法しか無くなってしまう

「((デバイスもオフラインから復旧しない

唯一の通気口は爆発の影響で塞がれていた……)」

再び舞白の元へ戻る、瞳孔を確認するもまだ散大している様子はないがギリギリ命を保っている状態だった

不意に外に面している壁側の天井に目を向ける

すると瓦礫に埋もれている方向の隙間から微かに光が漏れ正在することに気づく

「((さつきまで電灯の光があつたせいで気づかなかつたが

……あれは?))」

そつと近づくと冷たい風が微かに入り込んでいた
おそらくは地上と繋がった側溝、
ぱたぱたと雪解け水が柵から滴り落ち

外と繋がっていることは間違ひなかつた
しかし天井は決して低くなく

宣野座の身長でもギリギリ届かない高さだつた

「か八か、か……」

霜月がよく口にしていた言葉を発すとデバイスの電波を確認しつつも声を上げる

「おい！誰かいないか！」

常守達には救助依頼を出している

だとすれば誰かが必ず周辺を捜索しているに違ひない
ならば唯一の外と繋がるあの隙間に

原始的な方法だが可能性に賭けるしか方法は無かつた

「つ…………こだー！誰か!!」

「ねえ、
なにか聞こえない?
」

???????????

?????????????????????????

外務省の部隊と傭兵達が戦つてゐる前線とは逆側の場所
微かに爆撃音は聞こえるものの

それとは違う、何かの声が聞こえるのを霜月は聞き逃さなかつた
立ち止まり耳を澄ませる

須郷もその声に気づくと

2人は駆け抜け声が漏れてゐるであろう側溝を見つけると

生体反応を確認

しかし側溝から微かに煙が漏れており一刻を争う状況だと気づく

「監視官、この場所の地下から生体反応が2つ
「見つけた!!この下よ!!」

側溝に向かつて身を屈めると霜月も呼び掛ける

「宜野座さん!聞こえますか!?」

声を上げ続けた宜野座の様子は

地下の煙をかなり吸ってしまったのか呼吸を荒くしている様子だった
「…………霜月か……」

よかつた…………ケホツケホツ：」

「すぐに2人を引き上げます！」

……須郷さんグレネードを用意してください」

「了解」

須郷が背後でグレネードの用意をすると

霜月は救護ドローンを呼び寄せ、

すぐに救出できる体制を作る

「霜月、この側溝の真横は瓦礫だらけだ

お前から見て右側……」

……10mほど離れた場所に穴を開けてくれ！」

宜野座は舞白を抱き上げ壁から離れる

既に煙に覆われた空間に留まるのは限界だつた

「監視官！ いつでも大丈夫です！」

「オーケー！」

……宜野座さん、離れてください！」

「……っ」

グッと抱く力を入れ壁に背を向ける

そして爆発音とともに強い爆風が吹き荒れると大きな穴が空く

しかし同時に周辺の天井がグラグラと音を立てながらひび割れていた

「宜野座さん！こっちです！手を伸ばして！」

「宜野座執行官！」

霜月と須郷が手を伸ばす

宜野座はすぐに掛け出すと

先に舞白の体を持ち上げ、引き上げられていく

刹那、舞白が引き上げられたと同時に地下の奥の天井が崩れる

それに気づいた霜月は舞白を須郷に預け、直ぐに宜野座に腕を伸ばす

「宜野座さん！早く！」

「……ッ！」

何とかギリギリ腕を掴み引き上げられると同時に
先程まで2人が居た場所は瓦礫により崩れ落ちていく

「……はあ……はあ……、

助かつた……霜月、須郷……」

澄んだ空気を吸い、呼吸を整え

救護ドローンの処置を受ける舞白に目を向ける

「狡噺舞白……かなり危険な状況です

すぐに外務省の拠点に連れて行く他ないかと」

「直ぐに向かいましよう、でもこの状態で前線付近に近づくことは危険……遠回りにな
るけどこつちのルートから回るしかない……」

この場所から拠点まで大回りをして向かつたとしても

かなりの時間を要する事に

しかも安全とは限らない状況

それまで命が持つ保証もなかつた

「……急ごう、どうにか間に合わせ……」

その瞬間、何かが近づく音に宜野座はいち早く気づく
施設を囲む柵の向こうから4WDが猛スピードで向かってきていた

「!?」

4WDが柵を突き破ると雪煙に覆われる4人
冷風に咳き込む3人は

目の前で止まる車両に目を向ける

その車両には外務省のマークが印字されており
敵ではないと判断した

車両の扉が勢い良く開くと
中から1人の人物が降り立つ

「…………何で……お前が……」

宜野座はその人物を見ると目を見開く

破天荒な男

・・・・・

”?”の傭兵達

戦闘が始まつて数時間

積み重なる屍を前にまだ抵抗するものの

外務省相手に爆薬や弾丸も底を尽くのも時間の問題だつた

「……なかなか厄介な奴らね……」

予想以上に時間を要している状況に

花城は鼻持ちならない様子だつた

すると部隊の1人の男が焦つた様子でテント内に入ると

花城に声をかける

「課長！」

「何? どうかしたの?」
「それが……」

唯ならぬ様子の男に何かあつたのかと驚いた様子だったが耳打ちされた内容に呆れたようなため息を吐く

「待機、と命じたはずなのに

誰が情報を流したのよ……」

腕を組み首を回すと

ある男の行動に悩まされている様子だった

「……まあ、仕方ないわね

今回の命令違反は目を瞑つてあげるわよ」

?????????????????

猛スピードで雪原を走り抜ける４WD
その運転席に座っている人物は

「狡噺、何でお前が外務省に」

外務省のマークが刻まれているジャケットを羽織る狡噺
シーアンで会つたのを最後に、約2年ぶりの再会だった
「説明は後だ、まずはお前らを安全な場所に
…あとは舞白の救命処置が優先だ」

冷静さを装う狡噺

しかし舞白の状態を見た時、酷く動搖していた

「おい、まだ脈はあるな？」

瞳孔は?」

後部座席で横たわる舞白の様子を見る宜野座と霜月

まだなんとか生きてはいるもののヒューヒューとした呼吸音が聞こえてくる
「かなりまずい状況だ、

あとどれ位で到着する?」

「…………」

「おい! 狡噺!」

このままのルートでも時間を要すると考えた狡噺はハンドルを思いつきり切り返す
先程よりも爆撃音が少なくなつた前線
猛スピードで走つていた車体が急に止まると
何となく嫌な予感を察知する霜月が声を上げる

「待つて……まさか、あなた!」

「おい、お前

そつち側からの傭兵は頼んだぞ」

「…………りよ…………了解…………」

狡噺は助手席に座る須郷にライフル銃を手渡す

察した須郷は頷くと銃を受け取った

「突っ込む気でしょ！危険すぎる！」

事故つたらどうするのよ！」

「大丈夫だ、お前は舞白をしつかり抱えてろ

…ギノ、お前は左側を頼む、銃はそれを使え」

相変わらず無茶をする狡噺に微笑を浮かべる宜野座

だがその方が確実に早く辿り着くのは間違いなかつた

それに従う須郷と宜野座に霜月は眉を顰め、口をぽかんと開け呆れた表情を浮かべる

「ちょっと！待ちなさい！」

あんた達もあつさり受け入れ……」

アクセルを思いつきり踏み込む狡噺

無茶苦茶すぎる、と霜月は思いながらも舞白に被さるように身を隠す

「来るぞ、撃たれる前に先に撃て！」

前線へとついに乗り込む車体に

複数の銃撃が撃ち込まれる

「((…………つ…………無茶苦茶すぎる

…………あいつが例の…………狡噺慎也…………)」

経歴や話を聞く限り無茶苦茶だとは分かつていたが、予想以上の破天荒さに翻弄され
ていた

するとその瞬間、狡噺のデバイスに着信が入る

相手は花城フレデリカだった

『ちょっと！狡噺！前線に乗り込むなんて！

それに勝手にうちの車両使つて…………』

「説教は後で受けるぜ、課長

悪いがすぐにそつちの待機している医務官を手配して欲しい、あとは医療用の待機車

両、後方で待機してやるだろ？」

『どこでその情報を仕入れたのよ、全く……』

「悪いが俺は気長に待てるような悠悠閑閑な人間じやなくてな

……頼んだぞ」

一方的に通話を切ると更にアクセルを踏み込む
須郷と宜野座も何とか役目を終えると窓を閉める

「全員掴まれ！このまま突っ込む！」

須郷は銃を足元に置くと頭を伏せる

宜野座は舞白に被さる霜月の上から更に被さると
2人をしつかりと支える

刹那、大きく揺れる車体

ガタガタと揺れた後、ブレーキがかけられ
なんとか目的地で停車した様子だつた

「……つ……

……相変わらず無茶苦茶だな、お前は」

宜野座はゆっくり体を起こすと

霜月と舞白の無事を確認する

狡噺は扉を開けると3人に声をかける

「ほら、降りるぞ、舞白を別車両に移す

…監視官のあんたも手当を受けろ、怪我してるだろう」

「ゞ）心配どうも、私は結構です！」

破天荒すぎる行動にイライラとした様子の霜月

狡噺と須郷が車から降りると

舞白を抱え準備されていた医務車両に4人は向かう

・・・・・

あの子の兄

「ああ、一先ずこつちは大丈夫そうだ

……

通信環境が再び復活すると常守達とも無事連絡を取ることが可能になり、あと少しで

こちらに戻つてくるとのこと

「常守監視官達もご無事で、よかつたです」

話を隣で一通り聞いていた須郷は安堵のため息を漏らす

「ああ、重要書類も見つけたし

……俺たちの任務は一旦これで完了だな」

宜野座はデバイスを閉じると

医療用車両の傍らに設置されたテントに目を向ける

「だから、大丈夫だつて言つてるじゃないの！」

「人が親切に手当してやつてるんだろう

：それ以上動くと血が止まらないぞ、ほら」

「痛つ……やるんだつたらもう少し丁寧にやりなさいよね！」

テント内の椅子に座り狡噺に手当をされている霜月

実はかなり傷が深かつたようで左脚に傷を負つていた
その様子を見て微かに笑みを浮かべるが

同時に狡噺に向けた瞳はどこか冷たく感じる

???????????

常守達に聞いていた限り、狡噺はかなり妹を溺愛しているとか

最初、倒れた舞白を見た時はかなり動搖しているような雰囲気だつたが、今は落ち着いて霜月の手当てを

足に包帯を巻いてくれている狡噺に思わず声をかける

「……ねえ、あなた

妹のこと心配じやないの？

私の手当てなんてやつてる場合じやないんじやない?」

包帯を巻き終わると顔を上げ霜月の目を見る

「医務官に診てもらつて いる限り、俺はそれ以上何も手出しへはできない、

後はあいつの生命力を信じるだけだ」

さつきの車の運転といい、無茶苦茶で破天荒な判断、そして今は落ち着いて赤の他人の手当をして いる

兄妹揃つてそつくりだと内心思つていた

「あのジャケット、あんたの物だろう?」

舞白を救つてくれて助かつた、感謝する」

手当が終わると狡噺はゆつくりと立ち上がり

椅子に座る霜月に頭を下げる

「…別に、それに助けられたのは私

て いうか、あの子の行動が破天荒すぎて本当に大変だったわよ!」

腕を組むと狡噺に訴えかける

「先を考えずに突つ走る感じ…」

もう…私は一体どれだけ色んな人に振り回されて…」

常守に舞白に、そしてその兄に

思い当たる人物を次々と思い浮かべると頭を抱える

「俺の妹だからな、そりや無茶苦茶だろう？」

でも何だかんだアレでも考へてるんだぜ、本人は

「…………まあ、だから現に今私はここにいるんだけど…」

はあー、とため息を吐き

不意に胸ポケットに入れているものを見い出す

舞白のリボルバー銃、

懐から取り出すと狡噺は驚いたように目を見開く

「おい、それ…」

「これ、彼女のものです

返してあげてくれますか？」

霜月から銃を受け取ると

”まだ持っていたのか”と呟き、胸ポケットにしまう

「…………あの子、もう日本には戻つてこないの？」

霜月が不意に狡噺に問いかける

謎めいた質問に一瞬疑問を浮かべるも
微かに口元を緩ませる

「なんだ？振り回されても気になるのか？」

「べ、別にそういう事じゃなくて！」

「…さあな、俺もあいつが何を考えてるかなんて今じや想像がつかない」
ずつとこんなに危険な所に居続けるなんてどうかして…、なにか戻れない理由でも
あるの？」

「…さあな、俺もあいつが何を考えてるかなんて今じや想像がつかない」
2年ぶりに遭遇した妹

1人でこんな危険な地帯に潜り込んで、とんでもない目に合って、むしろそれを知り
たいのは兄も同じだつた

「まあ、あいつがもし戻るつてなればそれはそれで俺は何でもいい、あいつが決めるここと
だ

…もしそうなつたらあいつを頼むよ、友人として」

「は？なんで私が？」

何を言つているんだこの人は、と言いうような目を向ける

「あんたとはウマが合いそうだ
頼むぞー」

手をヒラヒラと振るうと

宣野座達の方へと向かう狡噺

「……何なのよ一体

本当にそつくり…」

不思議な兄妹、

そして霜月は微かに心配そうな表情を浮かべ医療用車両に目を向ける

衝突

???????????

「ギノ、……あとあんたは：」

「一係執行官の須郷徹平です」

「……ギノ、須郷執行官

妹を救つてくれて助かつた」

2人にも頭を下げる狡噺

宣野座はそんな狡噺を見ると無意識に襟元に手を伸ばす

「ツ……ぐ……！」

「宣野座執行官!?」

突然の事に驚く2人

遠くでその様子を見ていた霜月は止めに入ろうと思ったが、あえて口を出さず静かに見守る

「……狡噺…」

舞白を頼んだ、お前に託すと言つたはずだ、それが何だ？何でお前がついていない？何であんな目に！？」

「…………」

狡噺は抵抗することも無く、怒りに満ち溢れた様子の宜野座を、ただ静かに見据える「見ただろう？あの傷を、あの酷い状態を…

…お前、それでも兄か？

昔からお前は言つていたはずだ、舞白を守ると

それがあの結果か！？」

「宜野座執行官！」

「あんたは黙つてろ！」

いつも冷静沈着な宜野座からは想像できない荒れっぷりに須郷も霜月も驚きを隠せなかつた

今にでも殴りかかりそうな雰囲気に周りはソワソワとしていた

「あいつが決めたことだ、あいつの意思だ」

平然と無表情で口にする狡噺に更に苛立つ宜野座

「ここは日本じゃない、お前が一番わかってるだろ？」

ギリギリと怒りを滲ませる宜野座に

狡噺も黙つてはいられない

「俺が、何も考えずに

あいつを1人にしたと思うか？」

あいつと離れて過ごした2年間、片時も忘れたことなんかなかつたさ」

宜野座の腕を掴み眉を顰める

「2年前、俺はお前に言つたはずだ

あいつを信じてると、誤つた道は選択しないと

舞白は俺の妹だ、だがな、あいつの人生は俺が決めるものじやない

「そんなのただの御託だ！」

怒鳴る宜野座に狡噺も強く言い返す

「だつたらお前があいつに首輪をかけろ、それで一生縛り付けろ
だがな、それをあいつが望むと思うか？出来るのか？」

「……っ…」

「誰もそんなこと望まない

「…俺よりもお前がそれは分かつてはるはずだ、舞白もお前にはわかつて欲しいと心底思つてはるはずだ！」

ヒートアップする2人に霜月が思わず声をかけるも足が痛むと立ち上がりえないしかし現れた人物に気がつくと、霜月はそのまま座つたままため息を吐く

「ちよつと！あなた達何やつてるの！？」

「…狡噺さん、宜野座さん…」

花城フレデリカ、常守

そして六合塚と籬河も合流する

常守は何となく状況を察すと

2人を引き剥がす

「久しぶりに再会して、いきなり取つ組み合いはやめてください2人とも」

「…はあー…」

「…はあー…」

狡噺はタバコを取り出すと口に咥え火をつける
その様子を見た花城が狡噺の腕を掴む

「狡噺、待機を命じたはずよ

：それに、あなたに情報を流したのは誰かしら」

「無線内容を盗み聞きしてただけだ

なかなか苦戦してた様子だったからな」

「命令違反よ

あと勝手にうちの車両持ち出して、拳銃の果てには前線に突っ込むなんて、死人は出
なかつたものの何かあつたらどうするつもりだつたのかしら」

花城はあくまでも上司

自分勝手な行動をしたことを悪いと感じれば素直に口を開く

「：悪かった」

相変わらずぶつきらぼうな態度に花城はため息を漏らす

「まあ、幸いにも公安局の手助けができた事だし
今回は目を瞑つてあげるわ

：でも、次は庇わないわよ

自分の置かれている立場を弁えて行動なさい
課長の私でも出来ることには限度があるわ」

「了解だ…」

ふうー、と煙を吐き出すと反省しているのか分からない様子に、花城は呆れ顔を浮かべる

その瞬間、医療用車両の扉から外務省の医務官の男が慌てた様子で顔を出す

「狡噺捜査官！」

何やら物々しい雰囲気に狡噺もただならぬ何かを感じ取る

名前を呼ぶだけでその先を口にしない医務官

嫌な予感しかしない状況に手からタバコを落とすと無意識に体が動き出す

「…チツ……舞白…」

車両へ走り向かう狡噺

そして同じくして宜野座も後を追う

恐らく何を言つても止まらないであろう2人を周りの人物たちは心配そうに見つめていた

イマンシペイション

?????????????????????????????????

「…つ!!」

目を見開く舞白
目の前に広がるのは真っ白な空間
見覚えのある景色

ゆつくり体を起こすと傍らには本を読む男
そして広がる景観は、あの真っ白な海、色彩のない場所

柔らかな浜辺に寝そべっていた舞白は辺りを見回す

「……あれ？」

……確かにさつき……」

間違いなく目を覚ました、

そして宜野座に助けられた記憶

しかし今日の前に広がる光景は紛れもなくあつちの世界の入口

その様子に気づいた隣の男はくすくすと笑みを浮かべ舞白を見つめる

「戻ってきたね」

「……そつか、私今度こそ死……」

「いいや、君はまだ死んでない

だつて海の中に沈んでいないからね」

先程、確かに隣の男に腕を引かれ沈んでいたはず

一瞬戻った意識、色彩、

一度は目を覚ましたようだが、また生と死の狭間をさまっているようだつた

「君は運に恵まれているよ、羨ましい限りだ」

楓島、パタンと本を閉じれば同じように砂浜に座り込む遠くを見つめる舞白の様子を伺う

「一度あちら側に戻った後の死
やはり怖いかい？」

先程まで死ぬことなど恐れなかつた

むしろ浄化されるような、雁字搦めにされていた現実から全て解放されるような後悔することはあつたにしても所詮死んでしまえば消えてなくなる

「”神々が愛する人たちは若くして死ぬ”」

「”神の愛するものは天逝する”」

2人は目を合わせて偉人2人の同じ意味を持つ言葉を口にする
白髪の似た姿の2人

この白い世界に消えてしまいそうだつた

「シビュラがもし、その神様だつたら…」

「愛されていた？それはどうだろうか」

「まあ、私は生き返つたし…一瞬だけどね

むしろ嫌われるかも」

笑みを浮かべる舞白の横顔をじっと見つめ

相変わらず呑気で全く何を考えているのか分からぬ、そんな相手の肩にそつと手を触れる

「死は人生の終末ではない、生涯の完成”

まだ君の生涯は完成されていない、それに終末もまだ訪れていない」

「……？」

「君は兄に言つていたはずだ

”judgement”その正位置を求め君は一人で行動に出た

：まだその答えは見つかっていないだろう？」

審判、あの時のタロット占いの話しだと

「もし生涯の完成が成された時、

：僕が君をこちらの世界にまた引き摺り下ろしてあげよう」

楓島は肩に置いていた手を首に滑らせる

左首の跡に触ると、痛みに舞白はビクッと体を跳ねらせた

「ツ……」

響く鈍痛に眉を顰める

同時に何処からか声が聞こえてくる

「タロットカードの審判、正位置でも決して安堵してはいけない、あくまでも”審判”

どのような問い合わせに対しても、ある種の審判がなされる

それは君の望みがどうであれ、一定の結末を迎えるという意味」

そのまま舞白を引き寄せ笑みを零す

そしてそつと、耳打ちするのであつた

「僕はレフリー側に立つのは嫌いだが、君に対してなら悪くない、シビュラが君に審判
が下すくらいなら、僕がその役目をさせてもらうよ

それは、きみが正位置か逆位置かどちらかに、その生涯とやらを見出した時……」

体を離すと、瞳と瞳が重なり合う
特徴的な男の声が脳内に響く

「次、君に会う時は審判を下した時だろう
……また会おう、狡噺舞白」

男の顔が歪んでいく、薄れしていく
消えていく

そしてそつと手を伸ばした

・・・・・

再会

・・・・・

医療用専用車両の扉を開け、慌てた様子で駆け込む狡噺と宜野座
その先の手術台に乗せられているのは舞白

様々な機械や器具が辺りに置かれており、中の医療スタッフ2人が必死に医務官と何
かを話しているようだった

鳴り響くエラー音に逼迫する現場

「ダメです！バイタル崩れ続けてます！」

脈拍、呼吸、血圧、体温

全てが危険な状態だと狡噺と宜野座もモニターを見て理解する

「狡噺捜査官…あなたの妹だと聞いています
かなり危険な状況で…おそらくもう…」

た

「…待つてくれ、他にも何か出来るはずだろう？」

妹なら、きっと大丈夫だと

タフでいつも元気な姿しか見てきていない

確証はないが今までそうやって危険を搔い潜ってきた
しかし目の前で眠っているその姿は弱々しく、本当に普通の少女なのだと思い知らされる

「なんとか体の傷は塞ぎましたが緊急用の輸血がもう無くなっています！これだとさらに危険が……」

1人のスタッフが医務官に声をかける

宜野座はハッと目を見開くと前に立つ狡噺を押し退け舞白の元へ向かう

「血は俺から使ってくれ、舞白の血液型はO型だつたよな？狡噺」

狡噺は頷くとそれを確認した宜野座は上着を脱ぎ捨て、シャツの袖を捲り上げる

「俺もO型だ、必要な輸血量を抜き取れ」

「しかし……かなりの量を……」

「いいから抜け！」

宜野座の鋭い声にビクツと体を揺らし驚くも、スタッフは素直に応じ輸血の準備へと入つていた

宜野座のとつさの判断に救われた狡噺は舞白の傍らへと向かい何度も声をかける

「帰つてこい……逝くなよ舞白

……舞白……ツ……」

「…………」

冷たく、動かない手を強く握る

久しぶりに触れた妹の手は見た目は細いものの、長く紛争地帯に居た反動か掌はマメが複数できており、それを見ると狡噺は苦しそうに俯く

「…狡噺、…悔いても仕方ない、

舞白が選んだことなんだろう、信じるしかない」

宜野座の血液を直に器具で舞白に流し込んでいく

狡噺と同じく傍らの椅子に腰を下ろすと舞白に目を向ける

「…………逝くな、」

ただ眠っているように見える姿

2人はふと幼き頃の舞白の寝顔を重ねる
ずっと2人で守り続けてきたこの少女を
失う訳にはいかない

宣野座も手を握り、自分の頬へと当てる

「……今回くらい約束を守れ、舞白

：俺をいつまで待たせる気だ、何度裏切る気だ

”また会おう”：その言葉は嘘だつたのか

ピクリとも動く気配のない舞白を

ただただ見つめることしか出来なかつた

「汝ら世にありては艱難あり、されど雄々しかれ。」

???????????

伸ばした手を引き上げるのは
大好きな、2人の掌……

?????????????????????

の声を最後に色彩を取り戻す

「……ん……」

暖かい感触、瞼を持ち上げると
もうその場所は”あっち側”ではなかつた

「……おい……狡噺……」

懐かしい声、不意に左側に目を向けると宜野座の姿が
「嘘…………だろう?…………舞白!?’

ふわふわと歪む視線を右に向けると兄の姿

「……バイタル……安定してます!

心拍数基準値まで上昇! 体温も……
…………す……い…………」

スタッフが医務官に呼びかけると

医務官は異常なバイタル回復に目を見開く

輸血を初めて1時間半、回復しないバイタルに不安に駆られていたが急回復する数値

にその場にいた全員が驚いていた

狡噺は椅子から立ち上がり舞白の頬を両手で包み込む
「見えるか？聞こえるか？」

……舞白……」

やつと焦点も合うとパチパチと瞬きをする

「…………あれ……」

…………ここは？……

…………ツ……お兄……」

そのまま強く抱きしめる狡噺

その様子に舞白は小さく笑みを浮かべる

「…………よく戻ってきた」

「ただいま、お兄ちゃん……」

抱きしめられたまま、傍らで驚いた様子の宜野座に目を向けるといつもの笑みを零す

「…………約束、守ったでしょ、ノブ兄」

「舞白……」

そしてギュツと目を瞑ると抱きしめ続ける兄に手を回す

「ありがとう

……戻つて来れたよ」

????????????????
「孤独は懲り懲りだが、君の今後を傍観するのも悪くないね」
氣づけば外で繰り広げられていた激しい戦闘音が止んでいた

残された真っ白な砂浜の足跡が波に攫われ消えていく

· · · · ·

7章

安息

・・・・・

「この大馬鹿！無茶しすぎなのよ！

何度も死にかけるつもり!?」

「へへへつ」

シユビツと人差し指を突きつけ、

突きつけられた本人は頭を搔きながら笑いを零す

目を覚まして数時間、

持ち前の回復能力のお陰で、まだ歩くことは出来ないものの通常通り会話ができるまでに回復

専用車両に常守をはじめ、一係のメンバーが現れると早速霜月の怒号が飛んでいたそれに呑気に笑う舞白、その様子を皆が見守る

「舞白ちゃん、かなり危険な状態だつて聞いてたけど……」

傍らで心配そうに声をかける常守、

「痛いなつて思うのは左脚くらいで、あとは何ともないです
久しぶりの再会がこんなボロボロな姿で……それに迷惑もかけてしまつて本当にごめんなさい」

「……本当に、お兄さんと一緒に無茶するところは歳を重ねても変わらないのね」

六合塚も呆れたようにため息を零すも

相変わらずの様子に心の奥底では安堵していた

呑気に笑う姿にデータ上でしか舞白の事を知らなかつた雛河と須郷、そのギャップに
唖然としているのだった

「ていうか、あんたこの後どうするつもり？」

「この後？」

霜月は腕を組むと今後の舞白の行動について問いかける
何も考えてなさげな雰囲気に眉を顰ませる

「……うーん……どうしようかな…」

「まさか、こんな目にあつておいてまだ放浪する気?」

「どうだろう、まだ決めてないけど…」

とりあえずこの施設に囚われていた人のリストを確認したくて、それが本来の私の目的だつたから…」

開放された人々は外務省管轄のもと、保護されている

そもそもその目的は達成されたが、その中からとある人物達を探さなければならぬ

刹那、車両の扉が開くと花城が足を踏み入れる

目を覚ましている舞白を目にすると微妙に笑みを浮かべた

「拠点の制圧は完了よ、かなり骨が折れたけどね…」

すっかり銃声は止み、ぞろぞろと連行されていく傭兵と積み上がる死体の山
ほとんどが死を選択したらしく、屍の量はかなりの数だつた

「地下施設の一部は瓦礫に埋まつてゐし尚且つ火災で状況は最悪、証拠を掘り起こすの
にはまだ時間がかかりそうだわ」

「私たちが見つけた証拠書類、後ほど送りますね」

易々と外務省に証拠を手渡そうとする常守に霜月は眉を顰める

「ちよつと！先輩！そんな簡単に手渡すんですか？」

そもそも外務省は連携するとか言っていた癖に秘密裏に調査を進めていたのに……
「いいのよ、そもそも外務省の支援が無ければあの施設に入ることすらできなかつた
……今後はきちんとこちらにも報告してくださいますよね？花城さん」

「ええ、勿論よ」

なんとなくいけ好かない花城に対しても睨みつける霜月

あえて自分が手にしている証拠は隠しておこうと心に決めた

「？はこちらに任せてちようだい、まだ小さな拠点が点在してるみたい、私たちはその拠
点を完全に潰しに行くわ
⋮トランスペアレント社はそちらに任せます」

「了解です、花城さん」

利害の一一致

2人は話を済ませると、花城は舞白に目を向ける

「何にせよ、あなたが無茶苦茶な行動をしてくれたお陰でこつちは死人も出すことなく解決できそうよ、礼を言うわ」

「私も目標を達成することができました

：外務省さんも厚生省さんも、ありがとうございました」

素直な姿勢に笑みを浮かべる花城

そして両手のひらをパンつと合わせると

全員に目を向ける

「さてと…、とりあえず一件落着

お互い、やる事はさくっと終わらせてさっさと退散しましよう

「はい、私達も掴んだ情報をまとめて急いで帰国しましよう、霜月監視官の救出、トランスペアレント社の関連書類は手に入れましたから

……あとは都知事だけです」

常守はそう発すと、舞白に目を向ける

「花城さん、暫く彼女はそちらで見て頂いても宜しいでしようか？」

「そもそもそのつもりよ、この状態で日本に連れ帰らせる訳ないでしよう？」

「ありがとうございます」

…では、私達は帰国準備を

宜野座さんはしばらく休んでおいてください、輸血後は安静が必要ですから」

「そうさせてもらうよ」

舞白の傍らで点滴を注入されている宜野座

少し輸血の影響があつたのかぼんやりとしていた

「美佳ちゃんもその脚…」

「私は大丈夫です、先輩

これくらいの傷、大したことありませんから」

強気の姿勢を崩さない霜月は腕を組んだまま余裕の笑みを見せていた
その様子に狡噺が釘を刺すように言葉を発す

「あなたの傷そこそこ深かつたぞ

浅腓骨神経の近くを抉つて、無理はするな」

「（ご）忠告どうも、外務省の狡噺慎也さん」

兄妹揃つてお節介、だなんて思いながら舞白に目を向ける

「また後で、宜野座さんを呼びに来るついでにあんたにも会いに来てあげるわよ」

「へへへ、ありがとう、美佳ちゃん」

美佳ちゃん、と呼ばれると満更でも無い様子で
照れ隠ししつつも再び指を差す

「なつ、馴れ馴れしく呼ばないてくれる？」

私、刑事課のエースなんだから」

同じ境遇の2人、たった数時間だけしか関わりはなかつたものの何か2人の間に芽生
えたものがあった

人柄も性格も正反対の2人

だが良好な関係性は周りの人達に十分感じられているようだつた

・・・・・

ずっとそばに

・・・・・

花城と狡噺は拠点制圧の後始末へ
常守達は帰国準備を行つていた

車両に残つていたのは舞白と宜野座のみ
シーアンを最後に約2年ぶりの再会だつた

?簡易的な電動ベッドに体を預けている舞白は背もたれの高さを更に少し上昇させる
と宜野座に向き合う
傍らの椅子に腰をかけ、残り半分ほどになつた点滴パックに目を向ける宜野座、徐々

に調子が戻っていく感覺に安堵の笑みを浮かべた

そして、宜野座も舞白へと向き合う

「ノブ兄、助けてくれてありがとう

⋮あと、ごめんなさい」

先に口を開いたのは舞白だった

宜野座が笑みを浮かべているのとは反対に、申し訳なさげに表情を歪ませ謝罪を述べる

「相変わらずの無茶苦茶なお前にまた振り回されたが⋮生きていればそれでいい、謝ることは無い

こちらこそ、霜月が世話になつた」

なんとなく気まずさを感じてしまう2人はなかなか会話が進まない

もつと話したいことがあつたはずなのに、お互い顔を合わせるとどうしても詰まつてしまふ

しまう

あんなに幼かつたはずの舞白も22歳

自分も歳をとるわけだ、となぜか生々しい事が頭を過る宜野座

ずっと会いたかった、探していた、そんな相手を、大人びた姿の相手を目の前にし思わずため息を漏らしてしまう

その様子を見た舞白は困ったような笑みを浮かべた

「……本当に：昔からノブ兄には迷惑ばかり、私つて成長しないよね」
ぎゅっとシーツを握りしめる

自分がどれだけ無茶苦茶な事をしていたのか、今更ながらに反省していた

「迷惑なんてかけられた覚えはない、俺が自分の意思でやつてきた事だ
そう自負するんじゃない、お前らしくないぞ？」

「…………」

「……お前は立派に成長してる

こんな危険な地域にたつた1人で、人を救おうとして立ち向かつた

…………だが、」

宜野座は俯く舞白を真っ直ぐに見つめる

「一人で抱えるな、

2年前に俺はそういうたはずだ、そこは成長していないな全く」

「……へへへつ……」

真っ直ぐに見つめてくる宣野座に舞白も漸く目を向ける
やつと、やつと再会できた、大好きな人
もう会えないかも、なんて考えていた相手が目の前にいる
片時も忘れなかつた、忘れられなかつた

「……会いたかつた、

ずっと、もう会えないかもって、考えるだけで……」

刹那、腕の中につつぱりと収まる舞白

宣野座は舞白の細い体を包み込むように覆う

その体は2年前よりさらに細くなっている気がした

「もう決して離さない、絶対に、

お前が何を言おうと、逃げようとも、」

「逃げないよ、

もう私は独りで放浪するのは懲り懲り」

舞白もそつと手を回す

昔から変わらない優しい抱擁を懐かしくかんじた

「お前のことを見つめていたよ」

「……何、その言い回し……」

変わらないなあ、相変わらず……」

ストレートに口にしない宣野座に思わず笑みを零す

「ずっとそばに居てくれる」

お前の理想の王子とやらに俺がなつてやつても構わない」

「…大昔の私の恥ずかしい発言をそのまま言うのはやめてよ

ていうか覚えてる事が恐ろしい……」

もうっ！と恥ずかしそうに体を引き離すと

互いに笑みを零し合う

???????????

その様子を微かに開いているドアから見ていた人物は薄く笑みを浮かべ、かすかに安

堵していた

光芒の先に

・・・・・

「お久しぶりですね、狡噺さん

またこんな再会の仕方なんて……」

帰国準備を終えた常守

ふと医療用専用車両の外でタバコを吸っていた狡噺に気づくとゆっくり歩み寄る
車両内から微かに舞白と宜野座の笑い声が聞こえてくると、狡噺と常守も目を合わせ
クスクスと笑みを浮かべていた

「元気そうで何よりだ、監視官」

「…まさか外務省の捜査官として行動していたなんてビックリしましたよ」

「色々あつてな」

「相変わらずそうで安心しました」

狡噺の向かいに立つと昔から変わらない姿に安堵する

形はどうであれ、また狡噺兄妹にこうして再会することができて内心喜んでいた

「これからどうするつもりですか？」

外務省……、日本に戻ってくるんですね？」

口から煙を吐き出しタバコを足元に棄てると常守に目を向け口を開く

「勿論そのつもりだ

日本も開国政策を始めて、恐らく細々とした事件も増える

特に今回のような、日本の企業が弱い立場の外国人を利用する、なんてケースを見過ごす訳にはいかない

狡噺らしい言葉に口角を緩める常守

彼も彼なりに何か出来ることを、自分自身がやるべき事を再度見つけることが出来たのだろう

「それに潜在犯としての制限は撤廃

ドミネーターでもサイコパスを読み取るには許可が必要だ

：もうアンタに、パラライザーで撃たれることもないだろう」

最後の言葉にブクツと頬を膨らませると狡噺は笑みを浮かべていた

「俺も”成すべきを成す”

シリュラの言葉を引用したくはなかつたが…」

「…また、日本に戻つてくる

正直嬉しいですよ私」

刹那、再び舞白の声が聞こえると

気になつていたことを口にする

「舞白ちゃんはどうするつもりですか？」

「…さすがに、もう単独行動はもう容認しないですよね？」

「それは本人も分かつてゐるはずだ、もう無茶はしないだろう」

狡噺はふと、常守が携えていたドミネーターに目を向ける

舞白が日本に戻れない理由、未だにそれはわからない

でも常守なら、なにかその理由を知つてゐるのではないかとずつと考えていた

「とにかく、俺はあいつの傍にいるよ

それにこの6年で状況も大きく変わつた、あいつ自身も…」

舞白の背後に、面影、微かに感じるあの人物の影

シリュラをも惑わせたあの男の存在

底知れない何かを感じる

それだけは変わることは無かつた

「……監視官……あいつは……」

狡噺がさらに言葉を続けようとした瞬間、

2人に近づくひとつの影

「狡噺、やる事が終わつたからつてこんな所でなにしてるの」

サクッと仕事を終えどこにも姿が見えないと

花城は狡噺を探していた

「休憩だ、

…あと様子を見に来たんだが……」

車両を見据えるも、その必要は無さそうだと分かれば

フツと笑みを浮かべ花城に視線を向ける

「その必要はなさそうね

あんな重篤な状態から、本當によくあそこまで回復したわ」

花城は2人へ歩み寄ると

”ちょうど良かった”と呟く

そしてデバイスに舞白の過去のＩＤ情報を映し出す

「常守さん
???????????????

「どういう事だ？」
狡噺舞白を外務省に譲つて貰えないかしら？」

突然の花城の言葉に驚きを隠せない狡噺

”預かる”という意味とは違う、”譲つて”という言葉

「外務省に準軍事的な活動を前提とした新部隊を結成する計画があります、彼女は即戦力になる

：頭の回転の速さ、あのタフな体、複数の言語も操れるみたいだし外務省としてはどうしても欲しい人材よ」

花城は閲覧制限のある舞白の経歴データを

外務省の権限で閲覧していた

そこに明記されている6年前の記録

”厚生省特別機関の保護対象者”

あの子には何かがある、花城も分かつていた
「」のまま厚生省に引き渡されるくらいなら、うちで狡噺のように働いてもらいたいの

勿論、狡噺舞白本人が許諾するのであれば……」

常守は考えていた

實際逃亡犯として追放されたような狡噺自体も外務省に所属する事によりシステムの干渉から免れている

シビュラ側も、舞白のような免罪体質者をあえて外務省に入れる事はもしかすると利害の一致になるのでは無いかと

してシーアンでのハン議長に扮していたシビュラシステムの言葉を思い出す

???君が今後どのように生き残つて、どのようにこの世界にその存在意義を齋すのかとても興味深い

また暫く、様子を見ようじゃないか

それもそれで面白そうだ”

間違ひなく、彼らはそう言つた

そして舞白もその言葉を理解した上で問いかけていた

”レフエリー側としての役割以外で

この世界に役に立てる証明出来れば

取り込まれる以外に、選択肢は与えられる

その解釈で間違ってない?

卷之二十一

真行していふ。 犬鳴舞白

2

さすがに彼らも裏切るような、嘘をつくような薄情なことはしないはず
そしてここまで舞白の行動を考えてみる

もしかすると証明するために、彼女自身はここまで無茶苦茶をしたのでは？と
彼女自身が”成すべきを成す”それを行つてきたのであれば……

「監視官？」

考え込んでいた様子の常守に狡噺は声をかけ方を揺らす

ハツと我に返る常守は
花城へと目を向けた

「本人の意思を必ず尊重してあげてください
こちら側としてはお任せして問題ないです
……万が一、彼女がその要求を拒んだ場合
身柄は私が責任をもつて守ります」

「……話が早くて助かつたわ、常守さん」

「いえ、どちらにせよ

花城さんの元に居るのであれば安心ですから」

花城と常守はお互い見合うと笑みを浮かべ握手を交わす
その様子を静かに狡噺は見守っていた
同時にようやく舞白と安息の地を見つけたと
内心ホツと胸を撫で下ろす

・
・
・
・
・
・
・
・

芽生えた友情

・・・・・

帰国準備を終えると

小走りで霜月は医療用専用車両へと向かう

扉のロックを解除し、中をのぞき込むと

点滴を終えた宜野座は服を整え、既に発つ用意ができていたようだつた

「宜野座さん、そろそろ行きますよ」

口元に手を添えて呼びかける霜月

”分かつた、すぐに向かう”と口にすると

傍らで笑みを浮かべる舞白の頭を撫で、名残惜しそうに離れていく

宜野座の表情、

この前舞白の話をした時の儂げな表情と同じ

2人の関係性が見えてくると霜月は両手を組み、呆れたような笑みを浮かべるとため

息を漏らす

「じゃあ、またな舞白」

「うん、またね」

案外サクッと別れを済ませる2人

おそらく、もう無茶はしないだろうと

それに外務省が一旦身元の保護を行うという事実に、宜野座は安堵している様子だつ

た

「…私も少し彼女と話したら行きますから

伝えておいてください」

「了解だ」

宜野座の背中を見送る2人

そして霜月も最後に会つておこうと舞白の傍らへと歩みを進める

呑気に笑みを浮かべる舞白に再び呆れたようにため息を吐く

その様子を見た舞白も、また微笑み続ける

「とりあえず、ここでの事はあんたに感謝してる

お陰で調査も進んだし、私も何とか生き延びれた

……ありがとう」

腕を組んだまま、ふんつと顔を逸らせながらも礼を述べる霜月に舞白は嬉しそうに笑みを向けた

「こちらこそ、ありがとう、美佳ちゃん」

”美佳ちゃん”と呼ばれることにもう何を言つても聞かないだろうと諦めるとそのまま傍らの椅子に腰をかけ、舞白をじっと見つめる

「……あんた……、

……舞白は、日本に戻つてくるの？」

「うん、

どんな形であれ、戻るつもり

……でも色相ヤバすぎて即矯正施設送りだつたら嫌だなあ」

真面目に答えているのか答えていないのかさっぱり掴めない様子に再びため息を漏らす

「ちよつとは周りのことも考えなさいよ

私はまだ会つて少ししか経つてないから、舞白の事なんて全然知らないし正直どうでもいい」

「…………」

「でも、私が見てきた限り

皆があんた達、兄妹を心配してた

：：とくに宜野座さんなんて閲覧制限かかつてる情報をなんとか閲覧しようとしてたり、監視官の私に相談を持ちかけたこともあつたのよ」

”ここだけの話だけど”と付け加え、舞白を鋭い目付きで見据える

「いくら強くても、賢くても、色相美人でも、そんなの関係ない

：：いい？そんなあんたをみんなが心配していたって事、絶対忘れないで」

ピシッと指を刺され、霜月から意表を突かれると呑気な笑みは消え去り、眉を下げ

困ったような表情に

確かにその通りだつた、自由奔放に放浪をしていたが結局みんなを心配させていた

その事実に何も反論するつもりは無かつた

「…とにかく、大人しくしなさいよ

これ以上、宜野座さんを困らせないこと、いい？

任務に支障が出たら困るの！」

「はい、約束します」

「分かればいいのよ、分かれば」

そう口にすると霜月から差し出される手

突然の行動に舞白はただただその手を見つめる

「……え？」

「え？・じやないわよ！」

「こういう時は素直に手を出しなさい！」

「あ、そういう事ね

…こういうこと、あまり好きじやないのかなって思つてた」

舞白も手を差し出すと2人は握手を交わす

霜月はここまで心許せるような、話をぶつけても嫌な顔一つしない舞白に対しても率直に好感を抱いていた

同時に舞白も、ぶつきらぼうにも冷たくも感じていたが、霜月の一つ一つの発言や表情を見ると嫌いになるような相手ではなかつた

「日本に帰つたら一緒にお茶でもしようね、美佳ちゃん？」

「私は監視官の職務が忙しいから、

……たまにだつたら良いわよ』

その言葉にへへへつと再び天真爛漫な笑みを浮かべる

???????????

「俺の言つた通りだつたろう、霜月』

車両の外で会話を微かに聞いていた宜野座は嬉しそうに笑みを浮かべると、待機しているへりへと向かうのであつた

爾今の歯車

・ · · · · ·

帰国直前、舞白の元に常守の姿があつた
暫く談笑をし、常守はあることを口にする

「もう、何も恐れることは無いんじやないかな、舞白ちゃん」

帰国するまでにどうしても2人つきりで話したかつた常守
シー・アンで彼女がなぜここまで姿を消さなければならない理由があつたのか知つた
時から、舞白の事を片時も忘れたことは無い

彼女は免罪体質者に間違はない

ただ、あの時のシー・アンでの彼女の色相はWhiteではなくPale

white

と確かに計測されていた

シビュラは彼女に微かな希望を与えたのか、それともただ単に彼女の色相が色彩を取り戻したのか、理由は分からなかつた

今、シビュラの統治下では無いこの場でサイコパスを計測することはできない、もし外務省に所属するとなるならば今後簡単にサイコパスを計測することも不可だ

「確証がある訳じゃないんだけど…」

「今の舞白ちゃんは何か違う気がする、この2年間で何か大きく変わった気がするの…自分だと分からないんですね、あれから6年、シーアンからだと2年…
ただ一心不乱に駆け抜けてきただけで…」

シーアンでのハン議長と常守の会話

常守はシビュラシステムの真実、そして舞白が免罪体質者だと言う事実を知っている
そして舞白も、その事実を知っていた

「成すべき者が為すべきを為す

…私はそのつもりでここまでやつてきました、今思えば本当に無茶苦茶ばかり…」

自分の生きる意味をこの先生かされるためにも何でも出来ることはやつてきた
「でもさつき…美佳ちゃん…」

…霜月監視官に言われたんです、

周りに心配をかけるなつて

その通りだと思いまし

先程の一端を思い出しクスクスと笑う

「もう一人で駆け抜けるのはやめます、

”人間は誰でも、独りで生きなければならぬと同時に、みんなと生きなければいけ
ない”

…きつとその通り、何か自分の中で見いだせることができれば、私はきつと自分のま
までいられるし、この社会のために必要だとシビュラにも認められるかもしません」
相変わらずの博学卓識な彼女の発言に

楳島の姿を重ねてしまふ

そして目の前にいる女性は6年前の少女ではまるでなかつた

「皆、舞白ちゃんが戻つてくるのを待つてゐるわ

どんな形であれ、今という瞬間を生きていてくれればそれでいいの」

”ね?”とニッコリと舞白に笑みを向けると

舞白もつられよう満面の笑みを浮かべる

「あと、美佳ちゃんとはこれからも仲良くして欲しいな
⋮舞白ちゃんみたいな存在が近くにいなくて、同じ境遇同士とてもいい関係になると
思うわ」

「勿論です

私も友人は少ないし、

それに彼女、とても面白くて⋮」

刹那、扉のロックが解除されると2人は視線を扉へと向ける
現れたのは狡噺だつた

「監視官、そろそろ出発だと」
デバイスの時計を確認すると

”話しつきすぎちやつた”と咳くと椅子から腰を持ち上げる

「また会いましょう、舞白ちゃん」

常守の優しい笑顔

初めて出会いから6年、

最初の事件の後、怪我を負った舞白の元へ毎日のように病院へ足繁く通つてくれた
り、兄の様子を教えてくれたり、ある意味歳の近い姉のようだつた

シーアンでもまるで姉妹のようにくだらない話で盛り上がり上がつたり、自らの悩みを打ち
明けることも、

そしてシビュラシステムと対峙しあつた、その時も常守がそばに居てくれた
唯一、舞白の真実を知る者

その存在はとても大きなものだつた

「はい、必ず

どうかお元氣で…」

手をお互い振り合い、狡噺と共に車両から出していく

?????????????????????

ヘリのエンジン音、そしてローターブレードによる強い風が辺りを巻き込む
一係の執行官たちがヘリへ乗り込むと
常守と霜月は外に残り目の前の2人を見据える

「それではこちらの事後、よろしくお願ひします」

「お任せ下さい」

：厚生省さんはこれからが大変だと思うけど

よろしく頼むわよ、常守監視官、霜月監視官】

なんとなく上から目線な物言いに微かに眉を顰める霜月

「心配無用です、自分たちの縄張りくらい管理しますから

…ぐれぐれも次回からは外務省さんも”報連相”をきちんと実施してくださいね！」

相変わらずの霜月に呆れたような笑みを隣で浮かべる常守
そして視線を花城から狡噺へと向ける

「狡噺さん、どうか舞白さんをよろしくお願ひします」

「了解だ」

フツと狡噺も笑みを零す

「…では、失礼いたします」

常守と霜月は敬礼すると
ヘリへと乗り込んでいく

花城はヘリ内で待機していた須郷と目が合うと
微かに口角を緩ませる

以前、新部隊へのスカウトを断つた須郷にとつて、とても気まずい瞬間だつた

須郷は戸惑つたような表情を一瞬浮かべるも軽く会釈をし、ヘリは上空へと昇つて姿
を消す

花城と狡噺は姿が見えなくなるまで目を追い、ふと花城が微かに笑みを浮かべている
姿を不思議に思うと隣の狡噺は声をかけた

「何か、いい事でも思いついたのか？」

狡噺の問いかけに答えようと視線を向ける

「新部隊の面子、どうなるか楽しみね」

何かを企んでいるような、喜びを孕んでいるような表情をすると狡噺の肩を軽く叩き

歩き出す

・・・・・・・・・

伝染する色

・・・・・

「…戻つたら即セラピー受けないと…」

ヘリが飛び立つてから数時間後、ひたすら頭を抱え続ける人物

凄惨な現場に、無茶苦茶な自分の行動、

明らかに色相悪化をしているだろうと怯えていたのは霜月

あと少しでシビュラの電波網に突入する為、そこで直ぐに自分のサイコパスがどのようになつているか分かるはず

しかし同時にその事実を知ることを恐れ怯えていた

その様子を心配する一係の面々

隣に座っていた宜野座がフオローを入れようと、肩を落とし、ダラリと前屈みになつて いる霜月の背中を叩く

「そう思い詰めるな

余計悪化するぞ」

「……日本に戻つてからも続けて捜査はあるし

：まずは都知事の身柄の確保、

先輩たちが抑えたあの地下の調査に密入国者達の対処、トランスペアレント製薬会社の内部強制捜査、：頭が痛い：」

何を言つても無駄だなと分かれば宜野座は向かいに座る六合塚に目を向けると、六合塚は微かに笑みを浮かべ霜月の頭へ手を伸ばす

ぽんぽんと以前も感じた事のある優しい感覚にそつと頭を上げる霜月
「大丈夫よ、あなたは昔より強くなつてる

身体だけじゃなく、精神も…

現にあなたは、過酷なあの場所から生き残つてゐる

強靭な精神がなければ達成できなかつた：」

六合塚の穏やかな声色にホツと胸を撫で下ろす

「六合塚さんの言う通りよ

：美佳ちゃんは任務をやり遂げたの、

しつかりあの地下施設の証拠写真までちゃんと残してくれてるし…」

外務省より先に手に入れた証拠

今までの彼女であれば、自分の身を優先し、マニュアル通りのことしか出来なかつたはず

自分の身も、そして舞白の事も、捕らわれていた人々を救つた事も、守りきつたのは紛れもなく霜月自身の力だつた

「そ、…そうですよ

…霜月監視官、すごい…」

「自分もそう思います

あの環境下の中で、よくやり切つたと…」

雛河と須郷も霜月の行動を称えるような発言をすれば、徐々に調子を取り戻していく様子の霜月

「……皆さん、ありがとうございます」

ふう…と自分自身を落ち着かせようとため息を吐き深く息を吸う

「よくやつたさ、霜月」

再び宜野座がトントンと背中を叩くと霜月はじと一つとした目つきで宜野座を見据

える

「…そうですよ、宜野座さん

感謝してくださいね？」

あなたと狡噺舞白を助けたのは紛れもなく私と須郷さんの力ですからね？私が少しでも気づくのに遅れて、もし手を引くのが遅かつたら…」

ガミガミと延々と文句を言う霜月に

まるで昔の自分を見ているようだと宜野座はクスクスと笑っていた

『まもなく、日本領空区域に突入します』

刹那、ヘリ内にてアナウンスが流れると

全員が携えていたドミネーターが反応する

デバイスも日本の電波網により通常通り使用できるようになると、即、霜月は常守に目を向ける

「先輩！私のサイコパス：計測してください」

「勿論よ」

常守はデバイスにて色相チエツカーを行い、霜月のサイコパスを確認する
その結果をドキドキと緊張した様子で待ち構える

「……ツ……」

結果を目にした常守の顔が驚いたような表情を浮かべると、霜月は内心何かよからぬ
結果だつたのだろうと肩を落とす

「……やつぱり、即セラピー……」

「ううん、美佳ちゃん、そうじやないの
：判定は”ラベンダーハー”

それに数値も問題ないわ」

「……へ……」

予想外の色相に声を失う

あんな状況下の中での中で色相なんて保てるはずなんてない
むしろ少し好転していた事に驚きを隠せない

「な、…なんで…」

「再び、今度は自分のデバイスで色相チエックをするも結果は同じ”lavender”確かにそう表示されていた

「私…メンタル薬も既に無くなつてたし
…なんで…逆に怖いんですけど…」

頭を抱える霜月にクスクスと笑みを向ければ
常守はある事を口にした

「舞白ちゃん、あの子から何かいい影響でもあつたんじやないのかな？」

「…伝染？」

宜野座が常守の言葉に反応すると六合塚が口を開く

「そもそも色相は心理状態が健全だと澄んでいる色、ストレス過多や悲観的な思考によつて悪化すると濁つていく…」

その”思考”が鍵なんです

…もしかすると舞白ちゃんと過ごした事や会話の中で自然とその思考伝染して、健全な方へ無意識に調整されたんじやないのかしら？」

「確かに、狡噺舞白はほとんど色相も犯罪係数も全てにおいてゼロ…まつしろだと耳にしたことがあります」

続けて須郷もそう口にすると

常守は小さく頷く

「美佳ちゃんは、舞白ちゃんと何だかんだ相性がいいって事ね」

「…は、…はあ…？」

そんなことがあるわけがないなんて思いながらも、確かに舞白と話していると不思議と浄化されるような気分になっていた

確かにその話は有り得る事だと薄々感じる

「とりあえず、美佳ちゃんの色相も心配なかつたことだし…
私たちは私たちの成すべきことをやつていきましょう」

両手をパチンッと合わせ全員に目を向ける常守

一係にとつてはここからが正念場

「美佳ちゃん、あなたは脚も怪我をしている事だし絶対無茶は…」

「大丈夫です、先輩
…だつて、私…」

グツと拳を握り突き上げる仕草をする

「私、強いんで」

舞白と同じことを口にする霜月は

どことなく以前よりも明らかに強くなっている様子だった
その姿からは舞白の面影も感じられていた

・・・・・・・・・

私にしかできないこと

・・・・・

常守達がここを発つて数時間後、

?の収容施設を完全に抑えた外務省

地下の火災も鎮火させ、特殊部隊が中への捜査を行う中

花城の姿は医療用車両に

扉のロックは開かれた状態で外には密かに狡噺の姿があつた

「私が外務省に?」

花城の突然の言葉に目を丸くする舞白

今後のこととは特に決めていなかつたが、まさか外務省側から声がかかるとは予想外すぎて驚きを隠せない

「外務省に新設される特殊部隊」

今のところあなたのお兄さんが加わる予定よ」

「…でも私、一度シビュラにも職能適性を全部空白にされた身ですし…」
両手をフリフリと前で交差させると

戸惑つた様子の舞白に笑みを浮かべる

「私はあなたのその腕を買つてるの

シビュラなんて関係ないわ、そんなの私が何とかするわよ」

逃亡犯の兄を外務省に所属させることも可能にした花城

確かに何とかなるんだろうとは考えてはいたが、いきなりの外務省の誘いにまだ戸惑つて いる様子だつた

「いい？あなたの身に何があつたのか分からぬいけど

…このまま日本に、何も後ろ盾が無いまま戻るのは危険だと思うわ」

花城はデバイスに舞白のＩＤ画面を映し出すと相手に翳す

”厚生省特別機関の保護対象者”

その画面を見て眉を顰めると画面から目を逸らす

「身体能力、洞察力、そしてその頭脳、あらゆる能力をもつて考えてもあなたは外務省に十分所属する能力はあるの

ならば、大いにそれを利用しなさい

日本に戻りたいんでしょう？」

デバイスの画面を閉じれば花城は舞白に目を向ける

「正直全くリスクがゼロとは言えないけど

最悪、あなたの身が拘束されるなんてことがあれば、外務省管轄で海外の拠点にあなたを移すことも可能よ？」

…どう？ 悪くない条件じゃないかしら？」

最後の一手と言わんばかりの発言をすると舞白も再び視線を花城へ向ける

「女性捜査官は貴重なの

肉体的にも精神的にも強靭でなければ務まらない

今のところあなたしか女性捜査官に相応しい人間には会っていない、こちらとしても

どうしても欲しい人材なんだけどね？」

”あなたしか”その言葉にピンとくると

黙っていた舞白が口を開く

「……成しうるもののが成すべきを成す…」

私はそれに相応しいでしようか…？」

「何度も言えば分かるのよ、だから私はあなたをスカウトしてるの」

”さあ、どうするの?”と腕を組みじつと相手を見据える
しばらく舞白は何かを考えるかのように目を伏せる

明らかに好条件すぎる内容

そして自分にしかできないこと、成せること

ふと脳裏に、”審判”のタロットカードを思い浮かべる
カードの番号は20番”審判”

とらわれていた過去や物事を手放し、新しい価値観や新たな気づきを得るなど、大きな目覚めのタイミングを伝えることを意味する。

覚醒、復活、再生、救済や、気づきによる解放、望み通りの結果などを象徴：
そして次番の21番”世界”

”世界”は、完璧さや完全な調和、幸福や喜びの象徴

”審判”で精神的な目覚めを経験し、覚醒したことによつて、世界では高次元へと進むことができる

潜在意識と顕在意識が統合され、究極のフィナーレを迎える事を意味していた

0番の愚者から始まるカード
まるでストーリーのように重ねられていくカードには少なくとも自分の道標が記さ
れていると考えていた

”生涯の完成”

”一定の結果”

即ちフィナーレ

あの白浜で出会った楳島の言葉

そつと左の首元に触れ、ギュッと瞑つていた瞼を持ち上げる

「よろしくお願ひします

精一杯、私に出来ることをさせて頂きます」

「…OK

よろしくね、舞白」

花城が手を差し出すと舞白はその手を握りしめ握手を交わす

会話の一端を全て聞いていた狡噺はかすかに笑みを浮かべると、タバコを足元に棄て、車両から離れていく

やつと互いの行先が揃つたと安心する兄の気持ちは久方振りに高揚感を纏つていた

・・・・・

8章

秘められた愉悦

2118年 3月初旬

東京

凍てつく寒さも落ち着き、柔らかな春が訪れようとしていたその時
日本国内では衝撃的な事件が騒がれていた

連日報道されているニュース番組

休憩中の霜月は好物のタピオカマンゴージュースを片手に公安局食堂にて傍観して
いた

『大手製薬会社のトランスペアレント社を業務停止命令…』

『… 有栖川 吉富東京都知事を重要参考人として…』

『密入国者…』

若干の報道規制があつたものの何とか黒幕だつた人物達を逮捕することに成功同時に開国に躍進的だつた肯定党は再び低迷することにそして日本国民も徐々に開国について否定的な考え方を持つ人達が増えていたテレビ画面にボーッとした目線を向けていると、それを遮るように目の前に、ある人物が現れ向かい合わせに座る

「なんて顔してるんだ、霜月」

コーヒーを片手に現れたのは宜野座だつた

連日激務だつた一係にもやつと安息が訪れ、久しぶりにゆっくり休憩を取れる状況にもなつていた

霜月はタピオカをひと口すすると

はあー…と深いため息をこぼす

「やーっと…一段落…

正直、この前まで死にかけていたのがウソみたいで…

「確かに、あんなに忙しかったのがウソみたいだな」

お互い、つい先日前死にかけていた身

他国で凄惨なことがあつた事は日本では報道規制が敷かれており、ますますあの時の記憶が薄れていくような感覚に気味悪さを憶えていた

「そういえば一宮の息子の一宮健太郎について…」

「隔離施設への移送が決まつたそうだ」

あの地下施設で父親の手によつて隠されていた子供

矯正施設にてセラピーやカウンセリングが施されたが好転する可能性は極めて低いと判断され、隔離施設へと移送されることに

「地下施設に何年も隠されていた潜在犯認定されていた子供、でしたよね？」

「ああそりうだ

父親は息子を守りたいが為に何年も地下に隠し続けた

：早くに矯正施設でそれなりの処置をしていればサイコパスが好転する可能性があつたかもしれないのに、その可能性をその父親自体が奪つてしまつていた…

「バカね、理解できないわ」

一喝する霜月に微かに口角を緩めるも

宜野座はなんとなくその気持ちがわかる気がした

「まあ、確かに哀れだとは思うが

気持ちが分からんでもないさ

：先が見えないまま離れ離れになるくらいならいつその事、傍に隠しておく、その気持ちがな」

「…………そんな事に共感なんてできるから執行官なんですよ」

腕を組み氣味悪げなことを言う宜野座に眉を顰ませる霜月

親の歪んだ考えなのか、本当の愛情なのか、それは勿論本人にしか分からない
だが結局、彼らは自分たち自身で首を絞める事を行つていたのだつた

「それで？どうにか潜在犯認定された人間でもサイコパスが好転するような、色相がクリアに永遠に保てるような薬を開発するために、一宮祥太郎は会社の実権を握り、密かに人体を使って薬を開発してた：」

「あの赤い薬は直接脳神経を破壊する恐れがあつた強力な薬だ

：実際、あれを飲まされたヤツらは全員廃人化し、まともに精神も保てなくなる」

だから、廃棄区画で見つかった密入国者たちは悲惨な運命を辿ることになつてしまつ

た

ひとりの人間の歪んだ考え、歪んだ愛情により起こされた事件

そしてそれに利用された外国人達

全てが血に濡れた鎧びた鎖で繋がれていたのだつた

「新疆ウイグル自治区については刑事課の人間以外には箇口令が敷かれてる、それ程この国は国外情勢を晒したくないんだろう」

「…あんな悲惨な国の事なんて報道したらエリアストレス上昇しまくつて矯正施設は即パンクでしようね？」

私達もまた眠れない日々が続く…

もうそんなの御免よ、私は

ふと、外の景色に目を移す霜月

あの国と想像がつかないくらい平和な景色

危険な地帯に、自分と同じ歳の舞白が居たなんて考えると改めて自分の置かれている状況が幸せな事なんだと実感していた

「宜野座さん」

「なんだ？」

外の景色から再び宜野座へと視線を向ける

何かうずうずと言いたげな霜月を不思議そうに見つめていた

「…実は私、見てたんです

舞白と宜野座さんがあの車両で話しているところ」

刹那、勢いよくコーヒーを飲みながら咳き込む宜野座
予想外すぎる発言に動搖している様子だつた
その姿に霜月は盛大なため息を吐く

「な…、霜月……」

「別に！ 盗み聞きしようとした訳じやないですか！
ちょっと用事があつて、入ろうと思つたら扉が開いてて……」

宜野座は頭を抱えるように手で顔を隠す

執行官としていつも冷静沈着な、キリツとしているような様子からは想像がつかない
程、舞白に対して温良だつた姿を目にしていた霜月

そして同時に2人は想い合つていた事実に、正直安堵しているのは事実だつた

「舞白と宜野座さんについて話した時

宜野座さんと舞白について話した時

…2人とも同じような表情でしたから

最初から2人はそういう関係だつたんだなつて分かつてましたよ」

決していつもの様に罵る様な発言ではなく、穏やかな口調で声色で話す霜月にゆつく
りと視線を戻す

霜月は呆れたような、困ったような、喜んでいるような…様々な気持ちが入り組んだ
ような表情を浮かべていた

「…霜月…」

宜野座がその様子をじっと見ると

ハツと我に返つたような表情を浮かべた霜月は勢いよく指を指す

「ど…とにかく！」

うつつを抜かさず、成すべきことを成してくださいね！」

「当たり前だ…

：何故、霜月がそんなに恥ずかしそうな顔をしているのかがよく分からぬが…」

2人のあの光景が脳裏から離れず、寧ろ再び鮮明に頭に浮かぶと照れ隠しするように
声を上げる

「宜野座さんもあんな顔するんですね？それにギザな事も口にして…」

「おい！それは言うな！絶対！」

「あの口煩い宜野座さんが…」

やけに席が騒がしいと周りの人の視線が一気に2人に注がれると同じく休憩で訪れた人物にその様子を止められる

「ちよつと！2人とも、何騒いでるんですか！？」

「常守！」

「先輩！」

常守に一喝されるも

仲良さげな2人の雰囲気を微かに喜んでいる常守だった

・・・・・・・・・・・・・・

希望の烙印

・・・・・

2118年 4月下旬 新疆ウイグル自治区

まだ凍てつく寒さは残るもの、以前とは違ひ様々な場所で人の姿が目立ち、寂れていた町には微かに活気が戻りつつあつた

そして舞白は狡噺の運転する4WDでとある場所に向かう
明るい日差しがキラキラと真っ白な地面を照らしていた

???????????

「ここだ……

お兄ちゃん、ここで停まつて！」

「了解だ」

車両はとある酒場の前へ

町の人々は見慣れない車に警戒しているようだつた

舞白は車両から降りると白い花を手にして

真つ直ぐと酒場の入口へ向かう

狡噺も運転席から降りると

舞白の様子を静かに見守つていた

外のガヤガヤとした様子に気づいた一人の男が慌てた様子で店の扉を開ける
そしてその背後には瘦せこけた女性の姿

しかし芯のある瞳に美しい長い黒髪を持つ気品のある女性だつた

扉を開けた強面の男は舞白の姿を見るなり、人目を気にすることなく思いつきり抱き
しめる

「…お久しうぶりです、 テソン」

「マシロ…つ…」

相変わらず見た目は強面で大きな体なのに

大粒の涙を流し、声を上げながら何度も名前を呼ぶ
背後の女性も何かを察知したようで哀しげな表情を浮かべ、2人をそつと見守つてい
た

「約束通り、また会いに来たの」

テソンはそつと舞白の体を離すと涙目でじつと見つめる

変わらない真っ白な髪の毛に華奢な体

しかし前よりも整つた服装の舞白に不思議そうにしていた

「…マシロ…その格好は…」

「ああ…ちょっと色々あつてね…」

上下パンツスーツにシンプルな白いTシャツ、その上には外務省のマークが刻まれた
ジヤケットを纏つていた

あの時のようにボロボロのマスク姿ではない舞白に驚きを隠せない様子だつた

そして背後には軍用の4WD

明らかにあの時の状況とは違つていた

「そんな事よりテソン

これを受け取つて欲しいの

…時間はかかつたけどちゃんとあなたに会いたくて

あと…きちんとお会いしたくて」

背後の女性に目を向けると軽く会釈をする

4年前に娘と共に連れ去られたテソンの妻、アジャティだつた
約2ヶ月前にあの施設が解放され、無事自宅に戻つていたのだつた

舞白はそつと1輪の白い花を手渡す

冬に咲く美しい白い花、ムスカリだつた

ブドウのような花姿でとても可愛らしい花だつた

「わざわざこんな辺鄙なところまで…

ありがとう、マシロ」

「約束したでしょ！必ず会いに来るつて

……あなたにも、奥様にも…」

「…娘のアイは…」

娘の姿はそこには無い

テソンと妻のアジャティが顔を見合わせると
更に店の奥からドタドタドタと足音が聞こえてくる

「お父さん！ お客様??」

可愛らしい女の子がテソンの体に抱きつくように姿を現した
父親に似た優しい瞳に、美しい母譲りの黒髪を揺らしていた

「そうだよ！ 大事な大事なお客さんだ

：ほら、綺麗な花：お礼を言いなさい」

テソンが白い花を娘に手渡すと嬉しそうに微笑む
手渡したムスカリの花言葉は

”明るい未来”夢にかける思い”

テソンたちにどうしても渡したかつた花だつた

「ありがとう！白いお姉ちゃん！」

無邪気な笑顔を見せる少女

揺れる長い髪の隙間から舞白と同じ焼印が覗いていた
首元に刻まれた刻印

少女もまた、奇跡的にあの施設から母親と自宅に戻っていたのだつた
「…マシロ、あんたは英雄だ…、たつた一人で乗り込んで
マシロの仲間たちも手助けしてくれたみたいで…：

今じやこの一帯、あんたの話で持ち切りだよ」

施設内で囚われていた人々の数は町がいくつも作れるほどの数

テソンをはじめ、酒場で出会つたタツカ、日本人の白髪の少女が？を漬しに行く、仲
間を解放してくれる、などと広めた結果

そのような噂が後を絶たなかつた

実際に新疆ウイグル自治区の各地域には人々が多く戻り、活気を取り戻し、以前とは比べ物にならないくらい明るく、平和を願う国へとなりつつあつた

「私だけじゃ無理でした

……たくさんの人達が助けてくれたんです」

その言葉にギュッと舞白の手を掴むテソン
祈るように手を合わせる

「……本当に……マシロは女神様だ

……ありがとう……本当に、

ありがとう……」

その様子を背後から見守つていた狡噺

自分もチベットで同じような光景を目にしてきた

妹も誰かのために、人々のために力になっていたと感じると兄としてとても微笑ましかつた

刹那、舞白の手首のデバイスと狡噺のデバイスが同時に鳴り響く
相手は花城だつた

「…ごめんなさい、テソン

私もう行かないよ」

「おい！せっかく再会できただんだ！」

馬乳酒でもなんでもご馳走してやるのに…」

残念そうにぎゅうっとさらに手を握るテソンにクスクスと笑みを向けるマシロ
強面で見た目はとても厳ついのに、相変わらずの様子に懐かしさを憶える
そしてその手を握り返すと、テソンに視線をしつかり向けて口を開く

「私はこれからも世界を変えてみせる

…未来の子供たちのためにも、私は出来ることを精一杯…」

舞白の言葉に穏やかな笑みを浮かべると
再びテソンは舞白を抱きしめた

短期間の仲だつたものの

彼女の行動や、時折見せた少女の一面
まるで自分の娘のように感じていた

「必ずまた会いに来てくれ

その頃にはきっと…この町は

もつともっと活気で溢れないと…」

「…約束、必ず会いに来るね」

2人は体を離すと笑みを向け合う

背後の妻と娘に再び会釈をすると

舞白は兄の元へと駆け出す

そして狡噺とまた、テソン達に軽く挨拶すると

2人は車両へと乗り込んだのだつた

離れていく車両に手を振り続けるテソン

その表情は穏やかで、以前の強面の面影は薄くなつていた

?????????????????

舞白は外務省がまとめたとあるデータを見る
いくつもの名前が羅列されているデータ

その中に、あの子の家族の名前は載つていなかつた
そして、タツカの妹、ダナリザも名前は無い。

そして同時に、嘆かわしい話も

舞白の耳に飛び込んできていた。

「…あの子、もう死んでしまつていたの」

舞白がこの国に赴くきつかけとなつたあの少女は
既に病で亡くなつていたと報告を受けていた
そして探していた家族も全員、？に虐殺されていたのだった
助手席で哀しそうに俯く舞白に

狡噺はそつと声をかける

「全員が全員、助けられる訳じやないさ

それほど世界はまだまだ戦争で溢れてる」

「……うん」

「お前はこれから、そういういた状況にも立ち向かわなければならぬ」

未だに俯く舞白

その姿を見兼ねた狡噺はさらに言葉を続けた

「お前は、あの組織に半端な気持ちで立ち向かつたのか？」

「…違う」

「だれかを代わりに見殺しにしたか？諦めて逃げ出したか？」

「……違う」

「お前は命を落としかけてでも、その体に大きな傷跡を残しながらも必死に出来ることをやりきった、そうだろう？」

：それでも納得いかないなら、もつとタフに、強くなればならない、それだけだ」
兄の言葉が胸に刺さる

その通りだった

体に刻まれた刻印を見るたび

恐らくその悔いを永遠に思い出すだろう

そして同時に、自らを奮い立たせる烙印でもあつた

槇島に埋め込まれた首の烙印、そして今回の烙印

舞白に刻まれていく印はどれも大きな理由を抱え込んでいる
それと共に生きていくと、決めていた

郷里へ還る

車を抜け、雪で覆われた真っ白な草原を車両が音を立てながら駆け抜けていく。
一面にひろがる真っ白な雪。

そして青く澄んだ美しい空。

この国を発つ最後の最後に、テソンに再会するという目標を達成させ、その表情は安堵を纏つた様子。

隣に居るのは最愛の兄。

そして再び、自分の居場所を見つけることも出来、

目の前のその光景が祝福してくれているような気がしていた。

清々しい雰囲気を纏う妹を横目で見る狡噺は、表情には出さないものの漸く再び共に歩き出せる喜びに包まれていたのであつた。

「もう、寄るところはないな？」

「うん、大丈夫だよ

：ていうか、これ以上花城さんを待たせる訳にも…」

デバイスに入る連絡

それは”いつまで道草を食うつもり?”というもの

向かう先は、大昔に利用されていたチャルチャン空港の跡地。

そこには外務省の航空機が待機していたのだつた。

「久しぶりに日本に帰る心境は？」

「うーん……不安も感じるし、でも嬉しい気持ちもあるし、なんとも言えないなあ」

今日、6年ぶりに日本へと帰還する舞白。

正直帰れるることは嬉しく感じるも、ガラツと変わるであろう環境に不安を抱いていた。

再び監視社会に戻ることや、外務省の捜査官という未知の役割を担つた本人にとつて、なんとも言えない気持ちだつた。

だが同時に、再び皆に再会出来る期待や世のため人のために働くと思うと嬉しさを感じられる。

「そんなお兄ちゃんこそ、どう思つてゐるの？」

ひよこつと隣の兄に顔を向け、

そんな兄はどう思つてゐるのか気になつてゐる様子だつた。

元公安局の刑事課に身を置いていた兄にとつては、外務省は畠違い。

そして

”組織に所属するとやりたくない事をやらされる”

と以前口にしていた兄が、まさか再び自ら選択して組織に入ることに疑問を解決抱いていた。

「なんと思わないさ、目的は違えどやる事はほぼ同じ

俺も成すべきことを成す、お前と同じだよ、舞白」

具体的にものを話さない兄に、若干つまらなさそうに口を尖らせるも、続けて狡噺は口を開く。

「…ただ、唯一の肉親のお前と一緒に何か行動でくるつて言うのは悪い気はしない

危険なのは変わらないかもしけないが隣にお前がいる、それだけで兄ちゃんは幸せだ」

「……」

変わらない妹への想いに、

恥ずかしそうに顔を逸らす舞白。

「まあ、日本に戻つたら即訓練だ

久しぶりに俺がつきつきりで相手をしてやるよ」

「お兄ちゃんスバルタだからなー…でも楽しみ」

「俺もお前の蹴りを喰らうのは恐ろしい」

互角と言つても過言ではない2人の身体能力。

そんな会話を交えつつ、ふと狡噺は思い出したかのように懐からあるものを取り出す。

「…そうだ、

お前にこれを返さないとな」

「？」

ポンつと投げられたのは見慣れたりボルバー銃。

霜月に渡していた大切なものだつた。

「あー！これ！

：美佳ちゃんが返すの忘れて持つて行つちゃつたのかと思つてた」

「そんなわけないだろう？」

そもそも監視官でも本物の銃を持つには許可が必要だからな』重厚感のあるリボルバー銃を眺めると、そつとジャケットの内ポケットにしまう。

「まだ持つてたんだな」

「勿論

：御守りみたいになつてるから」

槇島の頭を射抜いたリボルバー銃。

トリガーに指をかけた感触は忘れられるはずもなかつた。

「槇島聖護に全てを奪われて怨んで、

間違いくこの手で殺したはずなのに

：何故か心のどこかで、まだ槇島聖護が私の中で生かされてる

ふとした瞬間にいつも脳裏に浮かぶ人物。

未だに執拗に現れる彼の姿を、心の底から怨む気持ちは既になくなつていた。

何故なのか、それは6年経つた今でも分からぬ。
死にかけた時も、何故か彼に生かされ、今に至る。

狡噺も、微かに舞白から感じる楳島の気配。

それは2年前から変わつていなかつた。

しかし昔とは違ひ、その事に關して狡噺は特に不安を感じてはいなゐ様子。

「今のお前なら何も心配はしてない

ただ、もう一人で抱えるのはもう無しだ

：組織に所属するのであれば、余計分かつてると思うがな」

「分かつてるよ、大丈夫

もう無茶はしないよ」

そつと左手で首に触れ、クスッと笑みをこぼす。

そんな妹の頭を、運転席から狡噺は手を伸ばすとワサワサと撫でるのだつた。

?????????????????

「ちよつと、あなた達：どこほつき歩いてたの？」

空港にたどり着き、寂れた滑走路の脇に車が停められると
2人は荷物を抱え車両から降り立つ。

兄妹を出迎えた花城は、

腕を組み呆れた表情を浮かべていた。

「申し訳ありませんでした、花城さん」

その様子にいち早く、舞白は頭を下げ謝罪を述べる。

そしてどことなく清々しい雰囲気を醸し出した舞白を見ると、微かに笑みを浮かべて
いた。

「舞白、これで心置き無く日本に帰れそうかしら？」

「…はい、お陰様で」

舞白はふふふっと笑みを浮かべ、抱えていた大きな黒いカバンをギュッと抱きしめ

る。

その様子を隣で穏やかに見守る兄の姿。
外務省の新部隊を担う2人のその姿に、
花城は改めて良い人選をしたと考えていた。

「なら良かつたわ

……それじゃ、すぐに出発よ?

早く乗りなさい」

花城は目の前の航空機に目を向けると、

2人に早く乗り込むように促す。

舞白は荷物を更に抱きしめ、ギュッと目を瞑ると深く深く息をする。

「……ふう———」

その様子の妹を見兼ねた兄は

背中をポンポンと押す。

目を開け、隣の兄を見上げ

2人は目を合わせ笑みを浮かべる。

2人は歩き出す

「うん、帰ろう」

「日本に、帰ろう…：舞白」

最終章

監視官補佐 狡噛舞白

・・・・・

2118年 7月 東京

公安局刑事課一係 刑事室

あの時から変わらない一係の面々。

全員が、ある人物へ視線を向けていた。

「皆、座つたままでいいから聞いて？」

……こちらは以前話した外務省の……

つて、説明は不要かもね？」

常守がその人物の隣で嬉しそうに笑みを零していた。

背後のデスクでは、霜月がやれやれと言わんばかりの表情を浮かべその様子をただ見つめる。

視線を一点に集める先に佇むのは、白髪の女性。

ようやく、板に付いてきた敬礼をすると真剣な目付きで皆に目を向ける。

「外務省行動課、捜査官の狡噺舞白です。

本日より3ヶ月という短い期間ではありますが、監視官補佐としてこちらでお世話になります。

『ご指導ご鞭撻の程、よろしくお願ひ致します』

肩あたりまですっかり伸びた白髪、

上下パンツスーツ姿の舞白の姿は、以前よりも更に逞しく感じさせる。

「前回、花城さんが来た時は、内閣官房が推進する省庁間人事交流という名目だつたけど、今回は違うの。」

新たに結成された”外務省行動課”。

今後、更に上手く連携できるように、そして彼女の育成の為に、外務省直々にお願いされた事なの。」

常守が簡単に説明をする。

舞白は公安局に所属は勿論したことも無く、ドミネーターの事やその他諸々、知らな
いことばかりだった。

それを見兼ねた課長の花城が、直々に局長を通し依頼をしたのだつた。

見慣れた顔が目の前にあると、舞白は一気に緊張が解け、笑みをこぼし始める。

「また、皆さんにこういった形で再会できたこと、とても嬉しく思います。足でまといにならないように精一杯頑張ります！」

気づけばいつもの天真爛漫さが現れると、他のみんなも笑みを浮かべていた。

目の前で穏やかな表情を浮かべる宜野座と目が合えば、互いに少し恥ずかしい気もある。

その様子に気づいた背後の霜月は、面白がるように茶々を入れる。

「宜野座執行官、うつつを抜かさず

きちんと仕事してくださいね？」

「…………当たり前だろう……」

宜野座は咳払いをすると、茶々を入れた霜月に”後で覚えておけ”と言わんばかりの視線を向けていた。

「まさか、狡噺の妹の舞白ちゃんと仕事をする日が来るなんて……」

六合塚も成長した姿の舞白に驚くも、昔の頃から変わらない、あどけなさが残る面影に微かに笑みを浮かべていた。

「((…外務省行動課…))」

こんな、まだ若い女性が…」

須郷は無言のまま、自分が過去に断つた外務省の特殊部隊に、まだあどけなさが残る女性が入るという事実を知り、眉を顰めている様子。

「……よ、よろしくお願ひします！」

雛河は全く知らない未知の相手、しかも歳下の女性が現れたことに少し動搖している様子だった。

「予想以上の激務にどこまで耐えられるか見物だわ、舞白？
せいぜい先輩の足を引つ張らないように…」

「主に、育成担当を担つてもらうのは霜月監視官になります。

……美佳ちゃん？ お願いできるわよね？」

突然の常守の言葉に思わず席を立つと、声を裏返させる霜月。
「な！ なんでですか？」

前回も花城フレデリカさんが来た時は先輩が担当…

「だから、今回は美佳ちゃんにお願いしようつて決めたの。

局長も、花城課長も問題ないって言つてたし」

面倒事を押し付けられてしまつたと、霜月は目の前で満面の笑みを浮かべる舞白に目を向ける。

口をポカンと開けたまま、驚きを隠せない様子だつた

「よろしくお願ひしますね？」

”霜月監視官”

「……嘘でしょ……」

ガクツとデスクに突つ伏す様子を、面白そうに見つめる舞白。

思わぬ再会、そして予想外の処遇に霜月の苦勞は絶えなさそうな様子。

「それじゃあ、早速。

分析室、食堂、執行官の専用フロアの案内、

諸々お願ひしてもいい？」

常守は、デスクに力なく突つ伏す霜月の耳元で早速仕事を伝えると、ゆっくり頭を上げる。

「……局長命令なら仕方ない……」

やつてやるわよ……」

ボソッと呟けば勢いよく立ち上がり、自分よりはるかに背の高い舞白を見上げ、腕を組んでは言葉を発す。

「じゃあ、行きますよ？」

”狡噺監視官”

グイッと腕を引かれると、皆のデスクの間を抜け、刑事室から2人は姿を消す。その後ろ姿を全員が見送る。

次世代のエースの2人組がどこまで活躍するのか、期待に溢れていた。

・ · · · ·

監視官権限

・・・・・・・・

カツカツカツと早足で各場所を案内する霜月。

その後ろで、呑気に笑っている舞白。

同じ歳で全く境遇が同じ2人なのに、

性格は全くもつて正反対な2人。

相変わらずの呑気そうな舞白の様子に、気に入らないような素振りを見せるも、内心
また会えたことに誰よりも喜んでいた。

???????????

今後、舞白が利用するであろう部屋を全て案内していく。
食堂、トレーニングルーム、備品管理室などなど……

そして最後に訪れたのは、分析室
かなり久しぶりに再会できるであろう人物に、舞白は胸が高鳴っていた

「ここが分析室……」

唐之杜分析官が常駐してゐるわ。

彼女は、いわば公安局の要と言つても過言ではない……」

分析室の扉が開かれると、真っ先に気づいたのはモニターの前でタバコを吹かしていた唐之杜志恩。

久しぶりすぎる再会に、唐之杜はすぐさまタバコを灰皿に押し付けると、入口で佇む舞白に思いつきり抱きつく。

「あら～！ようやく来てくれたのね、舞白ちゃん」

「お久しぶりです、志恩さん」

2人は視線を合わせるとほほ、にこやかにほほ笑む。
その様子を隣で見ていた霜月は、驚いた様子だつた。

「……え？ ふたりとも知り合い？」

唐之杜は舞白の両肩に手を乗せたまま、驚いた様子の霜月に視線を向ける。

「知り合い何も、慎也君の妹だもの。」

よく話は聞かされてたし、たまに電話もしてた仲なのよ？」

過去、楳島の事件で怪我を負った時も付きつきりで管理してくれていたのは紛れもなく唐之杜だつた。

中学生の頃は、狡噺に連絡先を聞いて恋愛相談をした事も……。

唐之杜は久しぶりに、間近に舞白の顔を見ると、両手で頬に触れ、少女から女性へと逞しくなつた様子をまじまじと見つめる。

「やつぱり、慎也君そつくり。」

「どことなく弥生にも似てきたわね？」

「……あんな可愛らしかつた子がこんなに立派になるなんて、私も老けるわけね」

「志恩さんも変わらず、美人で色っぽくて素敵です」

「お世辞も上手くなつて……相変わらずの物言いもお兄さん譲り、

お姉さん嬉しいわ！」

ぽんぽんと肩に乗せていた手で肩を叩けば、そつと体を離す。

分析室に来たのはこれが2回目。

以前、楳島の顔を記録するべくメモリースクープをした場所。

それがこの分析室だった。

「今日から3ヶ月間よね？」

ドミネーターの生体認証やら、やること多いと思うけど、何かあればいつでも連絡
ちようだいね？」

「はい、ありがとうございます。」

ふふふっと唐之杜は上機嫌で笑みをこぼしていた。

すると何かを思い出したかのように、唐之杜は霜月へ視線を向ける。

「美佳ちゃん。

もう執行官のフロアには案内した？」

「はい、先程……」

「何かありましたか？」

霜月の言葉に妖しげにニヤッと笑えば

2人にとある事を言い放つ。

「舞白ちゃんは監視官権限が与えられるから、執行官の部屋に自由に出入りできるわよ

？」

……勿論、宜野座君の部屋にも……」

最後の一文を色っぽく口にすれば、真っ先に反応したのは霜月。

何かしら天然な舞白は、ただただ嬉しそうに笑っているだけだった。

「ちよ、ちよっと！ 志恩さん！ 何を言つて……」

「あら？ 私は出入りができるとしか教えていないわよ？」

かーーっと顔を赤くする霜月を、不思議そうに舞白は見つめていた。

出入りができる、と知れば

舞白はとあることを思い出す。

「ノブ……、宜野座さんの部屋ってことは

もしかして……ダイムにも会えるつてことですよね？」

宜野座の愛犬、オツドアイが美しいシェパードのダイム。

昔から舞白の良き遊び相手になつてくれていた相棒でもあつた。

「ええ、そうよ？」

：：：というか、そつちなのね……」

宜野座〈ダイム

何故かそのように変換されている様子に、唐之杜は呆れたような笑みを向けていた。

「ど……とにかく！ もう分析室はいいでしょ！」

次に行くからついてきなさい！」

まだ顔の赤さが抜けきらない霜月は

グイグイと舞白の腕を引っ張ると分析室から離れていく。
「志恩さーーん！…3ヶ月間よろしくお願ひします！」

部屋へと手を振り、大声で唐之杜に呼びかけ

分析室の扉が閉められる。

なぜか、まだ顔を赤くしている霜月

そんな彼女を、横から面白がるように見つめていた。

「美佳ちゃんつて、意外と可愛い……」

「煩い！ここでは私が上司！それを忘れないことね？」

「はい、霜月監視官」

「そう、それでいいの、それで」

スタスタと更に早足になる霜月に、
再びしつかりとついて行く。

・・・・・

僥倖の再会

・・・・・・・・

霜月による各施設の案内が終わると、ちょうど昼時に朝も早かつた為、朝食をとる暇もなく、かなり空腹状態だった。霜月は急遽、仕事の関係で立ち去ると舞白はそのまま食堂へと直行した。

???????????????

景色が一望できるだだつ広い食堂

窓際の席に座ると、オムライスと

霜月オススメの、タピオカマンゴージュースを注文する。

ふと、ほかの席に座る公安局員達に目を向け、美しい眺望が広がる外にも目を向けると、平和な世界だな、なんて心の奥底で考えていた。

ぼんやりと外を見つめる舞白。

すると、座っていた席の対面側にとある人物が現れる。

「狡噺監視官補佐、

ご一緒しても宜しいですか？」

「……宜野座執行官」

ちょうど、勤務を終えた宜野座が現れると

舞白は驚いた様子で視線を向ける。

こうやつて2人つきりで会うのは、あの時以来だつた。

日本に戻つてからの数ヶ月間の話、

兄の現在の様子など、次々とノンストップで舞白の口から語られる。相変わらずの様子に、宜野座はほつとしている様子で相槌を打ちながら聞き入つていた。

「まさか、お前が外務省とは、

初めて常守から聞いた時は驚いたよ。」

「私も、まさか日本の省庁にお世話になるなんて想像もしてなかつたよ？」

久しぶりに食事を共にする光景は

何年も前のクリスマス以来だつた。

あの時と同じく、舞白はオムライスを口にし、
その姿を見ると、まだまだお子様だ、なんて考える宜野座。

「…そりいえば、征陸さんは？」

既に、公安局を退局していたとは聞いていたものの、その後のことが気になり問い合わせる。

宜野座は小さく笑み浮かべ、口を開く。

「今は板橋の専門施設でのんびり暮らしてるさ。

今度、会いに行つてやつてくれ、きっと喜ぶ

「私もずっと会えてないから、気になつて……。

元気そなうなら良かつた。

次の非番の時にでも会いに行こうかな？」

空になつた皿を回収していくドローン。

テーブルに残されたジュースを口に含み、ニコニコと笑みを向ける。ふと、この状況がどれだけ幸せなことなのか、改めて考えていた。

「家の片付けは済んだのか？」

「うん……、

…とか言つて、昨日やつと一通り掃除を終わらせたの。

お兄ちゃんも、たまに帰つてくるとか言つてたけど、仕事もあるし……でも、またあの家に戻れて凄く嬉しい」

舞白が兄と暮らしていた大切な場所。

狡噺の名前で残されていた海辺の家、

楓島と争つてから、荒れたままの状態だつた。

必ず、いつか戻りたいと考えていた舞白、

その夢が叶い、心の底から喜んでいる様子だつた。

「あの家からだと、公安局までのアクセスも悪くないし、

それに、おばあちゃんが入院してゐる病院までも通いやすくて。」

先日、数年ぶりに兄と祖母の元へ向かつた舞白。

しかし、状態はかなり悪いみたいで、長くないと宣告されてゐた。

唯一、ずっと見守つて支援をしてくれていた祖母。

結局、兄妹揃つて裏切つてしまつたような状況に、最後の最後まで償いたいと、兄と
2人で通い詰めると決めていたのだつた。

「……日本に戻つてきてよかつた。

たくさんの人と再会する度に、私はそう思つてる。

それに、また”ノブ兄”にもこうして再会できた。」

舞白はそう口にすると、宜野座に満面の笑みを向ける。

宜野座の表情も、朗らかな優しい表情をしてゐた。

「……あのゝ……」

お取り込み中ごめんなさい」

刹那、2人の傍らに現れ、申し訳なさそうに声をかける人物。舞白と宜野座はバツが悪そうな雰囲気を漂わせていた。

「お疲れ様です！常守監視官……」

ふふふふつと、面白がるように含み笑いをする常守。

宜野座も自分の綻んだ表情を見られると、微かに恥ずかしさを隠すように顔に手を当てる。

「休憩中にごめんね、舞白ちゃん？」

局長があなたを呼んでるの、私も美佳ちゃんも同席するよう言われてて……」

「……局長が？」

その言葉に微かに眉を顰める舞白。

外務省の人間に何の用があるのか、それに常守と霜月の同席と聞けば、宜野座も内心不思議がっていた。

しかし、舞白には心当たりがあつた。
それを察すと席から立ち上がる。

「すぐ向かいます、常守監視官。

……では、宜野座執行官、

また明日の勤務でお会いしましよう？

今後とも、よろしくお願ひします。」

軽く会釈をし、舞白は常守に連れられ食堂を後にする。
残された宜野座は、外に視線を向け、微かに笑みを浮かべていた。

・ · · · · · · ·

真白な君

・・・・・

公安局 局長室

扉が開かれると、3つの影が足を踏み入れる。

常守、霜月、そして舞白。

部屋の奥のデスクにて、両肘を立て、顔の前で手を組み、目線を送っているのは、局長の禾生壌宗。

銀髪のショートカットに角縁眼鏡のスマートな印象の女性。その目つきは鋭く、舞白をじっと見つめている様子だった。

「失礼します。

…外務省行動課の狡噺舞白監視官補佐をお連れしました。」

常守がまず口を開く。

3人は舞白を真ん中に挟む形で、局長の目の前に立つていた。

霜月は何故、わざわざ外務省の人間をここに連れてきたのか。

そして何故、常守と霜月も同席なのか不思議そうにする。

常守は局長の出方を警戒しているようにも見えていた。

「本日よりこちらでお世話になります。

外務省行動課 特別捜査官 狡噺舞白です。」

舞白は真っ直ぐに禾生に視線を向け、敬礼をする。

禾生壌宗の正体は何となく分かっていた。

昔、楳島の言つていたことが本当なのであれば、目の前のこの人物はシビュラシステ
ム。

舞白と同じ免罪体质の特殊体质を持つ、殻を被つたただの作り物の人間だと。

禾生は口元を緩ませ、微かに笑みを向けると舞白をじつと見続けていた。

「……」苦労だったね、狡噺舞白。

国外の調査に、複数の任務の対応、さぞ疲れているだろう?」

「いえ、問題ありません。

公安局でもしつかり、任務を全うさせて頂きます。」

無表情で淡々と言葉を並べる舞白。

冷たい、互いの視線が交差する。

そしてその瞬間、禾生は席から立ち上がると

隠し持っていたドミネーターの銃口を舞白に向ける。

「なつ……何?」

冷静な2人を横に、霜月はかなり驚いた様子で後退る。

全く動搖しない2人に目を向けると、霜月は状況が飲み込めていない様子だった。

禾生の目が青く光る。

そして彼女のサイコパスを読み込んだのか、その結果に満足したのか、不気味に笑みを浮かべるのであつた。

「……やはり……相変わらずの美しいね、君のサイコパスは。」

外務省の特別捜査官である舞白のサイコパスは

ドミネーターで計測できないはずだと、霜月は不信感を抱く。

「どういふこと?」

……舞白のサイコパスは計測出来ないはずじや……」

ドミネーターを向けたとしても、普通ならば

犯罪係数の特定には許可が必要だと、トリガーガがロツクされる仕組みだつた。

しかし、霜月も知つてゐる通り

禾生壌宗はシビュラシステム。

全く動搖しない、寧ろ微かに笑みを浮かべる舞白に目を向ける。

「……その銃口を下ろしなさい、シビュラシステム」

銃口を手で払い、常守が鋭い目付きで禾生を睨みつける。

異様な光景に、禾生と舞白を交互に見続ける霜月。

「フフフ、そんなに警戒しないで欲しいな。

シーインから、2年ぶりの再会だ。

……少し語ろうじゃないか?」

ゆつくりドミネーターを下ろし、テーブルに置く。

そして再び視線を舞白へ向けると、口を開く。

「君の知性、深淵なる洞察力、

…それはシビュラシステムの更なる進化において我々が求めて止まないものだ……」

「……そうやつて、槇島も口説いたのね？」

「懐かしい名前だ。

…あれは本当に惜しかった……：

君と、君の兄に殺害されたのは本当嘆かわしい……」

刹那、いつもの頭痛と耳鳴りに襲われると

微かに表情を歪ませる舞白。

咄嗟に左手で首を押さえると、深呼吸をする。

「……まさか、舞白……」

今までの行動や、禾生との会話に

ピンと来た霜月。

紛れもなく、舞白は免罪体質者

そしてシビュラの正体を知っているような様子に眉を顰めていた。

「免罪体質”の君を、

本来であれば6年前に、強引な手段を使つてシステムの一員に取り込む予定だったのだが……。

「よく逃げ切ったね、狡噺舞白」

”厚生省特別機関の保護対象者”

あれはただの表面上のフェイクでしかなかつた。

”保護”ではなく、強制的に取り込むための”手段”

舞白のＩＤ経歴の謎が払拭された霜月は

視線を禾生へと向け直す。

「まだ、諦めないつもり？」

なんとか痛みに堪えながら、目の前の相手を真っ直ぐに見据える。

「……いいや、君とは約束を交わしたからね。

我々もそこまで薄情ではない。」

”君が今後どのように生き残つて、どのようにこの世界にその存在意義を齎すのかと
ても興味深い”

過去、そう言い放つたシビュラシステム。

この世界に役に立つと、判断されれば
彼らは取り込まないという約束だつた。

「……ちらとしては、外務省の特殊部隊に、君のような人材を置いておくのはむしろ好都合だと判断した。

シビュラシステムの真実を知り、特異な免罪体质を持つ、
そんな君を利用する他ないとね。」

要するに、手駒をほかの省庁に置けることを、むしろ都合良しと判断しただけ。
逆に無所属で、何も利用価値がないと判断されていれば、即取り込まれていた。

花城と常守の判断は間違つていなかつたのだ。

禾生は、テーブルに置いていたドミネーターを再び手に取ると、正面に立つ舞白に手渡す。

受け取つた舞白の瞳が青く染まる、手首のデバイスと連動し、指向性音声が舞白の脳内に響き渡る。

『携帯型心理診断 鎮圧執行システム・ドミネーター、起動しました』

『ユーザー認証 狂囂舞白 特別捜査官
INITIALIZING』という文字と共に、舞白のID情報などが表示される

外務省行動課所属 有期使用許諾確認
適正ユーティリティです』

「狡噺舞白、君には大いに期待している。

常守監視官、霜月監視官、彼女を頼んだよ。

下がつてよろしい。」

舞白はドミネーターを握りしめたまま、椅子に座る禾生をじっと見つめる。

「真っ白な君に、再会できたこと、

我々は欣喜雀躍しているよ。

精々頑張りたまえ。」

禾生の怪しげな笑みに気味悪さを憶える。

舞白は頭を下げる。

「…失礼します」

そのまま常守と霜月に促され

局長室を後にするのだった。

再会の白

・・・・・

一面に広がる、真っ白な砂浜
地平線の先には、美しい夕日。

穏やかな波の音に、裸足の脚に纏い付く潮水。
自宅のマンションの目の前の砂浜を、静かに一人で散歩をしていた。
全てが始まつたこの砂浜、

かつての親友、咲良と歩いたこの砂浜を、
しつかりとした足取りで歩く。

可愛らしい咲良の姿が、今にでも蘇りそうだつた。
あの夜の光景が、言葉が、舞白の脳裏に蘇る。

? ????

「…ね？私たちの心はここにあるの」

「…舞白の色相がまつしろで綺麗な理由、ハツキリわかつたかも」

「……心は此処に」

”私たちには心があるでしょ？”

心、人に対する気持ちだつて、

それは機械に、システムには奪われない…”

脚を止め、砂浜に座り込む。

沈んでいく夕日をぼーっと見つめ、気持ちの良い潮風に目を瞑る。

そつと、右手を左胸に当てる、

ドクドクと動く心臓、深呼吸をするとゆつくりと瞼を持ち上げる。

公安局の監視官補佐として働き始めて数日。

システムに支配された日本は、どうもまだ慣れなかつた。

数值や色相に惑わされ、その人本来の心が見えなくなつてしまふ。

それでも、この日本は世界紛争から免れ

誰もが羨む、平和で素晴らしい国に違ひなかつた。

その間に人々は、何を犠牲にし、そして、何を忘れ去つたのだろう。
分からなくなつていた、あの時の自分の言つていた心。

それはなんだつた？

両膝をグッと抱え込み、顔を埋めていると

背後から突然、頭をポンポンと叩かれる。

「こんな所で、何してるの？」

振り返ると私服姿の霜月が、仁王立ち姿で舞白を見下ろしていた。

突然の登場に驚いたのか、目を丸くして見上げる舞白。

「……なんで、そつちこそ、

こんな所で何してるの?」

「昨日言つてたじやない……

”明日は非番で暇だから、勤務明けたら遊びに来たら” つて。
……いざあんたの家に行つたら誰も出てこないし、まさかと思つて浜辺に来てみた
の。」

ばーつとしていて気づかなかつたのか、デバイスには霜月からの着信の履歴が数件
残つていた。

「自分で呼んでおいて、何よ、本当に……」

「まさか、本当に来てくれるなんて思わなかつた」

「……あんた、私がまるで”心がない人間”みたいじやない、そんな薄情じやないわよ。」

はあーあ、とため息を漏らし

霜月もその場でパンプスを脱いでは、舞白の隣に座り込む。

ふと、舞白の横顔を望み込むと、いつものヘラヘラとした様子ではなく、神妙な面持
ちに、珍しいな、なんて考えていた。

「良いわね

家の目の前に海が広がつてゐるなんて。」

「そうでしょ?

海も砂浜も綺麗だし、人も少ないし……」

でも、あの悲惨な事件が起きた場所。

霜月も勿論、その内容は全て知っていた。

沈みゆく夕日をのんびりと眺めていると、霜月は不意に問いかける。

「監視官補佐、

……というか、ほぼ監視官と役割は変わらないけど、働いてみてどう?」

「そうだなあ……、正直こんなに大変だったなんて思つてなかつたかも。サイコパス、色素が濁つた人をドミネーターで打つて解決、その程度だろうな、なんて考えてた自分が甘かつたわ」

脚をグツと伸ばし、潮水をパチャパチャと脚先で漕ぐ。

外務省行動課のように、力任せで相手を制圧するわけに行かない。
相手の心理状況を把握し、執行する。

何より、ドミネーターの存在。

「私、ドミネーターがどうも苦手で。」

隣の霜月へと視線を向けると、言葉を続ける。

「引き金付いてるからこそ、引き金を引く責任はドミネーターを握る人間に委ねられて

る。だからこそ、自分が正しい判断ができなければならない。無機質なシステムの代わりに、私たちはその心を持つていなければいけない、常に考えなければならない。」

「今まで本物の銃を握つてた人間が何言つてるのよ」

「本物の銃とは違う。」

良い悪いで引き金を引くのと、相手の心理状態を深堀した上で、引き金を引くのとは全く違う。」

紛争地にいた年月が長かった分、昔の、何にも染つていない、あの時の真っ白な自分の心が、失くなっている気がしていた。

夕日が半分ほど沈む。

海は真っ赤に染まり、感傷的な気持ちを彷彿させるような景色が広がっていた。

「目に見えないもの、思いや感じや考えのことをひとまとめて”心”と呼んでいられるけれど、同じ目に見えないものの中でも、動いて変わる部分と、動きも変わりもしない部分とがある。前者が感情、後者が精神。感情は感じるもので、精神は考える物”：」
とある本の一文を読み上げる。

おそらく、本の一文から抜粋したのだろうと、霜月は分かつていた。

暇さえあれば、紙の本を読んでいる読書三昧な人物だと、一緒に働いて初めて知った。時たま、哲学的な事を言い放つたり、何かの本から言葉を引用する舞白。

霜月は静かに聞いていた。

「ただ、シビュラの意のまま、執行するべきじやない。

数值でも色でもない、目に見えない”何か”を、相手の感情と精神を、誰よりも理解して、誰よりも考えて、私たちは引き金に指をかけなければならない。」

哲学的な考え方を、次々と発する舞白にため息を漏らす霜月。

「あんたつて本当に、博覧強記。

もうそれ以上、混乱させるようなこと言わないでよ。

…考えすぎて色相濁りそう……」

「へへへつ……つい考え込んじやつた。」

刹那、ぐーーっと舞白は伸びをすると、その場に立ち上がる。

夕日をじつと見つめ、美しい景色に目を奪われる。

霜月も同じく、その場から立ち上がり、海を眺める舞白を見据える。

「舞白が免罪体質の理由がハツキリわかつたかも。

…純潔といふか純粹といふか、でも時たま冷たい瞬間があるし。

誰にも理解されない、そんな感じ。」

「…美佳ちゃんには理解して欲しかったんだけどな～」

「やめてよ！理解すればする程、色相濁るわ」

ふと、咲良の顔を思い出す。

”舞白の色相がまつしろで綺麗な理由、ハツキリわかつたかも”

あの時、この場所でそう言い放つた咲良。

ついその姿を、咲良と重ねていた。

じつと霜月を見つめる。

その様子にぷいっと顔を背け、霜月は歩き出す。

「ていうか、早く家に案内しなさいよ？

日も沈みそだだし、脚も濡れて冷えてるし、あたし勤務明けなんだからね？」

「…………」

「聞いてるの？舞白？

ぼーっとしないで、早く行くわよ？」

有無を聞かずとも、さっさと先へ先へと進む霜月。

舞白も海へ背を向け、歩き出そうとした瞬間、誰かに背後から腕を引かれるような気がした。

可愛らしいワンピースに身を包み、栗色の髪の毛を2つに結っている少女。柔らかな笑みを浮かべていた。

夕日に照らされたその姿は、とても神秘的だった。

『舞白……』

「……咲良……」

手をのばすも、感覚はない。

『また会えた

……あの時の、まっしろなあなたに』

体の向きを、咲良が立っている海へと向ける。

咲良の腕に触れようと追いかけようとした瞬間、再び誰かに掴まれる。

「ちよつと……そつちは海、着衣水泳でもするつもり？」

様子がおかしいと、霜月はすぐに気づくと引き返し、舞白の腕を掴む。

その表情は、不思議そうに眉を顰めていた。

「…ごめん、ぼーっとしてたみたい。」

「なにやつてんのよ。

ほら、行くわよ。」

「うん」

再び踵を返す。

霜月とくだらない話をしながら、前へと進む。

夕日が沈んでいき、海は闇に包まれていく。

歩いていると、再び視線を感じる。

でも、もう振り返らなかつた。

真っ暗闇の海から、銃を握ったぼろぼろの姿の自分が、こちらを見つめていた。
世界を放浪していたあの時の自分が。

微かに口角を緩め、笑っている様子だつた。

P S Y C H O — P A S S S i n n e r s o f t h e S y s t e m
[c a s e . 4 再会の白]
| R e u n i t e d w i t h W h i t e |

〔完〕

▷ ▶ ? ▷ 後書きは活動報告にて